
綺語草子～草子シリーズ3～

空野妃紫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

綺語草子～草子シリーズ3～

【Zコード】

Z3118E

【作者名】

空野妃紫

【あらすじ】

草子シリーズ第三弾。まったく昴摩を無視して、自由に振舞う紅菜は、海の幽霊の愛人は作るは、妻だと名乗る女は現れるはで、とうとう昴摩の我慢も限界に達して、二人は喧嘩を始めてしまう。

1・涵渻

身も心も冷えていくような冬の海。おもく暗いのは雲だけではなく海もおなじだ。にじった水は荒れ狂つて人を恐々とさせる。浜辺は雪にうもれ海の暗さをいつそうひきたてていた。色づいた葉をとした木々の寂しさは無常の理を教えてくれているかのようだ。花、木、海、空、星、大地さえも変わらぬものはない。変化を起こしてときのなかに流れていく。

白い浜辺は波がよせまたひいていく。雪にとけるほどの白き狩衣に血のよに紅い指貫をまとつた美少年は雪に身をあずけている。美少年の耳に声がきこえる。

「愛しい人。憐れむならばどうか一夜の契りをかわそつや。」

頬にふれる冷たい女の手に美少年は目蓋をあける。少年の頬も海風のせいで冷たくこじえている。少年は女の瞳をのぞきながらいつ。「これ以上はいけない。現の私と夢の君はちがうから」

美少年はそういう。恋焦がれる者を苦しむうな瞳でみつめると女は哀しみながらはなれてきえていく。

「酷なかた。こんなに私を恋狂させて、情けもかけてはくれないの」少年はたちあがると海にきえていく女にこう。

「あなたが私にほんとうに恋狂つてているといつのなら、私の願いはあなたのものだ」

そんな酷なことをいう少年に女は一筋の涙をながしていった。恋する男の願いをきくことがほんとうの恋の形だと少年はいうのだ。

「一夜もくれぬ酷い人。私の心を奪つたままかえつてしまふのね。あなたをまつがたのところへ」

美少年は妖しくほほ笑みいう。だれにいつたわけでもない。ひとり言のようにいった。

「私は欲ばかりだから」

海にきえた女は哀しい顔をしたままそれでもその瞳に少年への愛おしさをつのらせる。海にきえた女は去りゆく少年の心にすこしこもる「」のよつに言葉をのこす。

「雪をみておもいだして、せめてもの哀れみをひよつだい。愛おしい紅菜」

女がきえた海に背をむけ紅菜は歩みはじめる。葉をなくした木の影に鬼がかくれていた。鬼はあらわれると不服そうにいった。

「鬼女^{きじょ}あいてに戯れすぎだらう」

鬼は拗ねているのだろう紅菜の顔をみよつとはしない。いや、さんざんあの鬼女との情事をみていた。

「だれが戯れときめた？ 私は私なりに本氣だつたかもしけないだらう？ 昇摩」

「けつ、悪趣味」

紅菜の言葉に昇摩はそういうと悪たれた顔をしてさつていぐ。

紅菜はそんな昇摩の背中をみながらくすくすわらつた。まったくなにをしても形になる者、なにをさせてもそつがない者、それが紅菜だ。

（ふん、恋心もしらないくせに）

昇摩はおもいながらどんづんすすんでぐ。こんな逢引現場などにながながといったくはない。紅菜自身は恋に焦がれることはないと云うのに、他の者を恋焦がしては自分の虜にしてしまう。被害者はこの国中にいるのだ。そして、それは昇摩もおなじこと。

恋もしらぬ紅菜に恋知り鳥の教えを叩きこんでやりたい。昇摩の心には今日もかわらず恋風がふいているのだった。

昇摩は鬼女の嘆きのような海風に耳をすませる。この鬼女はもともと高貴な血筋の女だつた。身分ちがいの恋をしてその男と駆け落ちをし、この海に身をなげたのだ。一人は海にのみこまれた。しかし、男は浜につちあげられ助かり他の女と結婚してしまつた。

死して彼女はとなりに男がないことを嘆きさがしまわつた。そして、他の女と結婚してしまつてることをしり、その女と男を殺し

た。しかし、女の怨念はきえることなく怨念にとりつかれて鬼女となってしまったのだ。

鬼女になり果て、海にあらわれる男と契りをかわしては腑抜けにしてしまっていた。若い働き手を次々に腑抜けにされた年老いた漁師たちはこままりはて紅菜に依頼してきたのだ。あの鬼女をなんとかしてほしいと。

昴摩は漁師の依頼できたこの海をやつせとせりたかった。そして、いそぐように今度の依頼へとむかう。仕事がつまっているのだ。どうしてわざわざ紅菜がでむいでいるかといつと菜稚琉に三つ三つ決まり」とをいいわたされたせ이다。

一つ目は、朝夕に経を読むこと。

一つ目は、体術の稽古を怠らないこと。

三つ目は、仕事はすべて自分でかたづけること。

一つ目は仕事があるときには免除される。

どうして、おとなしく紅菜がいいつけを守っているかといつと決まり」とを破つた場合、そく螢蘭が紅菜を菜稚琉たちの屋敷につれもどし、いつさい自由のない修行、また修行、またまた修行の日々をおくらせることになつてているからだ。

つまり、あの紅菜ともあろう者が脅しに屈したといつことだ。螢蘭たちがあらわれて昴摩は今までみたことのない紅菜をしる。紅菜とならぶ者はいても紅菜のうえにたつ者がいるとはおもわなかつた。しかも、ふたりもだ。

都の屋敷に紅菜たちはきていた。えきびよあく疫病送の儀式のため鴨川をくだること七回。さすがの紅菜もすこし疲れ気味である。ここずっと仕事がつづいていて働きっぱなしだ。そこにこの奇妙な仕事。

「やつと休める」

紅菜はそうつぶやくとだらしなく横になる。この厄病送りの仕事がかたづいたのだ。一ヶ月つづいていた仕事も終焉を迎えたことになる。次の依頼がこないかぎりもう仕事はない。つまりこの疫病送

りが成功すれば、完全な完璧な休みだ。

三つ目の決まり「」と仕事をことわつてはいけないと「」ともふくまれており昴摩がみたこともないほど紅菜は働きつめでいる。素直に感心するとともにおどろいていた。「」今まで働けるやつだとはおもつていなかつたのだ。それとも、紅菜を「」までかりたてるほど修行は厳しいのだろうか。

眠そうにだらけている紅菜に布をかけると昴摩は紅菜をだきあげる。つめたい板のうえでよこになつてしまつた紅菜を畳みのうえに運んだ。

「うーん、夕方になつたらおひしくれ。おきておつとめするから。

・・・

紅菜はそれだけをいいの「」してあつとこつまに眠りについてしまう。返事すらきかずふかくねむつてしまつ紅菜をみているところまでしなければいけないのか、とおもつ。

「紅菜、紅菜。おきるよ。日がかたむいてるぞ」

紅菜は昴摩におこされたなんとか夕方に目をさますと掛軸だけがある部屋で夕方の経をあげる。経は朝般若心経だけなのだが、毎日一回しょひとおもつと大変なものだ。しかし、いちばん大変なのは昴摩だろう。このかん昴摩は耳をふさぎ、なるべく声のきこえてこないようになその部屋にはちかづかない。

ここに滞在する予定は半月。一五日だ。「」での仕事はいちおうおわつてはいるが、疫病がひろがつてるのは都のまわりばかりだ。そのことは政治におおきな影響をあたえる。

帝の政治がただしくないと流行り病や地震、洪水などの天災がおこるとされている。また、天災や疫病も帝がおさえなければならぬ。天災と政治は切つても切れない関係なのである。ゆえに猶予をもつて仕事にあたることになつてているのだ。そう、依頼主は帝。

帝は都のまわりをかこつよにはやつた今回の病をひどくきにかけて紅菜にしばらく都にとどまるよひにおつしやつたのだ。紅菜は半月ならとその申し出をつけた。

生野の屋敷には柏と円融が留守をあずかっている。なぜか屋敷の結界をやぶつて鬼族の王子が連日おしかけてくるので貴重品がおおいあの屋敷をあけっぱなしにしておくことができないのだ。

不本意ながら妖かしの知り合いがふえたこともあり紅菜はもう屋敷に強力な結界をはることはなくなつた。いちおう柏の意見をとりいれて簡単な程度のひくい結界ははつてあるが、その負担はぜんぜんちがう。

深々と雪がつもりまだまだ朝日もあびずあたりは身もこじるほどの冷気が支配している。しかし、紅菜の屋敷のまわりには朝はやいにもかかわらず、人々がむらがつていた。表の門を身分が高い者たちが裏の堀には身分の低い者たちがかこんでいるのだ。

ここ連日、朝と夕方にはあたりまえのようにくりかえされる風景。人々は紅菜の経のご利益にあやからうとしているのだ。昴摩が表にでてきてにらみを利かしても人々はまったく恐れることなくそのありがたい経がはじまるのをまつてている。

厳肅な朝の雰囲気のなか、これまた厳肅な紅菜の声がひびきはじめる。歌のような般若心経の経があたりを支配する。きく者の耳には天女が歌つているかのようにまた神が世を慈しみ慈悲を注ぐようにきこえる。

ある者はふかぶかと目をとじ神妙な顔つきでききいる者。またある者は病洞びようあや世情の苦しみから解放された顔をしてききいる者。涙をながし手と手をあわせて拝みながらききいつている者までいる。そんななかゆいいつ真つ青な顔をして苦痛のあまり眉がより皺ができていまにもたおれそうな者がひとり。人々には至幸の歌も妖かしには斬獲の歌にきこえる。耳栓をしているにもかかわらずこの威力。まじかできけば即死してしまうかもしれない。

呪即説呪曰羯諦羯諦波羅羯諦波羅僧羯諦菩提薩婆訶般若心經

経がやみ、がらがらと戸があぐ。そこからあらわれたのは世にも稀な美しさをもつた少年。どんなめぐまれた才子佳人であろうとこの

美しさをあらわせるものはいらないだろ？

「まつたく、もつと遠くに逃げればいいものを」

紅菜はそういうて苦しんでいる昴摩に声をかける。そんな少年の姿を見物人たちは釘いるようにみていた。もつひとつつまれた迷信。それは紅菜の姿をみた者は寿命がのびるといつこと。

経があわると外にいる昴摩をよぶためこうして戸を開けて紅菜が登場する。そのため身分の高い者たちはこそってこの表門の席をとりあうのだ。一年でも一刻でも寿命をのばしたいがために。

昴摩はおぼつかない足取りでよろよろと部屋にはいつていいく。半刻ほどおとなしくしていれば回復する。紅菜はあつまっている者たちをいつせい無視して戸をしめてなかにはいる。みられることは慣れているのだ。

紅菜の御姿をみた者たちはしばしその場にとどまり強烈な余韻に縛られることになる。

紅菜はさむさに豊楽院をよじきり内裏にむかっていた。夕の読経はぜひ内裏であげるよにとの帝からの言葉に紅菜はそれにしたがう。はじめはいくまでが寒いのとわざわざ人の目にふれてしまわないので断つたのだが、かえってきた返事が「依頼する」といわれたので受けるしかない。

お願いはことわれても依頼はことわれない。菜稚琉との約束だった。多少の選択権は紅菜にあるが、無理な状態のみの依頼だけだ。できる範囲の依頼はうけなければならぬ。

「つづ、さむい」

紅菜はかじかむ手をあわせて息をかけては手をすりすりとあわせる。しかし、いつこうに手はあたたまらない。束帯よりも唐衣のほうがあたたかいとおもってきたが、どんなにきりんでも寒いものは寒い。

「紅菜殿」

そういうて声をかけてきたのは楽護だ。楽護は都の吉凶をすべくつ

たといふことで従八位上右兵衛府兵衛少志から従五位上右兵衛府兵衛佐に飛躍的な出世をはたしたのだ。

「樂護殿」のたびの出世はなしにきこてこますよ。おめでとハハハぞいます」

あいかわらずの山男のよつたな顔をしている。内裏の門のまえでまつていてくれたようだ。寒空のなか大変だとおもいながら紅菜は会釈をする。そんな紅菜に礼をのべると樂護はつづけていった。

「今日は女子の姿なんですね」

樂護の言葉にこじりと愛想笑いをつかながら紅菜は「さむいからな」とこつた。そして、従者のよつにずつとつこておもていた昴摩にいづ。

「昴摩どうする？きいていくか？」

それがどんな苦痛をうむのかわかつていて紅菜はからかうよつこいつた。「女の格好で経を読みにいくな」とさんざんもめたあとである。昴摩は苦渋の表情をうかべながら返事をかえした。

「すぐそばにいる」

そういう昴摩の耳にはしつかり耳栓がされていて紅菜はきづいている。そのせいですこし反応がおそいのだ。でも、会話は相手の口のうづきをよんでいるようで問題はない。

「では、どうぞ。みなさまおまちです」

樂護の「言葉に門」があぐ。紅菜はその風景におどろいた。とこづかあきれた。

（ここのくわむこのにこんなとこりで・・・）

紫宸殿正面に座した帝と皇后、その両脇にはつまれたばかりの東富、その母。紫宸殿の広場には五列に並んだ身分の高い者たちが座している。殿方だけではなく女人の姿もある。

「さあ、紅菜殿。あちらへ」

樂護がさした場所は広間の中央に用意された畳だ。一枚の畳のうえにはわざわざ座布団があつたが、かんせん外である。真冬の夕方に外でこのよつなこと。

(はあ)

心のなかで溜息をつくと仕事だからとこきかせる。紅菜はわざわざ用意された仰々しい席につく。

(さあ、やりますか)

紅菜は掌をあわせるとやつくりと皿蓋をとじる。そして、ふかく祈りにはいった。神経を集中させると無音の世界をつくりだす。そして、なにかに弾かれたように経をはつする。

觀自在菩薩行深般若波羅蜜多

紅菜の凜とした声がひびきわたる。門のそにいる昴摩は耳栓された耳のうえから自分の手でさらに音の侵入を阻止しようとするが、念のこもった声はそれでも頭に響く。ずきずき、ずきずきと。

時見照五蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不異色色即是空空即是色受想行識亦復如是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨不增不減是故空中無色無受想行識無眼耳鼻舌身意無色声香味觸法無眼界乃至無意識界無無明亦無無明尽乃至無老死亦無老死尽無苦集滅道無智亦無得以無所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多

故心無& amp; #32611;礙無& amp; #32611;礙

故無有恐怖遠離一切顛倒夢想究竟涅槃三世諸仏依般若波羅蜜多

故得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜多

是大神呪是大明呪是無上呪是無等等呪能除一切苦真實不虛故說般若波羅蜜多

呪即說呪曰羯諦羯諦波羅羯諦波羅僧羯諦菩提薩婆訶

(あとすこし・・・)

昴摩はガンガンひびく経の音にたえながら紅菜が最後の言葉をいうのをまた。体中へんな汗がでていて体がひえていく。いついても生きた心地がない。

般若心経

紅菜は語尾の余韻をのこしながらそつと皿蓋をあける。すうつと集中力をとくと読経中は感じなかつた寒さがどつとおしょせてくる。(さむい)

しーんと静まりかえつた清涼な雰囲気に入々はひたつている。紅菜はさむさに負けてその雰囲気に入水をさした。さつさとかえつて火桶のまえに陣取り、菜稚琉からもらつたお茶をすすりながら体をあたためたい。

紅菜は手をそろえて頭をさげる。帰るために挨拶をするのだ。形だけ。

「この寒空のなか帝の御身に大事あればいけませんのでこれでおいまさせいただきます」

「清涼で心あらわれる経であつた」

帝は労いの言葉をかける。紅菜は頭をあげると「昴摩」とよぶ。すると空からふつてきたかのように昴摩がおりてきて、紅菜のよこにたつた。すこし、よろけているのは皿をつぶつてやつてほしい。

「ありがたきしあわせ」

紅菜はそつといつて微笑をうかべる。そんな紅菜を昴摩は抱えあげると空へときえでいった。昴摩は紅菜の体がひえて震えているのにきづこっている。はやく温めてやらないと。

「ああ、気持ちいい」

沐浴につかりながら紅菜は体を温める。温泉ではないが芯まであたたまる感じは極上の幸せをかんじさせる。しかし、不快なのは肌にはりつく湯帷子（ゆかたびら）（入浴のときにつける浴衣）だ。

「なあ、これ脱いではだめか？」

紅菜は湯につかりながらいた。昴摩は紅菜の髪をとかしてきれいに洗つている。柏がいなーいまは紅菜の身のまわりの世話をするのは昴摩の仕事だ。

「やめてくれ」

昴摩はきまづきまづな困惑した顔でいつ。いまでさえ湯帷子がぴつたりと肩について体の形がよくわかるの。元。

紅菜は納得いかないとぶううと頬をふくらませたが、しかたないかとおもいなおす。おいつめてあつぶ、あつぶしていの昴摩をみるとも楽しいが、多少の譲歩もしないといけない。飴と鞭は大切であ

る。

昴摩に頼むから湯帷子をきてくれと懇願されしづしづきてはいるが、やはり素肌で風呂にはいったほうが気持ちいい。本来、入浴は僧や身分の高い者が身を清めるためにはいるのだが、紅菜にとつては一日の疲れをとる癒しの時間だ。

「昴摩、肩ももんで」

「はい、はい」

昴摩はきれいに整つた髪に満足するとわがままな紅菜のために肩に手をかけてほぐしていく。

「ああ、きもちいい~」

油断しきつた紅菜の声に満足しながらせつせ、せつせと昴摩は奉仕していく。こうしてこの日はすぎていった。いたつて平穏な一日であった。

都に滞在してはや一週間。紅菜の朝夕の経は都の名物になりつつある。人から人へと噂が噂を呼び、都以外からも人々があつまりちよつとした観光名所のひとつになつていて。

そして、都のもうひとつの中は紅菜の性別のことだ。紅菜の気分によつて美少年だつたり美少女だつたりしているおかげでほんとうはどうちらなかといつのが都の人たちの注目するところだつた。

「昨夜の宿直では紅菜殿が男か女かで話題になりましたよ」

樂護は勤めの合間に紅菜のもとへ遊びにきていた。紅菜の恐ろしいという印象は和らいでいるもののやはりそれでもあまりちかづきがたい印象はそのままのこつていて。

「それで、真相をききにこさせられたというわけですね」

いま紅菜は少年の姿をしている。直衣をきこんだ姿はご婦人がおもわず頬を染めて顔を隠すのも忘れてしまつほどだ。実際、男女とはず紅菜にはたくさんのがどいている。とうぜんのよつに昴摩の手によつて握りつぶされているが。

「私も純粹に興味がありますからね。で、どちらなんですか?」

「『どちらがよろしこですか?』

紅菜はふふふと蠱惑的にわらわとせざぶらかす。紅菜はひとひじらぢちらでもいいが、菜稚琉や螢蘭が正体をあかすのよくないといつてはいたので性別だけではなく一切が不明なよつにふるまつてこる。

「うーん、昴摩殿が好いてらひしゃるとこひとせざ女子だとねむつ

ているのだが。しかし、うーん

「昴摩は男色かもしれませんよ?」

紅菜は混乱させるようなことをうづく。樂護はその言葉にかんがえこんでしまつた。

「実際、恋文のなかには男子であつてもかまわないとこいつ内容の文もどどいてますし」

「ええ!…そなんですか?…」

樂護は面食らつたような声をだしておぢりく。紅菜は樂しそうにわらうと「ほんとうです」とうづく。

「まあ、昴摩が握りつぶしてこるので宛ぬまではたどりつこつしませんが」

昴摩はここにはいない。都のまわりの疫病がおさまつてこるか走りまわつて調査してこらうだ。あれから一週間たつてこる。おさまつたかどうかみるにはちよづじいここりである。

「わあつ」

とつぜん紅菜が奇声をはつした。紅菜を背後から抱きすくめるよう腕をまわして、耳元に鼻をおしつけている黒髪の鬼がいた。樂護はとつぜんあらわれた鬼に反射的に戦闘体勢にはいる。刀の柄に手をあてて「何者つ」と叫んだ。

樂護の『命樂』は親友の宗次が最後にのこしてくれた太刀だ。紅菜との面識がよいことや、ここの鬼をきれる太刀があることからも樂護は天皇の信をえていた。このことも樂護の出世におおきく影響したのだろう。いまでは昇殿までゆるされている。

「黒鬼魔王またあなたですか」

紅菜はそいつてあきれた顔をしてこる。紅菜自身がまつたくと

いつていいほど無抵抗なので楽護は戸惑いの視線をむけた。そんな樂護に紅菜はいつ。

「昂摩の父ですよ」

その言葉に樂護は紅菜に抱きついている黒鬼をみつめた。たしかに昂摩に似ている。

「ああ、今日もいい匂いしてるな」

「変態ですか」

首筋をくんくんかいている黒鬼魔王に紅菜は冷たくいはなつ。そんな紅菜にわらにしがみつくと黒鬼魔王はじやれつゝに頬をすりよせる。

「昂摩がみたら殺されますよ」

紅菜の言葉をきくことなく黒鬼魔王はしたい放題だ。紅菜も無駄な労力をつかいたくないのか無抵抗でされるがままになつてゐる。完全に樂護を無視している。しかたなく、樂護は帰ることにした。

「では、仲間には謎といつことではなしをしておきますよ」

それだけいつて樂護はかえつていつた。それといれちがうようになつた。

昂摩がかえつてきた。紅菜と黒鬼魔王の姿に奇声をはつする。

(ああ、昂摩殿が帰つてこられたな)

その奇声に昂摩がかえつてきたことを勘づくと樂護はおかしそうにわらつて勤めにもどつていつた。

「仕事はどうしたんだよ」

両側にふたつのこぶをつくりている黒鬼魔王に昂摩は怒りをうかべながらいつた。鬼の角というよりも熊の耳のようになつていて。

「万年さぼつておまえに仕事のことをいわれたくないなあ」

黒鬼魔王はここ十数年まつたく夜叉としての勤めをはたしていい息子にいつた。そんな黒鬼魔王に紅菜は五通の手紙をさしだす。

「おお、紅菜！私のことをこんなにも」

「ちがいます」

なにをかんちがいしているのか、両手をつかんで頬にすりすりと

すりよせて いる黒鬼魔王に紅菜は冷たい声でいづ。

「かえしておいてください」

黒鬼魔王の息子たちからの恋文を紅菜は冷たくつかえす。黒鬼魔王はおもしろそつに封すらあいした気配のない手紙をつけとるとペラペラとひらいていく。

「あいつらどんなことかいてるんだ」

好奇心まるだしの目で文章をおつて いる。紅菜はしんそく迷惑そ うに黒鬼魔王にいつた。

「あなたがろくでもないことを宣言するから私はすこぶる迷惑です」「まあ、こんな文じや、きゅん、きゅん、しないわな」

黒鬼魔王は息子たちの恋文をよみおえると感想をのべる。昂摩は困惑の目で一人の会話をきいていた。まつたく内容がつかめない。

「紅菜の保護者には承諾済みだぞ。俺も参戦したいくらいなんだが なあ」

「じゅうぶん参戦しているではありますんか。夜な夜な口説きにく るのはやめてもらえませんか?」

「はつはつはつ、こんなに美しいものはそつそついなにからな。つい 手をだしてしまつ」

黒鬼魔王はそうじつて自然なながれで紅菜の肩をだく。しかも、甘い仕草で紅菜の頭に顔をうずめたりもする。

「ちょっととまて」

昂摩がそんな二人にいつた。瞳には怒りと困惑がうずまいて いる。しらない事実ばかりがさつきからほん、ほん、ほん、とでてきてい る。

「どういうことだ?」

昂摩のけんけんした声をきき、黒鬼魔王と紅菜は昂摩がなにもし らないことをおもいだす。昂摩が握りつぶして いた恋文は人からわ たされるものばかりだ。夜這いをかけるだいそれた人はいなくても、 妖かしはいるのだ。しかも、彼らはうまく昂摩の目をかいぐぐつて いる。

「いつてなかつたか？紅菜を娶つた者が王になれるとは息子たちにいつたんだ」

「なつなつなつ」

何事もないようにいつた黒鬼魔王の言葉に昴摩は言葉にならない。黒鬼魔王はといふと紅菜の衣に手を侵入させようとして昴摩にはたきおとれ。どこからつっこめばいいのか昴摩にはもうわからなかつた。

昴摩は自分が完璧に害虫駆除をしてるとおもつていた。蚊のような性質のわるい虫も蚤のようなちこちな虫もこつさいを駆除しているとおもつっていた。

雪深い山の奥ふかくに莊厳な屋敷がたつてゐる。白に染められた世界にすべてから孤立するように建てられたその建物はやはり浮世離れした者が主として腰をすえていた。

とはいひま、主は不在である。かわりにたわわに実つたおおきな胸をはだけゆつたりと衣をきこんだ女性がわがもの顔で屋敷にいる。胸には雲と龍をかたどつた印が描かれていた。

白い湯気がゆらり、ゆらり、とたちこめている。器のなかには菜稚琉の栽培しているお茶の葉でいた緑茶が淡いすきとおつた生命の息吹のような水色をうつしてゐた。

「いいんですか？あんなことを許して」

そういうてとなりにすわつてきたのは柏だ。螢蘭と菜稚琉の意向にそむくきはないが、どうもきになる。紅菜をなによりも愛しているこの人たちがあんなことを承諾するとはおもえなかつた。

「無理強いをすれば殺す。幸せにできない者がふれたら殺す。婚姻のときに私と菜稚琉の許可がでなければ殺す。三つの約束つきで許したのよ」

螢蘭のその言葉に柏はおどろくよりも納得する。こんな三つの約束を守れる者などいまのところ柏にはひとりしかおもいうかばない。

「それでは皆殺しではないですか？」

柏の言葉に魅惑的いや策士的に螢蘭は微笑むと質問をする。

「どうすれば恋心を持続することができるとおもつ?」

「さあ、私も円融も恋心は皆無ですからね」

螢蘭の言葉に柏はかえした。柏と円融は幼いころから婚姻がきまつていたしそれがあたりまえ自然の流れでもあるかのよう夫婦になつたのだ。それに円融といふことがだれといふよりも心地よくきが楽なのだ。

「不安よ」

螢蘭はそういうて蠱惑的な雰囲気をかもしだす。そんな螢蘭をみながら自分にはあまりない色氣を紅菜がかもしだすのはきっとこの人の影響だろうとかんがえる。その他にも紅菜は多々この一人の影響をうけている。

「手にはいらない不安。すぐにつしなつてしまつかもしれない不安。邪魔者があおいこともいい不安よね。安定を求めながら、恋は不安に燃えるのよ」

「そういうのですかね」

柏は螢蘭にいった。お茶の湯気がきえていることにきづいていれなおそとしが螢蘭にとめられてしまう。螢蘭はさめたお茶をのみほすと湯呑みをわたす。柏はうけれどとお茶を新たにいれなおす。「それに、男はね。完全に手にはいらなかつたものほど、ながく恋焦がれてしまうものなの」

遠い目をして螢蘭はそういうとだされたお茶に口をつける。昴摩には紅菜の大切なものをわたしたのだ。彼が紅菜から離れるのは好ましいことではない。

つまり黒鬼魔王の申し出をうけたのはかませ犬を用意するため。本来の黒鬼魔王の申し出はこうだつた。

昴摩の正妻として紅菜をむかえいれることを許してほしい

桜雅族が滅びたことにより紅菜にはだいぶんと自由があたえられるようになった。べつに紅菜を妖かしのもとへ嫁にだしてもいつこ

うにかまわないのだが、やつぱり親心としては手元においておきたい。だから三つの約束をつけてだれの嫁にでもやるといったのだ。しかし、三つ目の一人の承諾のところは一生承諾するつもりはない。そうすれば、紅菜はずっと自分たちの娘のままだ。

(意外な伏兵がいるかもしれないな)

お茶をのみながらふたたびふりはじめた雪をみつめながら螢蘭はおもつた。しんしんと降り積もる雪と音もない白い世界は心がおちつぐ。

「てめえ、さつさと帰れよ」

昴摩はそういうて黒鬼魔王の頭に蹴りをいれている。火桶の火がきれかけているので墨をとりにいったら黒鬼魔王がいたのだ。しかも昴摩がさつきまで紅菜の添い寝をしていたところにちゃつかりいる。

昴摩は火桶に火のついた墨をおくと衣」と紅菜をうばいかえす。その衝撃で紅菜は眠そうな機嫌のわるい声をあげた。紅菜にとつて睡眠はすごく大事な時間である。精神の癒しや体の体調を整える大切な時間。

「あつ、わりい、わりい。大丈夫だからゆつくり眠れ

紅菜を横抱きにしたまま左右にゆつくりゆすりながらあやすように背中をぽん、ぽんとたたく。こんな息子の姿をみたことがない黒鬼魔王はなかばあきれぎみだ。城にいるときにじゅうぶん紅菜にたいしての甘くやさしい態度はみてきたが、ここまではこきすぎだらう。

「すう、すう」

しがみつくりに昴摩の衣をにぎりしめてふたたび眠りについた紅菜を満足そうな瞳でみつめて、そのまま昴摩は腰をおろす。紅菜も安心しきつた顔でねむっている。

「夜叉それでは父と赤子のようだぞ」

黒鬼魔王はそういうて昴摩をからかう。昴摩はとつやに「うつせ

とすこしおおきな声をだしてしまつた。するとやはり機嫌のわるい唸り声が紅菜からあがる。あわててまた昴摩はあやすように紅菜をなだめる。

「さつやどひつかいよ。紅菜はとうぶんおきないぜ。まあ、夕方になつたらおこすけどな」

夕方になれば経をあげなればならない。紅菜が葉稚疏とした約束だ。昴摩はそういうて体をゆすつていて。赤子のゆりかごのような息子。そんな昴摩に黒鬼魔王はいう。まさかここのまま夕刻までといつことはないだろひ。まだ、陽がかたむくにはじゅうぶん時間がある。

「おまえはどひつかいんだ？」

その意外な質問いや、愚問に昴摩は表情をかえず、とうぜんのようここにたえたのだ。

「ああ、さまつてるだろひ。おきるまではここのままだ」

その言葉に黒鬼魔王は心底あきれてしまつた。馬鹿らしくなつて部屋をでていくと血をへと帰つた。まつたくもつてつきあいきれん。

紅菜は鴨川にきていた。一度田の厄病送りをしにきたのだ。川を中心ふたたび疫病が流行りだしたと報告をうけてのことだった。わら人形に病をとりこめて水に流すのがふつうだが紅菜は焼いてしまう。

ここの日のあいだにこの厄病送りを都のまわりでさいさんしていた。いや、都のまわりどこのは語弊がある。桂川、鴨川周辺から病は発生しているのだ。まだ、憶測のいきをでてはいなが水にまつわる妖かしか物の怪がいるのかもしけない。それともなにか毒のよつなものが流れているかだ。

鉢にはられた水面には闇にうかぶ星々がうかんでいる。水鏡になつたその水のうえに正方形のちいさな紙をうけべた。陰陽印のかかれたその紙にゆっくりとちがう印があらわれる。紅菜は陰陽にならい天文で疫病の原因を追究しているところだ。

「昂摩、清滝川と賀茂川のほうにいってきていいくれないか？」

帰つてきてこそそとなにかしているとおもえれば紅菜はそういう。
きゅうにいいだされたお使いに昂摩はなんのためにという顔で紅菜
を見る。紅菜はそんな昂摩に有無をいわすきがないのだろう。昂摩
を無視して水にうかんだ紙を手にとるとさらについて。

「いいか。この呪がかかっているものをみつけてくるんだ」

濡れた紙は紅菜の息がかかるとたちどころにかわいてしまう。紅
菜は呪のかかれた紙を昂摩にわたすといった。

「いまから・・・」

なにかいいたそうにそれだけつぶやく。冬のみじかい夜も終盤に
さしかかりつつあるそらはあと一刻もしないうちに白みはじめるだ
る。」

「そうだ。なにか問題があるか？」

「どうして川なんだ」

昂摩がいつものわがままをいつているのは紅菜はよくわかつてい
る。紅菜の術がかかっていたすこしまえならどんなに嫌がつても主
導権は紅菜にあつたのだが、いまは平等である。説明もなしに無理
やりお願いするわけにもいかない。

「病がひろまつてゐる地域は川のちかくときまつてゐる。賀茂川、
鴨川それに桂川だ。この三つの川は都をかこんでいる。だから、都
のまわりから病があこつてゐるようみえた。しかし、それならど
うして病が都にこない。おかしいとおもうだろ？」

昂摩は地理をおもいつかべながら「たしかに」とつぶやく。紅菜
はさらにづづける。

「天意ではなく、人為的におこつてゐるものとしたらかならず素が
あるはずだ。それを見つけるのがそれだ。呪をみると妖かしをまね
ているものか、もしくは人の印をまねたものかはわからない。どちら
にしろ、人為なら素を絶やさないと堂々巡りだ」

説明はよくわかつた。しかし、どうしていますぐいかなければ
いけないのか。だいたい、昂摩がでているあいだだが紅菜の世話

をするというのか。

「オレがいなくなつたら不自由だぞ」

「大丈夫だ。飯も仕度も風呂も自分でできる」
(そうだったのか)

初耳だった。昴摩はつくり紅菜はそういったことをいつさいできないものだとおもつていたのだ。身分の高い者のようにいつさい自分のことは自分でしないしできないと「うぜんのよつ」おもつていた。

「でも、寝るときはどうすんだ。寝不足になるだらう」

紅菜は眠るときに信頼している者がいないと熟睡できない。幼いときから命を狙われることがおおかつたおかげで自然と身についた癖のようなものである。その癖はいまでも健在でどうしても紅菜は添い寝してくれる者がいないと寝つけなかつた。

「しかたないな。おまえがはやく帰つてくるのを首をながくしてまつてているよ」

「式にいかせねばいいだらう。こつもやつしてくるじゃないか」

自分がいくほどではないとこうことを昴摩は主張するが紅菜はあつさり否定する。

「はやく確実にそれを手に入れたいんだ。それに術 자체がどんなものかもわからないのに、式をやらせてしぐじるよりも確実におまえがいつたほうがいい」

「くつ」

断固としていきたくない昴摩はなおもなにかいの口実はないかさがしているがおもいつかない。紅菜のそばから極力はなれたくないのだ。

(もし、オレのいないあいだに・・・・・)

昴摩は先日きかされたことをおもいだす。黒鬼魔王がだした“紅菜を嫁にした者を時期王にする”という命により、自分の兄弟たちが紅菜をねらつていてる。昴摩にきづかれないと文をわたしているのである。

しかも、なぜか黒鬼魔王まで夜這いにきたりしているらしい。何人の相手が紅菜を口説きにきているこの状況でどうして何日もそばからはなれられるだろうか。正気なやつならまず無理だね。

きっと黒鬼魔王が夜這いにきたのは昂摩が紅菜の使いで屋敷にもどったときのことだらう。海に身をなげた鬼女と戯れているのを見るもの胸糞わるかつたので、ゆっくりとしていたのだ。

あの鬼女は夫に捨てられその恨みで鬼とかした者だ。夫を奪つた女と夫を殺し、そして自分も海に魂をしづめたが、恨みははれず鬼女になり若者を見初めでは海へと誘い契りを交わす。鬼女と契りをかわせば腑抜けになつてしまつ。つまり精氣を奪われるのだ。結局、鬼女に自分を惚れさせて紅菜は鬼女が海に若者をつれさつてしまふのをやめさせるのに成功しているのだが。

なかなかいこゝとしない昂摩に紅菜はしかたなくたたみかける。昔のように力づくと、いかないのが面倒くさいところだ。昔なら術をかけた主のことは絶対だつた。反発しても最終的にはききいれなければいけない。そういう術でがんじがらめにしていた。

紅菜は髪をかきわけすこし目をほそめる。そして、魅惑的に微笑むと昂摩にいう。

「はやく帰つてこれたら『褒美をあげよ』

「え？」

昂摩はおもつてもいない言葉にまぬけなこたえをかえす。そんな昂摩におもわせぶりに頬にふるとさらに魅惑的な雰囲気をたもつたままいづ。

「もちろんおまえが心配しているようなことがあれば、昂摩にとらわれたまま一生おまえのいうことをきいて暮らすよ」

紅菜はどうだいい案だらうと昂摩に瞳でとづ。昂摩は甘く妖しい誘惑に喉をならした。心配しているようなことがおきるのは死んでよいやだが紅菜からも「うらえる」褒美にどうしても意識が。「褒美はなんでもいいのか？」

昂摩のといに紅菜は「ああ」とこたえると昂摩にとづ。さあ、ど

うするんだ、と。昴摩は意をけつした。はじめての紅菜の「」優美の誘惑にどつしてもあながうことができなかつた。

「やる」

やつたえた昴摩に満足やつに微笑む。昴摩は一日でもはやくかえつてくるため、そつそつにたちあがると口に手をかける。そんな昴摩の背に紅菜はいった。先ほどまでも甘い誘惑はどくくいつたのか、いつものきりつとした声にもどつてゐる。

「朝日が三回のぼるまでにかえつてこい」

昴摩は（やつぱりはめられたかも）とおもいながらそこをあとにした。もう、姫が白みはじめている。一回目の朝日はすぐやにひかえていた。

昴摩がいなくなつて一田田。やつそく紅菜のまわりで異変がおきはじめた。紅菜はそれをおもしろくみていた。そして、いまは陰陽寮にきている。陰陽の頭安部正宗かみあべのまことと碁をうつてゐるのだ。わきの都の吉凶のときに対り合い親密な関係を築いてゐるのだ。

「それはまたおもしろそつなはなしですね」

紅菜は狩衣の袖をいじりながらいった。ゆつたりとへつりいで座る紅菜につかれた顔で正宗はいつ。

「おもしろいなどといつあなたをみていくとさき祖父もそんなかただつたのだろうとおもいますよ」

正宗は安部清明の孫であり『金鳥玉兔集』を若くしておため、二十五という若さで陰陽寮頭となつた。紅菜もつに昨日よみおきて陰陽道の道をまたひとつおさめたばかりだ。

「しかし、左弁官殿はどうして私のよつな者をきにかけてくださいるのやうり」

紅菜はやつといつと碁を打つ。正宗は紅菜のうつたてにしばしかんがえながらいたえる。正宗は紅菜の碁仲間なのだ。昴摩と碁をしてもすぐに勝つてしまつておもしろくないし、かといつて菜稚琉や蟹蘭は強すぎて相手にならない。そのてん、正宗はおなじつよさでた

のしめる。

「それはきになるでしょう？身分もわからない者が自分よりも信をあつめていては。紅菜殿だけですよ。位階も官職ももたず、昇殿をゆるされているのは。ましてや後宮への出入りまで許されているではないですか」

アーティストとして暮れを「アーティストとして暮れを」。

「帝」が言はねえやうな

帝は即位なさいたのは正宗風でしょ？ あなたはもはやあているのではないですか？

都の周辺で流行り病がおこるといつていいのである。

「ははは・・・壬生殿に“陰陽寮がちんたらしているから信のおけ

紅菜は暮に口づけたといつた。そして、したり顔でどうでしょうか

はなしはじめる。

左弁官の壬生道則みぶのみちのじがつれてきたのは古都の僧だ。その推薦した僧と紅菜で弘徽殿にあらわれる鬼の正体をあてあう勝負をすることになつたのだ。

「私は陰陽寮に住つたおぼえはないのですが」「どうゆうおじいちゃんが、おぼえますよ。」

「しかたない。わざに立つとしますか」

紅菜の言葉に正宗は童子をよぶと、紅菜に「なにがいる?」ときいてくる。紅菜はおかしそうにわらいながらいった。

これですね

んどの田舎せどりがいりねだつたようだ。

「勉強になるし、なにより紅菜殿の術は秘術ですからね。みていておもしろい」

正宗はそういうと童子にこいつつけくわえる。紅菜の必要なものをきいて陰陽の術で占うことを察した正宗は他の者たちにしらせるようについた。

「私は見世物ではありませんよ」

紅菜はそういうとわらつた。正宗もたのしそうにわらつていて。正宗は紅菜の術に興味をひかれる。術を統べる者は理を統べることになる。しかし、世の理はそこにある、そこにはないもの。つかみがたく、なしがたいのだ。

紅菜も正宗から陰陽道の極秘を学び、正宗も紅菜の術に陰陽道にないものを学ぶ。ふたりはたがいに刺激しあつていて。

清涼殿の正面に左弁官壬生道則の推薦した僧と陰陽の頭安部正宗の推薦する紅菜がぞしていた。帝に頭をさげ仰々しく座している姿は壯觀である。

この場にいるのは昇殿を許されている者だけだ。皇后、中宮、女御、更衣は別棟に移動してもらつていて。後宮が舞台なのだからしかない。鬼は後宮に現れるのだ。

「それでははじめよ」

帝の言葉にさらに深々と頭をさげると双方が吉凶を占う。五鈷鉤ごじゆうをもち経をとなえている僧は氣位が高そうな顔をしていて。頭は僧らしくきれいにまるまつっていた。

紅菜は火、水、木、金、土を宿した炎、水、桂の葉、爛玉、石を陰陽印のはしにおき印の真ん中に紙をおいた。紙はぼつと燃えあがるとあつというまに灰になつてちつていく。

「されました」

さきにそういうたのは僧のほうだ。僧は高らかに占いの結果を報告する。まだ、占にはつていて紅菜をちらつと勝ち誇つた田でみた。

「このたびの鬼の正体は鬼をきる刃で殺された鬼の情念が形になつたもの。情念が形になり、牛黄頭ぎゅうこうとう”という鬼となり、東宮にとり憑

つを帝の首と刃のもち主の首をねらつてこいるのです

まわりはばわつき、その場にいた楽護は真つ青な顔になつていた。自分の切つた鬼の情念が形となり新たな鬼となつて帝の首をねらつてこるなど死活問題である。ましてや、その鬼は東宮にとつ憑こつと夜な夜な彷徨つてているのだ。

紅菜は僧の言葉をききおえたあと静かに口を開ける。

「ちがつ」

「なにつ！」

紅菜のつぶやきに僧は険しい顔でいいかえした。紅菜はたちあがると帝につげる。

「このたびの鬼は呪詛による幻影だとであります。帝に呪詛をしけた何者かがおるようです。が、その者を深追いなさらないほうが吉だともでてこますので、どうか帝のあつに温情をかけるがよろしいかと」

紅菜の言葉に楽護は心配そうな顔をむける。帝は紅菜にとつこなられた。

「で、その呪詛は破れるのか？」

紅菜は「御意」とこたえると楽護をみつめる。あとは帝の身をまもる六衛府の仕事だとばかりにいった。

「後宮内で縁の炎がたちこめていふところをお探しなさい。その下には蛇毒の術がほどこされた壺があるはずです。その壺に火をつければ呪詛はとかれます」

楽護たち六衛府の者たちは後宮にいそぐと後宮中をくまなくさがした。清涼殿と後涼殿をつなぐ渡殿のしたにそれはかくされていた。その壺のなかには紅菜が指摘したように毒蛇が三匹首をきらわれられられていた。すみやかに燃やされ供養された。

「紅菜殿！」

清涼殿をあとにした紅菜をおいかけてきたのは楽護だ。つれしそうにかけよつてくる。

「紅菜殿、さきほどはありがとうございました。あの僧のおかげで

大変なことになるところでした」

樂護はそういうて紅菜に感謝の意をつたえる。これがほんとうのことなら失脚だけのはなしではすまない。家ともども地におちてもうふたたびこの地をふむことはなくなつてしまつといふだつたのだ。

そんな一人のもとに僧があらわれた。そして、紅菜につめよる。

「どうゆうことだ。儂の術が間違つていたとはおもえん。そなたにかしたなつ」

紅菜はちかくにある顔をとおざけるように僧の胸をかるくおすと口元を袖でしたたか隠しながらいつた。

「そう、あなたの占はまちがつていない。しかし、公然のまえで東宮が鬼になるといわれた者の身がおわかりか。しかも、その原因が自分のせいだといわれた者の立場をかんがえたことが。都で名をはせたいとおもつていてるなら都の氣質を学ぶべきです。あなた自身のためにもね」

「なにをつ」

「紅菜殿つ」

僧が紅菜の衣をつかみあげる。紅菜の言葉におどろいていた樂護は手荒なことをしようとしている僧をとめよつとしたが、紅菜にせいされる。

「あなたの瞳には氣位のたかさと欲の炎がみえる。私を負かして名をあげたいか？それとも、人が平伏す地位が欲しいのか？」

顔をちかづけて瞳をのぞきこむようにしていつた紅菜を乱暴にはなすと僧はなにもいわずにたちさつていく。紅菜が昨日、占つてみると樂護のことがでたので、その日のうちにあの毒蛇を仕掛けにいつたのだ。

「紅菜殿、私は……」

このたびのことが自分のせいだとわかつた樂護はいににくそうに紅菜にいつた。しかし、紅菜はふわりとわらつと樂護にいつ。

「鬼は今夜にでもしまつにいく。樂護殿このかつはつまい酒でまけておいてやるよ」

そういうと紅菜はさつていった。

鬼をかたづけた帰り、紅菜は鬼女にあつ。すこしあきれた顔をしてその鬼女に笑みをうかべた。

「こまつた人だ。恋患つてここまでもきてしまつなんて、」

鬼女はすがるように紅菜にだきつくといつ。その体は海の匂いがして冷たくひえている。いや、濡れていた。

「紅菜様、私はあなたをおもいすぎて苦しくて苦しくてしかたないです」

紅菜はその体をはなすと鬼女の匂をよんでもやる。
「夢花の君」

頬にふれ紅菜はつづけてかたりかける。

「君はいつまでも恋にしがみついたままだから苦しいんだよ。深い愛の底に身をしづめればその苦しみもまた甘露の蜜にかわる。さあ、勇気をもって」

そういうて紅菜は鬼女からはなれていくとそのまま、姿をくらませる。恋しい者をもとめる女のしづかな泣き声だけがその場にのこる。

鬼女がこの世でもつとも崇高な術者である紅菜に懸想をいだき海からこの雅やかな都にまでおつてきたといつ尊はあつといつまに府中にひろまる」とになつた。

2・独往

紅菜は朝の経をおえてよこになつて行った。朝食も食べ腹もふくれれば眠たくなつてしまつ。そこへ正宗がやつてきたのだが、紅菜はおきょうともしない。いや、旦をあけていなければ意識は覚めている。

「紅菜殿、いつまで寝ているつもりですか？」

もう陽はたかく、白くつもつた雪にきらきらと光をあてて輝いている。昂摩がでていつて三回旦の朝。つまくみつかれば今日には帰つてくるだらう。

「正宗殿か。眠つてはいなうよ。旦をとじてゐるだけだ」

昂摩がかえつてこないと紅菜には安眠はない。柏か円融をよべばすむはなしだが、たまのひとりといつのもまた氣楽なものであつた。「病がまたでだしたそうですよ」

正宗に紅菜は旦をあけることもなくこたえる。

「しばらくほつておいてもいい」

「それもそうですね。こちらも疫病送りは意味がないとでていますから。それより、魍魎もうりょうたちがあなたの噂をしておりましたよ。高名な術者に鬼女が恋慕していると」

紅菜はおきあがると両腕をのばして背筋をのばす。昂摩不在のこのあいだになにかやつかいたことがおきては困るところの。都に住んでいる者ならだれもが紅菜につかえる昂摩のことをしつている。つまり、正宗は忠告しこきたのだ。つるさい番犬がへそをまげるぞ、と。

「夢花の君ですよ。とても美しい人です」

「美しくても鬼女でしょ。精魂つきてもしりませんよ」

紅菜はおかしそうにわらうとまたふたたびよこになる。そして、そのまま旦をつぶつてしまつ。正宗は「忠告はしましたよ」それだ

けをいつてさつていつた。

そのまま、なん刻すぎたのだろう。紅菜の体に柔らかな絹のような糸がふりそそいでいる。そつと衣にふれるとなにかがおおいからさつてゐることがわかる。ふわりと香る花の香りに紅菜はなつかしさを感じた。

「寝顔もすてきだけど、目をさまして私をその黒瞳につつしてください」

紅菜は目をあける。紅菜の体のうえにながい髪をして目をしたに印字がかかった美女がいた。紅菜はひと目で美女が人ではないことを察したがいやなきはしない。それどころか、好意的な感覚。

「あなたは？」

その美女は紅菜の衣をくつろげるに紅菜の肌に愛おしそうに頬をよせていう。美女の耳にはとく、とくと紅菜の心音がきこえてきて、その音にうつとつとしていた。彼はいきてくるのだとおもつと感動するら感じる。

「私はあなたの妻ですよ。幾千のときをじえ、ふたたびあなたのもとへきたのです」

紅菜はおきあがると龍女のはほにふれる。龍女はその手をとりほほえみながら目をとじる。紅菜はその姿にうそではないと直感でおもつた。紅菜の直感が彼女は自分をだますようなことはしない、とつげるのだ。完璧な味方だと。

それだけではないこの感じにどいか懐かしさをかんじるのだ。

（会つたことがある。いや、もつと彼女は自分の）

確信的なおもい。しかし、家族はぬいて昂摩以外を寝床のともにしたことはない。まったく心あたりはないのだが、魂がそつだとつげるのだ。

「名は？」

紅菜のといに龍女は頬をすりよせるとからかうよつこつ。大人を困らせようとする子供の顔。

「また妻にしてくれるなら名のるわ」

紅菜はおかしそうにわらうと龍女耳に頬をちかづける。そして、さやくようについていた。龍女は頬をほんのり染めて紅菜に神経を集中する。

「困った人だ。ほんとうは私が女でも妻になりたい？」

龍女はこくんとうなずくと紅菜にだきつく。紅菜は黒い絹糸のようながい髪に指をゆすべらせるといった。

「いいよ、妻になりなよ。そのかわり私は我慢な人だから後悔してもしらないよ」

竜女をだきながら紅菜は問題人物の顔をうかべていた。昴摩に紹介したらどうなることやら。そうおもいながらそれでもなんとなくこの竜女をてばなせない。いや、なにかもつとこにはなれてはいけないものをこの人はもつているようなきがする。

「沙那姫・・・・紅菜様よんでもくださいな」

紅菜は沙那姫の心地いい髪をいじりながらしずがに名をつぶやいた。沙那姫はうれしそうに微笑んで紅菜にあまえるように身をよせながら「はい」と返事をする。

「紅菜様、もう一度」

「はい、はい。沙那姫」

「もつと」

「沙那姫」

しつこく名前を呼んでくれとせがむ沙那姫に紅菜おかしそうにぐす、ぐす、笑うとなんども何度もよんだ。

恥をかかされた僧は遠く嵯峨野の地にきていた。噂の鬼女をおつてきたのだ。鬼女は天の橋立にかかることができず大沢池に身をしずめ泣き濡れている。恋しくて、恋しくて、けれどあきらめることもできず、じうしてこの地にとどまってしまったのだ。

「私はもつとうに恋を楽しむときをすぎてしまっている。ただ、愛しい人との夜をと、それすらも叶わないとおっしゃるの」

鬼女の涙は頬をつたつては池の水にとけていく。美しい姿をして

いる鬼女を僧は水^ごしにみていた。水鏡には角がはえ眉間にしわのよつた鬼の顔がうつっていた。

(若造が火遊びで物の怪と戯ればどうなるか)

僧は鬼女に声をかける。紅菜の弱点を占おうとしたら靈^{れい}がかかつたようになにもみえなかつたのだが、それでもあきらめずに占つてみるとふたりの女がみえた。

「そんなになつてまで、あきらめられぬか?」

鬼女はふりかえり僧を見る。その目はぬれでいてすぐるようになつめてくる。僧は笠をあげると鬼女にいった。

「紅菜殿がてこずつている疫病に手をかしてやれば、情けをくれるかもな」

鬼女は水面から姿をけすとどこかえきえてしまつた。僧はくつくつく、と不適にわらうとその場をさつた。これからが見物である。都の病を払えなければそれで面子はつぶれ、はらつたとしても鬼女によつて腑抜けにされる。

昴摩は二回目の朝をすぎ毎^{まい}にかえつてきた。探し物は川の底に埋められていて、そのせいで昴摩は泥だらけになつてしまつた。紅菜にいわれたとおりの呪^のがかれた陶器をみつけた昴摩は意氣揚々とそれをもつてかえつてきたのだが。

四方を几帳でかこつているその場所からはすう、すう、と規則だたしい寝息がきこえる。まあ、熟睡はしていないだろうとなんの遠慮もなくそのなかへはいつていく。

「トーン。手からもちかえつた器をおとしてしまつた。円形の器はころ、ころ、ころがり畳にぶつかりとまる。左右にこと、こと、とゆれてぴたつとまる。

「・・・・・・・・」

人は信じられないものを見るとかたまるらしい。喜怒哀楽すらなく几帳に手をおいた姿勢のまま昴摩はかたまつていてる。え?という疑問すら頭をかけめぐつていない。頭も体もかたまつてしまつてい

るのだ。

几帳のなかには乱れた姿で寝ている紅菜と女がいたのだ。正確につたえると衣をはだけて上半身の肌を露出している。

女は紅菜の胸のうえにのりかかり腕をまわして眠っている。当初、紅菜が寝ているとおもっていたが紅菜は書をよんでいた。右手に書を左手に女の黒い髪をさわりながらゆつたりとくつろいでいるのだ。

「かえってきたのか？」

悪びれるようすもなく紅菜がいった。昴摩はあまりのことに言葉もでない。紅菜はおちてている器をとるとまじまじと観察する。予想外にもふたつもあつたのだ。紅菜は呪に人さし指でふれると二つかさねてわきにいた。

（だれだ・・まさか、ええ、でも）

やつと頭と感情をとりもどしつつある昴摩は最大限に頭を働かせようとする。現状だけみれば浮氣のあとのようにみえるが、しかし、紅菜がそんなこと。しかも、女と。絵的には男女のようにもみえるが紅菜のほんとうの性別は女である。

「うつ、紅菜様どうなさつたの？」

のりかかつて眠っていた女は紅菜の胸に手をついてあきあがる。衣でまえをかくそうともせず眠たそうに目をこすつていて。こすつていのいほうの頬には青色の印がされていた。

「きやつ」

昴摩がいることにやつときびじたその女は両腕を交差すると胸をかくした。そして、あらうことか紅菜にみをよせてしまつたのだ。

「紅菜様、このかたは？」

「ああ、紹介しておひつ。昴摩だ。ひつちは竜女の沙那姫だ。二人とも仲良くしてくれ」

沙那姫は昴摩を観察するようにみつめる。これが噂の夜叉かともいながらみていた。紅菜がはじめて自分の血をわけた相手。沙那姫がほしいものをもつている相手。

ぶるぶる、震える指で紹介された女を指さすとうらがえつた声で昴

昴はいう。それは紅菜にいつたものか沙那姫にいつたものかは本人にもわからない。

「・・・どういう関係だ」

「紅菜様の妻です。あなたこそ紅菜様とはどういう関係なのかしら」紅菜ではなく沙那姫はこたえると微笑む。勝者の微笑をたたえる彼女からは自信に満ちあふれていた。紅菜の妻となのつただけで昴摩にはどんな女も腹黒にみえてしまうのだろう。

昴摩は紅菜がだまされないとおもう。きっと変な術をかけられておかしくなっているのだ。いや、おかしいのは昴摩のほうだ。

「沙那姫どきなさい。私は仕事にいくてくれる」

そういうて紅菜は衣を整えると陶器ともつて昴摩と沙那姫をしてその場をあとにしてしまう。紅菜のかんがえがわからない昴摩は自分の殻にとじこもり思考をめぐらすがいつこうにかんがえがまとまらない。

「どうしてあなたなの」

紅菜がいなくなり沙那姫は悔しそうな瞳でいった。しかし、沙那姫の言葉に昴摩はきづかない。沙那姫はたちあがるとさつさと服を整えると昴摩を忌々しそうににらんだ。

「紅菜様も趣味があかわりになられたのね」

馬鹿にしたようなそして勝気な声に昴摩ははじめて顔をあげる。そして、沙那姫の瞳をみすえる。沙那姫はけつして負けはしない、とつよい瞳でいた。昴摩にいった。沙那姫がみてきた者を。

「紅菜様の歴代のお相手は皆様あなたのようにお粗末な方ではなかつたもの」

その言葉に昴摩は険しい目をして沙那姫にとつ。

「なに?」

「桜雅族のなかで紅菜様がなんど輪廻をくりかえしていらっしゃるかわかる? そのたびにあのかたのそばには私のようにそばに使える者がいらしたのよ。あなたもそのひとりに過ぎないといふのに立場をわかつてらつしやらないのはお可哀想」

桜雅族をだしたこの女はずつとまえから紅菜のことをしつているよつな口ぶりだった。そう、あなたのしらないあの方のことまで私はしつているのよ、といわれたようなきがする。

紅菜がなんど生を受け、なんど死をむかえたのか昴摩にはわからない。考えたこともなかつた。紅菜がはじめて生をつけたのは遙か昔の昴摩がうまれるもつとまえだらう。いまの紅菜にきいても紅菜がおぼえているわけがない。前世の記憶をもつた人間などそういうわしない。

昴摩は両拳をにぎりしめる。ながい爪が肌につきささつて指のあいだから血がながれてしまつていて。悔しかつた。あなたはなにもしらないのよ、といわれていることが、そして自分がなにもしらないことが。

「あら、でもあなたはまだお相手ではないのかしら。だつて紅菜様のそばにいるためには菜稚琉様や螢蘭様にみとめられないと夫にも妻にもなれないんですもの」

くすりとわらつて告げられた言葉に愕然とした。菜稚琉は認めてくれているかもしけないが螢蘭には自分はまったくといつていいほど認めてもらえていない。ただ、そのことを自分が男だからきにいらないのだとおもつていた。しかし、沙那姫は今たしかに夫もいたといったのだ。

昴摩はなにもいいかえせないまま背をむけてその場をさつていく。もし、紅菜を鳥籠に閉じこめてだれにみせないよう声すらきこえないようにただ自分だけが紅菜をみていられるように、ただ自分だけが紅菜の瞳にうつるよにしてももう意味はない。紅菜の体に紅菜の心にふれたやつがいるとおもうだけで吐き気がした。

沙那姫は紅菜のぬくもりがのこるその布団にそつとよこになりぬくもりをあつめるよつに抱きしめるとなつと田をとじる。

「紅菜様がわるいんですよ」

罪悪感をけすよつに沙那姫はつぶやいた。

紅菜は陰陽寮にきていた。もつここでは紅菜は顔だけで出入りができる。陰陽生が紅菜をむかえてくれた。彼の田には尊敬と憧れの光がやどりしているが、紅菜はその視線をきこせず、うかとめると少年にこづ。

「正宗殿はいるかな？火急の用件だとつたえてくれ」

紅菜の言葉に「はい」と元気よくこたえるといそいで正宗をよびにこつた。ぱたぱたと走る音が遠ざかっていく。しばらくして、ゆづくりとした足どりで正宗がきた。いやざといつてこるのにこの男は。

正宗は紅菜の顔をみておもこもよらぬことをこつた。

「紅菜様、女難の相がでてますよ」

「女難ね」

そういうて紅菜はくすくすわらうと正宗に竜女を嫁に迎えたことをはなした。正宗ははあと溜息をついて、さんざん忠告をうながす。

「私も家柄的に妖かしに惹かれがちですが、紅菜様には昴摩殿がいらっしゃるのにかまわないのですか？」

「昴摩か。竜女とともにおいてきた」

その言葉にはあとながい溜息をつくときをもちなおして正宗はいつ。どうして、そんなふたりをのこしてここまでこれるのだろう。正宗はあせらめたように仕事のはなしにもどる。

「用意はできていますよ。こちらです」

紅菜はその言葉に満足そうに微笑むと正宗につれてこく。正宗につれてこられた部屋にはしめ縄でかこまれた小さな祭壇があつた。さすが陰陽の頭が用意しただけのものはある。紅菜がのぞんでいたどおりのものができていた。

「こちらにお納めください」

正宗はそういうてしめ縄の内側の中央におかれた台をしめした。

紅菜は懐こしまじこんだ白い一つのちこさな陶器をなじべてそこにおぐ。正宗はそれをみながらいった。

「これではやはりいけませんね」

「まあ、こんなものですよ。これで病はひろがらなくなつたことですか。星々が先をいそぐなと忠告してくれているのです。ゆっくりやつましょ！」

紅菜はやつこつ。たしかに正宗のト占もこそぐいとは凶をまねくとでてこる。正宗と紅菜がちんたらとやつてこるのはこのためだ。本来ならもうとつぐにかたづいていてもいいのだが、一人のト占の結果が一致してこるので慎重にやつてこるのであるのだ。しかも、紅菜のト占では時をまでは真をえるとでていた。

別室で紅菜は酒をのみながら正宗の仕事をみてこる。とくとく、と注こでは器に口をつけた。

「正宗殿はひとり寂しくのんでいる友がいてもなんともおもいにならないとば。ああ、なんと無常なことか」

ひとりのみにあきてきた紅菜がわざとらしくこつ。そして、からになつた瓶をほおつなげると円をみあげる。もつあたりは暗くなり月がひくいとこひでこむらをみてこた。正宗は職務におわれていたがやつとかたがつを紅菜を無視して伸びをするとおなじよつて円を見る。

「明日は満円ですね」

十三夜の月は白く輝いていてまだ不完全だといつのにあたりを明るくてらしてこる。そして、正宗は祖父が都の没落を予言したことをおもいだす。もう三百年ちかくつづこむるこの都の没落は想像しがたいものだが、その変化は田につくなつて來てこた。

「月満つれば則ち虧く」

紅菜が正宗の心を察するよつこつた。円のよつに物事は盛り衰えるといつことだ。それはどんなにながくつづいてこいる都であつてもかわりはない。

「人は争つてでも榮かをきわめようとする。しかし、それには衰えがかならずある。それのくり返しだといつになぜ求めるのでしょう」

正宗はやつこつと紅菜をみる。紅菜はふとわいりと簡単な言葉

でかたづける。

「業の深さでしょ？」

なるほど我のぶつかりあいで生じた因が頭でわかつていてもそれ導いてしまつ。ふかく絡みつく過去の因はけつして容易には解放してはくれないといふことだ。

「紅菜様は月をみてなにをおもいますか？」

正宗の言葉に紅菜は月をせしながらいつた。

「月満ちるよう心が満ちるときは道もまた明るい。月欠けるよう心も欠ければ道もまた暗い」

つまり簡単にいえば心が欠けるとなに」」とも不満と恐怖にみちてみえることだ。また逆に心が満ちるどじんな険しい道もまつすぐに臆することなく歩んでいけるとこと。なに」」とも心ひとつとこうことである。

「ではつねに自信にみちている紅菜様はどんな凶事も吉にかえてしまいますね」

正宗はそういうと脇しそうに紅菜をみた。正宗は「ちど興味にかられて紅菜を占つたことがある。しかし、なにもみえなかつた。霞がかかりおぼろげになにかが動いたとおもつたら光がうまれ消えてしまつたのだ。

「正宗はなにかの気配を感じる。あまつよいものではない。

「紅菜様」

正宗はそのことを紅菜につたえる。紅菜も感じたのだろう。のみわしの器をことつとおぐとたちあがり正宗に「」。

「私の可愛い人ですよ」

そういつて部屋をでていく。そんな紅菜のつしる姿に正宗は「女難ですよ」とつぶやいてふたたび瞳に月をうつした。

祭壇のまえでたちつくしている女がいた。そつとしめ縄にかこまれている陶器に手をのばそうとする。急に女の視界が真っ暗になる。女はおどろいてしづかにきいた。月をおおわれるまでもつたく気配も感じなかつたのだ。

「誰？」

「夢花の君」

その声に鬼女はうれしそうに手をかくしている掌にふれてつぶやく。

「紅菜様」

紅菜は鬼女の手をかくしたままもう片方の腕で体を自分にひきよせると優しくかたりかける。

「私を困らせにきたの？」

「ちがいます」

紅菜の優しい声とすこし責めるような言葉に鬼女は慌てて否定した。そして、弁解するように言葉をつづける。

「私はただ紅菜様がお困りになつてているときいたから手助けになればと」

鬼女にはこのことをはなしたこともない。ではいったいだれからきいたというのか。紅菜はその疑問をそのままぶつける。

「誰にきいたの？」

「僧のかたにおしえていただきました」

鬼女は素直にこたえる。紅菜は今度こそ鬼女を責めるよつた声でいつ。

「そり。私以外の男のこいつとをきこつてしまつたんだね」

「紅菜様つ」

そうつぶやいて鬼女は口をつぐんでしまう。紅菜が鬼女からそつと離れてしまつたからだ。そして、戸に手をおくと背中をむけたまま紅菜はいった。

「私のことをおもうなら大人しくしていなさい」

そしてその部屋をでていつてしまつ。鬼女はその場に泣き崩れてしまつ。どうして自分はこんなひどい人を好きになつてしまつたのだろうと「己」を責めながら泣くしかなかつた。

正宗のもとに帰る途中、紅菜は童の姿をした式神をみつける。紅菜と沙那姫の子のような容姿をしている式紙ははじめてみるものだが

すぐに紅菜にはその式神が沙那姫のものであるといつのがわかつた。

「沙那姫からの使いだつ?」

そういうて童を抱きあげる。紅菜の肩に幼い手をおいてその式はいつた。

「沙那姫様が紅菜様に使えるようにといつた」

まだ五歳くらいにしかみえない童を抱いたまま歩みをすすめると

紅菜は「そつか」といつて正宗のもとへ向かつ。

（まつたぐ、ここにも恪氣のつよい者がいたか）

そうおもいながら紅菜はわが子のよくなその童の顔を見る。田元と鼻は自分に似ているが、おでこと口は沙那姫に似ていた。紅菜が「わが子だと」いえばだれも疑わない容姿をしている。

（正宗殿にもみせてやろつ）

正宗のおどろいた顔を想像しながら紅菜は楽しい気分になる。基本的に悪戯は大好きだ。

いつしてこの式神をだいて歩いている姿をみた者たちは紅菜の子だとおもいこみたちまち噂がひろがつた。都に激震が走つたがすぐにそれもおさまりなぜか紅菜にはより多くの恋文が届くよくなつた。

式神はいつのまにか沙那姫のもとにつかえつてしまつた。今日は陰陽寮に泊まるつもりでいる紅菜は正宗の部屋でくつろいでいる。正宗は陰陽の頭として呪のかかつた器を処理する吉田を占つているとこりだ。

紅菜は欠けることもないまん丸な月をみていた。月はさらにひくくちかくにあり、おおきなまん丸は光り輝いていてあかりがいらなりほどのあかるさだつた。だからこそ紅菜はあかりの油をつぎたしにきた者にあかりを消すようにたのんだ。こんな美しい月にあかりなど燈すのはあまりにも無粋のようなきがした。

茂みからカサカサと乾いた音をたて人影が姿をあらわす。茂みからでてきた者を月があかるくうつしだす。

こんなところまでくるとはおもつていなかつた紅菜はその意外な訪問者にすこし驚きの視線をむけるとすぐに微笑む。

「どうした？ こんなところまで」

鬼柳は歩みをすすめると紅菜のそばまでくる。そして、紅菜の手をとると甘い声でいう。

「美しい月をみていたらどうしてもあなたに会いたくなつてしましました」

鬼柳は文をわたしはしないがこつしてたびたび会いにくる。不意に会いにきてはこつしてたあいもない時間をすこす。

「男を口説いてどうする」

紅菜はおかしそうにいつたが、鬼柳はさうに口説きにかかる。緑の瞳が月夜に美しく輝いている。

「まったくどうすればあなたの心にはいれるのでしょうか？ 月にそばにくるように口説くほうがよっぽど簡単なようにおもえますよ」もちろん、鬼柳がこんなふうに紅菜に会いにきていることは昴摩はしらない。鬼柳は昴摩がいなしきをわざと狙つて紅菜に会いにきているのだ。そして、残念そうに鬼柳は紅菜につづけていつ。「お仕事のあいだはほんとうの姿の紅菜様に会えないのが残念ですね」

「もうすぐ、仕事もおわるわ。こつまでも手にすつてこいるわけにもいかないからな」

鬼柳の言葉に紅菜はそつかえすと鳥帽子をとり髪をといた。ぱさつと髪が散つてとたんに雰囲気がかわる。実は頭のうえにのつていると肩がこつてしかたないのだ。肩に手をあてて疲れたように目をつぶる紅菜に鬼柳はおかしそうに笑つた。

「髪をほどいてゆえるのですか？」

「鬼柳がゆつてくれればいいだろ？」

「夜叉様に怒られてしまいますよ」

女の髪をすける男はその女の恋人か夫だけだ。鬼柳はいままで紅菜の髪をといだこともゆつたこともない。

「大丈夫だ。いまは男だからな」

そういつた紅菜にすこしあきれながら鬼柳はいった。

「都合がよすぎますよ。それでは」

紅菜はそれをきいてすこし悪戯顔でくすくすわらつた。一人は丸々としたお月様のもと、たあいもない会話をたのしんでいた。そこにはいつてきたのは正宗だった。

「紅菜様、結果がでまし、あつ、すみません」

そういうて紅菜をみた正宗は部屋をでていく。成人した男性が髪をほだいた姿をみられるのは裸をみられることよりも恥ずかしいことなのだ。鬼柳は紅菜にほら、という視線をむける。

「正宗殿、かまわないからはいつてこい」

「いついけません。はやく髪をゆつてください」

紅菜は正宗にいつたがだんこ拒否した。紅菜からしたらもう肩がこつてすこし重もかすんできているのだ。ふたたび髪をゆいたいとはおもわない。しかたなく女性にもどると正宗に「もついいぞ」といつてよびよせる。

はいつてきた正宗は鬼がいることにいまさらながらおどりこたが、すぐに無害であることを察すると紅菜のまえに座した。黒鬼魔王の件もある。

「結果がでましたよ。明日、けりをつけましょ。もつこれ以上煩わされるのも」めんですからね」

「明日か・・・正宗殿、私の女難の相はまだ健在か?」

正宗はいつしゅん紅菜の顔をじっとみつめるといつ。

「残念ながら・・・明日きをつけでござりよ。失敗したらまた長々とながびくんですからね」

紅菜は「女難ね」とつぶやくと月をみあげた。そんな紅菜に手がたりているのをわかつていながら鬼柳はいつた。

「手をかしましょうか?」

「それこそ、殺されるぞ」

紅菜の言葉に鬼柳は「そうですね」というとかえつていった。こ

うして紅菜と会つて「ことは」とは眞摩はしらないのだ。

午の刻をつげる鐘が鳴る。ねずみ色の雲から雪がひらひらとふってきている。すこしおおきな雪は道や屋根にふりつもつては白く染めようとしている。

東寺のとなりにある広場に紅菜と正宗はいた。東寺と朱雀大路にはさまれたその場所にはなにもなく壁と門だけがある。師走にはいり陰陽寮は年末吉日におこなわれる荷前や晦日の大祓や追儺などの準備におわれてあわただしくとてもゆっくりおちつけない。

「紅菜殿、そろそろはじめましょうか」

正宗はそういうて呪のかかれた白い陶器を広場の中央においた。その場所には陰陽の印がかかれしており不思議なことにそこには雪がまつたくない。

「それではじめますよ」

正宗が器をわり、陶器に押しこめられている御靈を解放する。解放したとき外にもれてわるさをしないように正宗が結界をはる。結界内で暴れる御靈を紅菜が人形の紙にうつしていく。すべて始末できたあと火で浄化し煙とともに天へかえす予定だ。

「急急如律令呪符退魔」

正宗は剣印をむすびながら唱えていく。正宗が唱えるのにあわせて力た力たと陶器は震えだし、印に鱗がはいった。そこから臭気がたちこめるようにゆらゆらとなにかがでてきた。あつというまにあたりにはあふれでた御靈が渦巻いていく。

「臨兵闕者皆陣裂在前」

紅菜は真言をとなえながら人形に押しこめていくが一体につき10体が限度だ。正宗は印をむすんだままぶつぶつといつている。陶器からは次から次へと御靈があふれてきている状態だ。それでも、紅菜はおなじことを何度も何度もくりかえしていく。紅菜がつくった人形があつというまに数をへらしていく。(あと一枚か……)

最後の一枚を懐からだす。しかし、陶器はとつぜんまつぶたにわれ炎のような御靈たちがかたまつて人型の黒い影になった。

「なに?」

正宗はそのとつぜんの変化にとまどつたが紅菜はかまわざ人形をなげつけた。しかし、人形はバチバチと火花をちらすと燃えて消えてしまった。

正宗は紅菜を援護するよつにとねる。

「急急如律令悪鬼退散」

影は正宗の呪をはじくと紅菜に標的をあわせ襲いかかってきた。

「・・・」

紅菜が応戦しようつと拳をにぎりかまえたとき紅菜のまえにたちはだかり影をはじいたのは鬼女だった。はじきとばされた影はうめき声をあげてたおれている。

「花夢の君」

鬼女は紅菜をみるとすまなさそくな表情をむける。しかし、それでも紅菜に恋焦がれるおもいでこじこじまででてきてしまった。

「・・・ごめんなさい」

紅菜はすこしこまつたような表情を見せたが優しくわらわ。そんな紅菜に鬼女は手をのばそうとしたとき鬼女をねらつて影が攻撃してきた。紅菜は鬼女をかばう。

「紅菜様つ」

影の腕が紅菜の背中に突き刺さり影はそのまま紅菜のなかにはいつてしまつた。

（女難ね・・・）

紅菜は自分の意識がだんだん遠のいていくを感じながらおもつた。すこし、ふざけすぎたのかもしれない。

「紅菜殿つ」

紅菜の瞳がうつむなことを認めると正宗は戦闘体勢にはいる。鬼女は戸惑いながら紅菜をみていた。陰陽印をむすぶと紅菜を攻撃するが紅菜はなんなく弾き飛ばし、そのまま流れるように攻撃してき

た。

（つ、やはり私だけではっ・・・）

それでも今日は『爛王』をもつていなければましである。しかし、正宗のはつた結界もすぐにやぶれてしまうことになるのだろう。紅菜が外にでればややこしいことになるのは田にみえている。

「カラリンチヨウカラリンソワカ」

正宗は人形の紙をとりだすと式神をまねく呪をとなえる。そして、ふつと息をふきかけてばなすと虎があらわれた。正宗の式神は紅菜に牙をむけたが、紅菜はそれをよけるとおなじように人形の紙をだし呪もとなえず息をふきかけた。一体の式神は瞬時に正宗の式神をたおしてしまつ。

「つんざかへいわくわかこじんねつせん臨兵鬪者皆陣裂在前」

正宗はあわてて真言をとなえると邪破の印をむすんだ。紅菜は腕を交差するとそれをしのいだ。このままでは非常によくない。

「おどきなさいつ」

きゅうに正宗を叱咤する声がしたかとおもつと両脇からちこちな影が飛びだしていった。ちいさな影はあつとこつまに紅菜をとりおさえる。竹が紅菜の喉をしめつけていた。正宗はちいさな式神の一人にみおぼえがある。あのとき紅菜が抱いていた童だ。

「おさがりなさい。ここからは私が相手をします」

そういうてあらわれた女性は美しい顔に印があつた。正宗はそのみたこともない女性にいた。

「あなたは？」

女性は正宗をみるのではなく、鬼女を一瞥するとなのかわりに自分の立場をいう。衣からのぞく腕は鱗がしきつめられ、爪はながく鋭利になつている。

「夫を勇めるのも妻の役目です」

そういうと紅菜に一直線にむかう。そして、その腹に風穴をあけて動きをとめた。いつさこの迷いのない攻撃だつた。血をはきひざまづく紅菜を式神がささえる。沙那姫は紅菜の傷をおさえると紅菜

にこゝ。

「しつかりなさい。紅菜様ともあるう方がなんたるさまざますかつ」叱責する沙那姫に紅菜の唇が微笑む。そして、瞳をみひらきブツブツとなにかをつぶやいたかとおもうとそのまま瞳をとじて眠りについてしまった。

「正宗様、ここでよろしいから、禁呪符陣をひいてください」

正宗は紅菜の呪力を封じる印をえがいていく、そして呪をとなえた。沙那姫はたちあがると正宗にいい、さううとする。

「正宗様、お手を煩わしますが紅菜様をよろしくお願ひします。きっと目覚めることはないとおもいますから」

そんな沙那姫に鬼女はきく。妻となつたことはどうでもよかつた。だってあれだけの人だもの妻の一人や二人いてもおどろかない。だからこそ、慈悲の一夜がほしかったのだ。

「紅菜様はご無事なんでしょうか？」

沙那姫は軽蔑したような目をむけながらでもその質問にこたえたのはほんのすこしの慈悲だ。

「大丈夫です。あれぐらいで死ぬような方ではありません」

そして、沙那姫は威嚇するように鬼女にいう。

「・・・ですが、もう紅菜様のまえにはあらわれないでください。今度このようなことがあれば私があなたを始末します」

そうはきすてるに沙那姫はこの場をあとにする。あの鬼女は沙那姫がもつとも嫌いな女の性格をしている。好いた男の顔もたてられずましてやこのように泥をぬるなんて沙那姫には理解できないし理解したくもない女の行動だ。

男の顔をたてるのは女の役割。献身的に尽くしてきた沙那姫はつねに紅菜のことをおもつて行動している。沙那姫にとつて自分を犠牲にしてまですべてを捧げてまで愛している人。そして、それが沙那姫の最大の愛の証。

寒空のした紅菜をとじこめているこの場所はまったくといつてい

いほど寒さを感じない。正宗はそのことにおどろいていた。寒いことも暑いこともなく適度な温度をたもつていてる。

「不思議ですね」

正宗はうえをみあげてつぶやいた。紅菜を中心に四方に結界がはつてあるらしいが、物の怪も出入できれば人も自由に出入りできる。さえぎつてているのは雪と風だけだ。とうぜんのように頭上には雪がふりつもり、なんだか透明の屋根があるみたいだつた。

正宗のよこには一人の童姿の式神がいる。式神たちは紅菜から田をそらさない。あのとき一瞬、紅菜の意識がもどつたとき自分で影を封じたようにみえたのだが油断はできないとこりうことじだらば。

「紅菜つ、紅菜ツ」

遠くからきこえる昴摩の声に正宗はきたなとおもひ。声がきこえたとおもつたらすぐには昴摩がふつってきた。かけよひつとする昴摩を式神がとめる。青い竹に妨げられた昴摩は忌々しそうに式神をみたが、式神たちは動じることはなくいつた。

「誰も紅菜様にふれることは許しません」

「大丈夫です。命にかかることはありません」

しかし、まったく状況のわからない昴摩は納得できない。ましてや目のまえにいる式神はみたこともなければ誰の式神かもわからな。紅菜の新しい式神ではないことは目にみるにあきらかだ。

「信じられるか！紅菜がこんなことになつたのははじめてなんだぞ

ツ

式神たちは竹をおさめると昴摩にいつ。

「紅菜様がこうした戦法をおとりになるのははじめてではあります

ん

「昔はよくつかつていらつしゃいました。紅菜様が敵をおさえていあいだに沙那姫様が元凶を始末するだけです」

沙那姫とともに暮らしていたころ紅菜は本体と駒がわかつてた場合にはよくつかつた戦法だった。もちろん条件があつて、本体が駒を動かすのに大半の力をつかつてている場合だけだ。

「オレは今のは紅菜しか知らない」

そういわれた昴摩はそういうて頭をかかえてすわりこんでしまつた。そんな昴摩の姿みて正宗はおもつ。

(この人は・・・・)

正宗は紅菜の昴摩への態度は他とは違うと感じているのだが、本人はまったくきづいていないようだ。まあ、こういうことは本人たちよりも他の者のほうが敏感なのかもしれない。

「あなたはつまらぬことにばかり目がいくんですね」

式神の一人が昴摩にいった。式神たちは沙那姫がどういう経緯で紅菜の妻になつたのかしつっている。紅菜に恋心があつたわけではなかつた。愛しいと涙に濡れた沙那姫に紅菜が憐憫の情をかけたのだ。紅菜のそばにいる代償はおおきかつた。沙那姫は命をつなぐことも自身の命もあきらめている。

(このような者に)

紅菜と沙那姫のことをよくしつっている式神は不甲斐ない昴摩に苛立ちをかんじる。とても好きにはなれない。いや、嫌いだ。

日も暮れて雪がふるなか結界にはうつすらと雪がつもり白い屋根になつてしまつていて。満場の月があたりを明るく照らしているおかげでそんなに暗いとはおもわなかつた。月と星が隠れてしまうまえにかたをつけたいとおもいながら時がくるのをまつた。

沙那姫は宇治の大橋にたつていて。反対側から笠をかぶつた僧があるいてくる。よく焼けた茶色い肌に法衣を身につけ数珠をかけている。気高い目をしているが、洗練されたものではなく傲慢さをかんじるものだつた。

「お坊様、どちらへいかれるの?」

沙那姫はそういうて声をかける。僧は足をとめると沙那姫をみた。強気な目にきゅつとした唇。整つた顔は美しい。一目で人外の者だとわかるほどの美しさだ。

「病払いをしに」

僧の言葉に沙那姫はくすぐり、おかしそうに笑う。そして、笑いをとめると僧にいった。

「あなたはあの方をうまく操つたつもりでいらっしゃるのね」

そういうつて、沙那姫は紅のぬられた自身の唇にふれる。朱色の紅が指先につき、それをみながらさらに言葉をかける。

「気高いお坊様。戒律を破つてしまつたらあなたはどうなさるかしら?」

「なに?」

僧が意味もわからないといつてみつづけた。そんな僧に沙那姫は紅をなげつける。指についていた紅は僧の体につき動きをふつじた。しかし、完全に封じたわけではなく手足の身動きぐらいならとれるかるい縛をかけただけ。しかし、僧はそれすらはねかえせないようだ。

「お坊様、あまり無理をなさるからそういうことになるんですよ。あなたのしかけた病の呪はあの方に囚われて解くこともできないのでしょうか?」

沙那姫はそつと手をおく。その仕草はとても女らしさのだが、ゾッとする恐怖もはらんでいる。指先で僧の輪郭をなぞるとつづけていった。

「このままあなたを食べてしまつてもいいのだけど……」

「そ、それはつ」

怯えた表情をみせたことに沙那姫は満足するとすこし残念そうにいった。修行だけはしっかりしていしたその体はそれなりに美味しそうだつたからだ。まあ、紅菜とくらべるとくらべものにならないのだが。

「あの方に怒られてしまつからやめておくわ。わあ、びりしまじょう? 五戒のひとつを破るのもみものですけど……」

沙那姫から逃げようと僧ははしりだす。沙那姫は三本の指をならした。パチンといつ音に反応したように僧の足はもつれてこけてしまう。

「逃げてはだめよ。お坊様。あなたにはききたいことがあるの。鬼女をしむけたのはあなたでしょ？」

答えようとしている僧に沙那姫は「これ以上追求しようとはせず歩きだす。僧は自分の意志とは関係なく足がうごいた。沙那姫のあとをついていくように足がうごくのだ。

操られてついたところは朱雀大路と東寺にはさまれた広場だった。そこには白い雪がうかんでいて、そのしたには陰陽の頭と横たわる紅菜がいた。いや、その他にも童姿の式神が一体と昂摩もいる。

「さあ、お坊様。自分のなさったことの後始末をしてもらいます」

僧は怪訝な顔をして沙那姫をみた。昂摩は沙那姫がつれてきた僧が紅菜をこんなふうにしたとおもうと頭に血がのぼってくる。こんなふうに紅菜が自分の身をつかつたことに困惑がおおきい。

「おやめなさい。紅菜殿はなにか考えがあるようですよ」

今にも僧に飛びかかりそうな昂摩に正宗はいった。正宗を睨むようにもつめたが正宗も瞳で制する。正宗の目には紅菜がなにかをつかもうとしているようにおもえた。それを組んでいるのだろうか。妻となのつた女もまじりっこしいやり方をわざとえらんでいるようにおもえる。

沙那姫は紅菜の名をよびながらその頬にふれる。人形のように動かない紅菜を目覚めさせるための儀式。

「さあ、起きて。紅菜様」

紅菜の指がぴくつと反応する。それでも目蓋をあけようとしない紅菜に沙那姫はさらに言葉をかける。

「いけないかた。目覚める方法を忘れてしまったの？ さあ、手伝つてさしあげるから目を覚まして」

そういうて紅菜の頬から手をはなそとした。沙那姫の動きにあわせるように紅菜は目を覚ます。起きあがった紅菜の目は正氣をためつていない。紅菜は虚ろな目まま僧をうつしだす。

「お坊様、紅菜様に悪いことをなさったでしょ？ だから、お坊様が自分であとかたづけなさつてください」

沙那姫の言葉を合図にしたのか紅菜が動きだす。紅菜の手にはいつの間にか短刀が握られていた。それが僧の首をおとすまえに正宗と昴摩は紅菜の動きを封じる。

「どういうことですっ？！」

沙那姫がなにをかんがえているのかわからず正宗はいった。

「紅菜っ、おい、目えさせ！…」

紅菜の邪魔をした正宗と昴摩を沙那姫の式神がおさえる。

「なにを？！」

「邪魔だッ！…」

沙那姫は僧にちかづくと一本の短刀をわたす。地にふした短刀はつめたい光をはなつていて。

「お坊様、丸腰では分にあわないでしょ？…これをお使いなさい。紅菜様を殺せばあなたは助かる」

「しかし、それではワシは…・・・」

「五戒を破つてしまつ？…くすくす、ではあなたが命をたてば術はきて紅菜様ももともどる」

僧の言葉に沙那姫はおかしそうにいった。紅菜はふりふりと僧にちかづいてくる。沙那姫は紅菜に道をあけるといつた。

「さあ、紅菜様」

紅菜は俊足で僧の首をつかまえた。僧の首をおさえたまま紅菜はみおろす。僧は手探りで短刀を探しだすとつかまえる。にぎりしめて紅菜の腹にむけたが突き刺すことができない。僧が戒律をまもるのは仏の加護をうけるため。戒律を破れば死後地獄におちてしまう。

紅菜は僧の首をおさえたまま短刀をふりあげる。死にたくない。地獄にもおちたくない。僧はどちらも選べずただ、ふりおろされる刃の冷たさをみていた。

「ひつ」

僧はどちらも選べず紅菜から冷たい光を放つ刃から目をそらす。ザクッと短刀が音をたてた。紅菜は短刀から手をはなしてたちあがつた。

「紅菜様、おいたがすぎますよ」

沙那姫の言葉に紅菜はにっこり笑う。そして、欠けはじめている月を指さしていった。それは遙か昔をおもいだせる言葉だ。二人の思い出の言葉。

「月はみたことある？不満は彼にいえばいいよ」

「あら、私の不満をきくのは鬱陶しいのね」

「君といるのに楽しくすごさないともつたいないでしょ？」

紅菜につれられてはじめて地上にでて満月をみたときに交わした言葉。あのとき沙那姫は父の愚痴ばかりをいったのだ。そして、いまも沙那姫は嬉しそうに笑う。

「はあ、はあ、はあ」

荒い息をして状況がまったくのみこめない僧は呆けた顔で紅菜をみあげている。紅菜はそんな僧の視線にきづいていう。

「覚悟もないのに半端なことをしていると都ではすぐに足をとられてしまうよ」

今回のことにはこの僧が自分の能力を帝に認めさせ自分の地位を確立させようとした騒動だ。まず、成仏してない御靈をあの陶器に納め、川の水を解した病を流行らせた。納めても度々おこる病に手をあげかけたところ自分が問題を解決しにくという筋書きだったのだろう。

「どうして・・・」

僧の言葉に紅菜はおかしそうに笑った。

「覚悟がないからすぐばれるんですよ。病はたしかに高熱や湿疹をともなつていていたけど、不思議なことに命をおとす者はいなかつた。これはもの凄く不自然なことで他に意があると暗示しています」

正宗もきづいていたが元凶がどこにあるのかわからなかつた。紅菜がまどろつこしいことをしたのはこのためか。この僧は実力があるがために悪しきかんがえの者に利用される恐れがある。覚悟がない者はしらぬまに誰かの手に転がされて後々、厄介なことになりかない。目先の欲に目を奪われて滅びていく者などこの都には腐る

ほどいるのだ。

「なるほど……」

正宗がつぶやく。意に解したようにいつた正宗に紅菜はふりむく。そして、掌にふうと息をかけた。御靈をとじこめた紙の人形が紅菜をかこむように円になるとまわる。紅菜の掌には紅菜にとり憑いていた影が姿をあらわし自分からぼつと赤い炎をあげた。それを合図に他の人形たちも燃えて消えてしまう。

「力のある者は忘れがちだが、我々が術を使うということはつねに危険をはらんでいる。おおきな術になればなるほど呪がかえされたとき、予測不能な動きをしたとき、術者は身をもってその反動をうける。力をえること、力をふるうこと、何かをするときには覚悟がいるんですよ。いまのお役所陰陽師たちにはわからないかもしだせんがね」

正宗はそういうと僧の短刀をひらひら。正宗がさわったとたん短刀は一枚の笹の葉にかわってしまった。正宗はふつと笑うとその笹を紅菜にわたす。

「ほんとうに人のわるい人だ。これでは紅菜様は死にますまい」

「ワシは……試されたのか？」

僧の言葉に沙那姫がいった。

「試す？ あなたごときそんなことする価値もないわ。紅菜様はよけいな思念をのこしたくなかったのよ」

沙那姫はそういうと紅菜の腕に甘えるようにからみつぐ。そんな沙那姫を拒否することもなく紅菜は正宗にいつた。

「正宗様は人使いがあらいですからね。すこしでも仕事はふやさないよう預防しないと……さあ、帰るぞ昴摩」

紅菜はそういうてその場からさつていつた。呆けて沙那姫と紅菜のやりとりをみていた昴摩を紅菜はみると声をかけた。沙那姫はムツとしたがこれも紅菜の意志ならしかたない。

のこされた正宗は僧に背をむけると仕事があわつた開放感に腕や背筋をのばす。そして、なにもいわずにさつていつこうとした。そん

な背中に口の咎をとつぱつに憎はいった。これだけのことをして咎がないわけがない。

「ワシは・・・・・」

正宗は首の骨を鳴らしながらいう。紅菜もこんな終焉を予想していたのだろう。滅びゆく都にわざわざしがみつくしつことはない。しかし、都が滅びるとはかんがえもつかない者たちはここに固執するのだろう。

「病送りも完全に完了してもう仕事はあわったんです。これからいろいろと暮れの行事もひかえているので仕事はすぐないにこしたことはない」

そういうて正宗もこの場を後にした。陰陽寮にかえつたら今回のことについしての帝への訴状を書かなくてはいけない。それだけではない荷前、大祓、追儺、その他にも年末年始の挨拶にいろいろとやることはあるのだ。

夜があけて、月と太陽がともにあらわれる冬の夜明け。朱雀大路をまっすぐ歩いて正宗は職場へともどつていった。

月と太陽のいかわる空をしながら紅菜は酒をのんでいた。熱い酒からは湯気がでている。火桶を背において紅菜はひとり酒をのむ。そんな紅菜のもとに美しい人が姿をあらわした。

「花夢の君、こんなところにきては妻になにをされるかわからないよ」

紅菜はそういうながら朝もやのなかから鬼女の手をとる。鬼女はすまなそうに紅菜に顔を見せた。

「ごめんなさい。私はただあなたの役にたちたくて・・・・・」

紅菜は鬼女の頬に冷たい自分の手をおくとうえをむかせる。鬼女の瞳は濡れていて紅菜に救いを求めるようにみえた。

「可愛い人。夜はすぎてしまったから別れの口づけでもしようか」

紅菜の言葉に鬼女はおどろく。紅菜はそんな鬼女にやさくし唇をかさねた。鬼女は閉じた瞳から一筋の涙をながして朝もやとともに

きえていった。

「安らかに眠るんだよ」

紅菜は最後の言葉をかけて部屋にもどりうと階に足をかけた。そこには腕を組んで拗ねている困った竜女の顔があった。

（あら、あら、困ったものだ）

紅菜はおもいながら沙那姫の手をとる。沙那姫はふんといつよつにその手を叩くとそっぽをむけてしまった。

「拗ねている顔は君には似合わないよ」

紅菜はそういうながら沙那姫に微笑みかける。すると沙那姫は瞼をまげたままいった。

「そんな笑顔では私はだまされなくてよ」

「困った人だ。遙か昔に海の城でみかけたときはそんなふうに捻くれてはいなかつたのに」

紅菜がいつた言葉に沙那姫は嬉しそうに微笑むと紅菜にいつ。

「私とのことおもいだしてくれたの」

「もちろん。君がお父上と喧嘩して巻きこまれたことも、よく月をみながら君の膝で眠つたことも全部おもいだしたよ」

沙那姫はうれしそうに紅菜にだきつゝとそのまま紅菜をおしたおしてしまつ。そして、紅菜にいつた。

「私との最後の約束も覚えていらっしゃる？」

機嫌をなおした沙那姫に紅菜はハハハとおかしく笑うといつた。

「覚えているよ。『もし、忘れてもかならずおもいだしてくれたいね』だろう？」

沙那姫は紅菜に馬乗りになつたままうれしそうにほほえむ。ずっと紅菜のそばにこられなかつたのはおもいだしてもらいない寂しさに耐えられる自信がなかつたから。でも、昂摩のことをきて意をけつしてでてきたのだ。その沙那姫の喜びがわかるだろうか。そんな沙那姫に紅菜はきゅうに真面目な顔になるとそつと沙那姫の腹部にふれていつた。

「苦しくない？」

きづかうような言葉に沙那姫はとろけそうな顔をむけるとそつと紅菜の手に自分の手をかさねて静かにいつ。

「ええ、だつて紅菜様の大切なものですもの」

沙那姫が自分を犠牲にしてまであづかつているもの。紅菜はそのこともいつしょにおもいだしてくれたのだ。これが沙那姫が紅菜にむける最大の愛の証し。遙か昔、紅菜自身がつみだし、きたる時がめぐるまで保管されるもの。

その言葉にほつとしたように紅菜は表情を緩めると沙那姫とみつめあつた。

「おい」

一人の世界は不機嫌な昴摩の声でさえぎられた。視線をむけると鬼らしい昴摩の顔がある。怒っているのは目にみえてわかる。しかし、そんな昴摩よりも後ろにいる螢蘭の姿に紅菜はいやな予感がした。

「どうこいつことだ？」

あきらかになにか誤解をしている昴摩はほつておいて、いやな予感をふんふんさせている螢蘭に質問をする。

「師匠、なにかようですか？」

螢蘭は沙那姫にかるく手で挨拶すると紅菜にいつた。

「昨日の夜、さぼつたでしょ？」

にやつと意地のわるやうな笑みをうかべていう螢蘭に紅菜は反発した。だって、あればどうかんがえてもできる状況じやなかつた。

「それはっ・・・・・」

うるさくいう紅菜の口を問答無用と掌でほんと押さえると螢蘭は容赦なくいつた。

「はい、約束破つたら修行でしょ？ きづかう潔さのないことでは立派な人にはなれないわよ」

「つ、ふぐ、ふぐ、」

紅菜は声にならない抗議をしたがまったく意味をかいさない。紅菜のうえにのつかつている沙那姫に螢蘭はいつた。

「と、いうわけで沙那姫、準備よろしく
「はい、わかりました。支度してきます」

そう素直にいうと沙那姫は紅菜の修行の準備をはじめことひとつと
部屋をでていった。紅菜にたいして疑惑だらけの昴摩に螢蘭はいう。
「おまえもついてくるか？紅菜のついでにいつしょにみてやるわよ
「もちろん！オレもいく」

「よし、よし。みつちり鍛えてあげる。ああ、今回は忙しい～鬼の
ガキが五人に紅菜だらう。久々の修行で腕がなるぜ」

口をおさえられたままの紅菜はあきらめたように言葉をはつすることをしなくなり、かわりに心のなかで叫んだ。

（だれか助けてくれ　　）

もちろん誰も助けてくれるわけがない。なにを勘違いしているか
はわからないが、昴摩はこれから自分の身におこることがわからな
いでいるようだし、沙那姫は義父義母のような螢蘭、菜稚琉には逆
らわない。

3・鍛錬

紅菜はげつそりする気持ちで眼前にひろがる風景をみていた。みおろすと池と木々の木肌が雪化粧で白くなっている。紅菜をのみこんだあの桜もいまは眠っているかのように葉をおとして枝に雪化粧をほどこして肌をさらしていた。

物好きなのか馬鹿なのか紅菜とおなじ運命を共にする者たちが五人、紅菜の後ろに控えている。昂摩はともにするのはしかたない、といふか巻きこんでやるにきまつっている。しかし、あの四人はまつたく縁もゆかりもなかつた。いや、しいていうなら昂摩の兄弟というだけだろうか。

「紅菜様、あなたらしくないそんな表情を浮かべて」

冷たい風に吹かれていた紅菜に鬼柳が声をかけてきた。なかなか利口なやつかとおもつていたがどうやらただの馬鹿のようだ。

「ああ、憂鬱でな・・・・」

力なくいうと紅菜は遠い目をして空のむこうへ、遠い風のさつていぐ地をみつめた。自分も風とともにさつていきたい。

鬼柳や他の兄弟たちも黒鬼魔王に紅菜とともに修行ができる。腕をあげるにもいいし、何より紅菜とおちかづきになれるぞといわれ今さら修行かとおもいながら参加した。つまり、ここにいるのは紅菜の夫候補の者たちばかりだ。

紅菜に文を送つても読まずにつきかえされてくるし、直接口説きにいこうとしても昂摩が目を光らせていていつこうにちかづくことは難しい。しかも、妻とかなる女まででてきたのだ。そんななか、こんなおいしいはなしがくれば誰だつて飛びつくにきまつっている。

紅菜はそんな意図にはきづくこともなく遠くをみつめこれからおきるわが身の不幸を嘆いていた。もうこの地にもどつてきたくはなかつた。しかも、極寒の冬の季節にいつなるとは不幸をとおりこして

笑えてくる。

（発狂したふりして逃げようかな・・・）

紅菜らしくもないことをかんがえていると菜稚琉と螢蘭、それとなぜか黒鬼魔王があらわれた。菜稚琉は紅菜と視線があつとにつり微笑む。

「沙那姫、具合がわるいのか？」

修行のときはかならずそばにいてみている沙那姫がいないところとは体の具合がよくない証拠だ。無理をさせてしまったから。

「大丈夫ですよ。すこし熱がでているだけですから」

菜稚琉はそういって紅菜を安心させる。昴摩も鬼柳もその言葉におかしいとおもつた。竜女である沙那姫が体の具合をわるくするなんてかんがえられない。ましてや、熱をだすなんてありえないことだつた。

「そうか。たいしたことないならよかつた」

ほつとしたようにいつた紅菜の表情には慈しみすらうかんでいる。昴摩はそのことがきにいらなかつた。都をでるまえのはなしもまだついていない。

（やつぱり・・・）

紅菜はたしかに沙那姫の腹をおさえて心配そうにしていたのだ。いまの紅菜は女だから子ができるとはおもえないが、転生前の紅菜が男ならありえるはなしだ。

「さつさとはじめるぞ」

螢蘭はそういう。沙那姫が心配な紅菜はそれをきいて自発的に池にとびこんだ。もちろん、きている衣を脱ぎ捨てて肌をさらして飛びこんだ紅菜に目をむいて他の五人はみている。いや、昴摩だけはちがつた。紅菜をとうとう池に飛びこむ。鬼柳も昴摩を見てそれをおつていく。

「おら、さつさと飛びこめ」

螢蘭はそういうと残りの三人の尻を蹴り飛ばして池のなかにおとしていく。どぼーん、と水におちる音がきこえてくると螢蘭は岩の

先端にすわつてしたをみた。もう、さきに飛びこんだ三人は顔をして浮いてきている。紅菜はなれた顔で泳いでいるが、あの二人はなんとかついてきているレベルだ。

「おお、さすがだな」

黒鬼魔王は三人の姿をみおろしながらいつた。この池には術がかつてている。妖力や靈力を封じる術と手足にかかるく成人10人分の重さがかかるようになつていて。つまり、この深い池のなかでただ泳いでいるだけでも大変なことなのだ。

「おーい、今日は日が完全に昇るまでがんばれ」

胡坐をかいて螢蘭は声をかけた。とりあえず、初日はこんなものでいいだろう。それをして昂摩と鬼柳は青ざめた。しかし、紅菜はすこしづかに笑みをうかべる。まだまだこんなもの屁でもない。

「俺の息子とりあえず三人は減つたな」

いつこうにあがつてこない三人の息子をみると黒鬼魔王は縁起でもないことをいう。菜稚琉はその言葉をきいて池をみに螢蘭たちにちかづいた。菜稚琉がみたときには鬼柳が力つきで池にひきもどされるところだつた。

それをおづのようにしばらくして昂摩が沈んでいく。それをみて菜稚琉はパチッと指をならした。その音に反応して池のなかから命の危機を感じてそうな者をひきあげる管狐の姿があつた。

「はやいなあ」

三人があがつてきたことを認めるに螢蘭はそういうてしたにおりていく。池のなかにはおちず岸に着陸すると、のびてくる三人の横腹を蹴つた。

「ごほ、ごほ、なんでつちからがつ、はあ、はあ」

妖力にたよつて生きてきた者にとつてそれを封じられましてや重りをつけて水に落とされれば無力な赤子とかわらない。螢蘭はむせている三人にいづ。

「つづけるなら池にはいれ。無理ならとつとと帰れ」

無慈悲な螢蘭の態度に顔を真つ青にしている。しかし、三人にも

誇りがあるのだろう。とぼとぼと池のなかにはいっていい。そして、やはり浮いてこない。管狐が助けて螢蘭が強制的に意識をとりもどさせる。このことのくりかえしだ。

しかし、螢蘭が首をながくしてまつてている昴摩と鬼柳はなかなか管狐に助けられるような事態にはおちいらない。浮かんでは沈み、また浮かんでは沈んでいくをくりかえしていた。

「螢蘭、あとはまかせましたよ」

うえから菜稚琉はいうとさつていつた。沙那姫の看病にいかなくてはいけない。なぜか黒鬼魔王もいつしょにさつていつた。結局、この日最後まで沈みもせずにずっと浮いていたのは紅菜だけだった。きを失つて助けられたのは鬼柳が一回、昴摩が一回、あとの三人は話しにもならない。

「よつしゃ、今日はおわり」

螢蘭の言葉を合図に紅菜は岸まで泳ぐと横になる。水からである瞬間がもつとも体がおもたく感じる瞬間でそれにバランスをくずして池にひきもどされる「一、二回」それでも、紅菜は岸にあがつて仰向けに横になつた。

昴摩や鬼柳もおなじように横になつていて。それぞれの手足についているのは細い石の輪だ。この石が信じられないほど重い。

「はあ、はあ、はあ」

それぞれが胸を上気させてあらい息をしている。そんななか紅菜はいちはやくおきあがると凍つていく衣もきにせずさつていてこうとする。外気にさらされた太ももや肩や背、腹までも真っ赤になつている。胸にまいていた白い布とかわりなかつた肌がいまはまつたくといつていいほど異質な色になつていた。

そんな紅菜の姿を昴摩は横目でおうだけでそれ以上はおうことはなかつた。その姿に鬼柳は不思議におもつたが、鬼柳自身それどころではなかつた。

濡れた衣を脱ぎすぎてなにもまどつていらない冷えきつた体に紅菜は

一枚の衣をまとう。てきとうに腰紐で前をあわせると足早に沙那姫の部屋へと歩いていった。そんな紅菜のようすに菜稚琉は記憶がもどつたことをしる。

（沙那姫とのことをおもいだしたのね）

沙那姫とともにいたころ紅菜の家はここだった。妻となつた沙那姫に螢蘭が部屋をあたえ紅菜が死ぬまでそことともに暮らしていた。紅菜は転生出離を七回くりかえしている。沙那姫とであったのは紅菜が五回目に生まれかわつたときだ。沙那姫は熱烈に紅菜を愛して妻の座についた。はじめて紅菜に婚姻をむすぶことを許した相手が沙那姫だ。そのほかにも紅菜のそばにいることを許した相手はいたが、彼らもまた沙那姫のように紅菜の大切なものをあずかつている。

「紅菜様があんな顔をなさるとはおもいませんでした。沙那姫とはどんな人物なのです？」

そういうてあらわれたのは黒鬼魔王だ。菜稚琉は黒鬼魔王に微笑みかけるといった。黒鬼魔王はその笑みを曲者だとおもつている。いつけん優しく慈悲深い微笑のようにおもうが菜稚琉自身のかんがえや本心がどこにあるのかわからない。螢蘭や菜稚琉とかかわればかかわるほど紅菜があんなふうに育つたのが納得いく。

「沙那姫は紅菜にとつて特別な相手ですよ。もちろん私たちにとても娘のような存在ですけどね」

その言葉に黒鬼魔王は沙那姫が紅菜はじめ螢蘭、菜稚琉に大切にされていることがわかる。

二人がそんなことはなしているじか、紅菜はもう沙那姫の部屋にいた。すこしつらうように息をして頬を火照らしている沙那姫の顔にふれる。

「紅菜様？」

沙那姫は頬にあたる冷たく心地よい手に目をあけた。すこしでも紅菜の姿をみていたくてつらい体をおこし、こゝうして目を覚ますのは久しぶりでうれしかった。昔からこゝして寝こむと紅菜はそばに

いてくれるから。

「おこしてしまったか？」

「手が冷たくて」

「そうか、すまん」

そういう手をはなそとした紅菜の手をひきとめると「気持ちいいです」といつて笑う。紅菜はほつとしたように再び手をおく。紅菜のきづかうよつた顔に沙那姫は懐かしさすらかんじてしまつ。「はやくよくなつていつものように世話をやいてくれ」

紅菜の言葉に沙那姫はくすくす笑うと「はい」といつてまたすうすうと眠りについた。昴摩は物陰でそんな二人の姿をみていた。そして、自室へもどる。けつきょくその日は紅菜が昴摩のもとへもどつてくることはなかつた。

沙那姫は明け方には熱もさがりもどりおりになつていて。日を覚ました沙那姫はなにもまとわざ寒いなか手をにぎつて眠つている紅菜を見る。自分が眠つたあと紅菜はあの男のところへもどつているとおもつていた沙那姫はそんな紅菜の姿を喜んだ。そして、冷えきつた体を温めるよつに自分の布団を紅菜にかけたとき、紅菜が日覚めた。

「お風邪をひいてしまいますよ」

沙那姫はそういうて紅菜に声をかけた。眠たそにぼーうとしている紅菜をおかしそうにみつめると沙那姫は紅菜によりそつた。そして、意地わるなことをいう。

「鬼の坊やのところにはもどらなかつたの？」

「昴摩・・・・?ああ、昨日は君が心配で・・・・・」

「まあ、よひしいの?」

「なぜ?」

なぜと不思議そうにいつた紅菜を沙那姫は拗ねた気持ちでいつ。だって、やつぱりなんにもわかつていな。あのころから紅菜はちつともこつち方面は無垢なままだ。恋愛じつにはしても恋愛をすることはないのだろう。他には鋭く、自身には鈍い紅菜にはやはりは

がゆいものを感じた。

「もう、紅菜様つたら」

急に機嫌のわるくなつた沙那姫に紅菜はさらに不思議そうな顔をして首をかしげた。そんな部屋に螢蘭がはいつてくる。紅菜の稽古着ももつてきていた。

「おい、メシ食つてわいつと修行はじめのぞ」

不思議顔で呆けている紅菜と、機嫌ななめの沙那姫をみて状況をさつすると螢蘭はおかしそうに笑つて、機嫌ななめなお姫様をだきあげる。そして、頬に口づけると紅菜にいつた。

「さつやと準備しろよ」

そういつて沙那姫を抱きあげたままさつていぐ。菜稚琉が沙那姫にあたらしい衣を新調したしたのだ。それをきせるといつて菜稚琉は朝からはりきつていた。

のこされた紅菜は稽古着をきるとそのうえに衣をはおつた。そして、てきとうに腰紐でしばる。溜息は終始である。男装の螢蘭はウキウキしているようにみえた。

（今日はきついな）

昨日とおなじように岩のうえにいる。今日は沙那姫もいて菜稚琉と黒鬼魔王との三人は赤い敷物をひいたうえにすわつている。ふつている雪がかからないようにおおきな傘が一本、羽根をひろげていた。敷物のうえには温かいお茶と団子がおかれていちよつとした雪見会場になつていた。

「まずは池に一刻はいつてもうつ

紅菜は潔く体中の筋をのばして準備を整える。他のものは昨日より時間が短いことにつこし安堵した表情をしているが、甘い。重りをつけて水に浮かぶなどたいしたことではない。まず、といつた螢蘭の言葉は昨日のことなど屁でもないことを物語つてている。ここからがほんとうの地獄のはじまりだ。

「紅菜様、がんばつてくださいね

沙那姫はそういうと手をふつた。あどけない顔をして元気づける沙那姫に紅菜は手をふると気合をいれる。昨日のはほんの手慣らしだ。本番は今日から。

(気合いれないと死ぬ)

紅菜はそうおもつとまた一番に池に飛びこんだ。水にはいつた瞬間、肌を幾本もの針が突き刺さる感覺はすぐに麻痺し、つけたままの重りが手足の枷になる。浮きあがるこつはなるべく体に力をいれないこと。肺に空氣をためることだ。

無駄な力や無駄な動きをするとよけいな体力はつかうし、どんどん体は沈んでいく。ここになるべく体力を温存させなればいけない。次、また次とまだまだ修行はつづくのだ。

なんとか一刻がたち紅菜たちは池からあがつた。螢蘭はそんな紅菜たちにうえをさしていった。

「次はのぼれ」

つまり飛びこむまえの場所にもどれといふことだ。しかし、あがつたばかりのだるい体には崖をのぼるつという氣力はない。しかも、妖力がつかえない。身体能力だけでのぼらなければならぬのだ。それでも、妖かしのほうがすぐれてはいるのだが。

「どうやって?」

ひとりが質問をした。そびえたつ岩はところどころ段になつてゐるわけでもなく、ましてや足や手のかける場所があるとはおもえなかつた。

「ああやつて」

螢蘭はそのこたえにあつさりこたえる。螢蘭が指さしたさきには紅菜と昴摩、鬼柳の姿があつた。のぼりなれている紅菜はぴょん、ぴょん、のぼつていくが、昴摩と鬼柳はぴょん、ぴょん、ぼと、という感じで池にふたたびおちたりしている。

「・・・・・・・・」

三人は信じられない者を見るように三人をみていた。しかし、身分のひくい母親から生まれたふたりには負けられないという意地と

誇りがやるきをおこしやせる。しかも、ただの人間の紅菜がもつ、うえに到着しているのだ。

「よつしゃー」

「ハアツーー」

「やあつ」

それぞれが氣合をいれて飛びたつ。しかし、足がひとつかかる場所もみつからず落ちていく者、なんとか手をかけぶらさがる者。それぞれだが、そんな者たちのよこを螢蘭はふた飛びですぎていく。あつさり頂上についた螢蘭はにやつと意地のわるい顔をするといつこな石を落とした。

「あ、手がすべつた」

ぴゅうぴゅうと音をたてておちている「石はみ」と昴摩の顔面にいくこむ。とつせんだがそのまま落下していく。落下した昴摩にまきこまれてあと二名も落ちた。

「ああ、わりい、わりい。死んだか?」

螢蘭のいつさい悪気も心配もにじませない声がふつてくる。ひといと顔をだした黒鬼魔王の手にはたくさん的小石。悪戯をみつけた子供のような顔で、ひとつ、またひとつ、石をおどしていった。

「わあつ」

「チツ」

それぞれが石をよけておちていく。または粘つてうしろ飛びたつ者もいるが螢蘭のすこしこきおこをつけた石が直撃する。しかも、いわゆかおおきい。

「わつさとのぼらないからだ」

紅菜はとても楽しそうな螢蘭と黒鬼魔王をみてつぶやいた。“ やれ”といわれて時間がかかればそれなりに負担がふえる。つまり、いうことをきかないとそれ以上のことがまつていてるといつわけだ。

紅菜がいやいやでも憂鬱でもなにがなんでもすすんでさつと行動するのはそのためだ。やうじやなかつたら、きがすすまないことを行をやつてたまるか。

「よしよし、さすがわが息子たちだ。みな死なずにもどってきたな」黒鬼魔王は豪快に笑いながらいった。死ななければ、いや、死んでもいいよ、てきないかただつた。ぼろぼろなうえに服は水と外気の冷たさに硬くなっている。先にうえにあがつていた紅菜は熱いお茶と火で服を乾かしていた。

「おい、なに休んでんだ。さつさと立て」

螢蘭は座りこんだり仰向けになつたりしている者たちにいつ。紅菜はもう次の修行場を遠い目をしてみている。紅菜の視線には幾本もの杭がうたれた場所がうつっていた。

「てめえらが、時間かけるから紅菜の修行になんねえじゃねえか」柄のわるい螢蘭の言葉に三人はむつとする。妖力をたかめるための修行なら納得いくが身体機能なんてあげてもなんのためになる。戦いにつかうのは妖力だ。妖力がすべてなのだ。

「紅菜、さつさと次ぎやるぞ」

その言葉に紅菜は溜息をつき、打たれている杭に手をかけて逆さになつた。そのとき、菜稚琉が声をかけた。菜稚琉の言葉に螢蘭は空を見る。

「ご飯の時間ですよ」

「もうそんな時間か」

飯をあたえられるとはおもつていなかつた五人は意外そうな顔をしたが、あからさまに喜びをあらわした。

「はあ、これで休める」

紅菜はそういうてとうぜんのように沙那姫のよこにすわる。その紅菜のよこにまだ動ける鬼柳がよこにすわつた。それぞれときとうにすわると空から食い物がふつてくる。菜稚琉の管狐が肉、魚、根菜に山菜を用意してくれた。きちんと調理されている。

「いただきます」

紅菜は手をあわせてそういうとまづ肉をとる。豪快に手でかぶりついた。その姿に鬼柳もほかの者たちもおどろいた。肉を食べるとはおもつていなかつたし、こんな豪快に食事をするとは想像もつかない。

なかつた。

「紅菜様もこんな食事なさるんですね」

鬼柳の言葉に肉をほおぱりながら紅菜はこたえる。

「ああ、なんでも食わないところから体がもたないからな」

紅菜は昔をおもいながらいった。

（実戦の修行じやないだけまし）

紅菜が幼いころ実戦の修行をつけたときは死ぬかとおもつた。螢蘭の童、菜稚琉の管狐がこの広い森で紅菜をしとめようとうごめいでいるのだ。もちろん、食事も満足にとれず、半年追いかけまわされた。その半年をなんとかのりきつたとおもつと今度は菜稚琉と螢蘭がひかえていたのである。

「紅菜様、お野菜もお米も食べて。お米を食べないと力がでないでしょ」

そういうて沙那姫はおにぎりを紅菜の口にいれる。紅菜はおにぎりをくわえてもぐもぐする。すると今度はお茶をさしだす。沙那姫からお茶をうけとると紅菜はそれを飲みほす。

「ふう、歸匠。食べおえたらあれ？」

紅菜の質問にかんがえるようにいづ。螢蘭はもう食べおえていてお茶をのんでいる。紅菜ははいるだけ食べているという感じで他の者たちがあとを考えているのに紅菜にはまったくその気配がない。

「そうだな。杭のやつ四刻しようかとおもつたが、もう昼だしな。

昼寝かな」

螢蘭の意外な言葉に昴摩がいった。

「昼寝できるんですか」

「ああ、よく動いて、よく食つて、よく眠つて、よく頭動かす。そ

うやつて体はつくつたほうがいいからな」

それをきいた紅菜はたつぱり食いおわつて沙那姫の膝に頭をのせてよこになった。さつさと田をつぶる。沙那姫は紅菜の髪に指を滑らせていった。

「もうお食べにならないの？」

「ああ、寝る」

くすくす笑うと沙那姫は赤子を眠りにつけるようにぽん、ぽん、と寝かしつけるような仕草をする。紅菜がそんな調子では口説くどころではない。肉体的にもつらい状況でとてもきのきく口説き文句ができるとはおもえない。それに、螢蘭、菜稚琉の許可もえなければいけない。黒鬼魔王の息子たちは本来の目的が達成できないままだ。

「そうだ、沙那姫もやるか？暇だらう？」

螢蘭はそういうながら菜稚琉の膝でここになつている。沙那姫はすこし思案する。こうしてみていいだけというのはつまらないものである。今度の杭には菜稚琉だつて手をかす。そうなるとひとりでみていいといけない。

「やううかしら・・・・」

「だめだ。病みあがりだらう」

もう眠つてしまつたとおもつていた紅菜がいつた。沙那姫が参加することをとめる。

「でも、暇ですし、それにもう大丈夫ですよ？」

「だめ。無理できない体だらう」

紅菜は田をあけると強めにいつ。沙那姫はそこまでいわれるとしかたなくあきらめることにした。

このあと一刻ほどみな安らかな眠りについた。結局、この日はこれまでおわりとなつた。おきてきた者たちは体中の軋みに悲鳴をあげた。腕一本動かすだけで涙ができるほど痛い。

梟も鳴かぬ静かな夜。月も星も眠る暗い夜のなか足音がやけにおきくきこえる。カタと音をたててはいつてきた者を沙那姫は静かに見守る。紅菜のよこで寝ている沙那姫は目をつぶつたままその者がよく眠る紅菜をつれさつてしまふのを黙認した。

足音が遠ざかっていく気配に沙那姫はそつと田蓋をあけるといなくなつてしまつた紅菜のぬくもりを探すよつこそつと手をのばす。そこには紅菜のぬくもりがあつた。

「・・・・・」

そのぬくもりに沙那姫はきゅ~つ~つと心が苦しくそして、虚しい気持ちになる。紅菜と自分の関係のようだった。いつも沙那姫は形のない触れる」との叶わない虚像をおつている。

紅菜が自分を大切にしてくれるのはわかつている。でも、それは沙那姫が望むものとは違う。そして、沙那姫はどんなにのぞんでも望むものは手にはいらないことをしつついた。だから、ここから動けない。虚しいとわかつていてもこの場所を手放すこともできないのだ。

「情けない・・・・・」

そつと自分につぶやけば泣きたくなつた。しかし、泣くのはしゃくで我慢する。だつてここで泣いてしまえばなんだが負けたようなきがする。

自分の腕のなかで無防備に眠る姿に昴摩は言葉にできない不安を感じる。紅菜の眠る姿に腕からつたわるぬくもりにこんなに不安になつたのははじめてだつた。

「紅菜、おきる」

無機質な声が紅菜をおこそうとしている。夜も深いこの時刻。紅菜は深い眠りのなかにいるのだ。機嫌のわるそうな声をもらし、それでも田蓋をあけようとしたしなかつた。耳をふさぎたいのか衣をつかんで顔をうづめる。

「おきる」

やうじつて紅菜と衣をひきはがした。すると紅菜は不機嫌な表情で田をさます。

「?・?・?・昴摩?」

部屋で寝ていたはずなのにいまは林のなかにいる。しかも、となりで寝ていた沙那姫ではなく田のまえにいるのは昴摩だった。紅菜は状況がわからないまま額をおさえて田をさます。田蓋をあければ外気の冷たさに頭が覚えてくる。完全に田がさめるまで時間がかからなかつた。

「こんな夜になんのようだ?」

紅菜は昂摩からはなれきちんとひとりでたつといった。明日も朝からはやいのだ。やつをとすませて布団のなかにもどりたい。

「約束したよな」

昂摩がなにをいつているのかわからなかつたが、すぐにおもいだす。疫病のもとを期限までにみつけられたら褒美をやると約束した。そして、約束どおり昂摩は呪のかかつた陶器をもつて帰ってきたのだ。

「ああ、褒美のことか? 明日きいてやる」

やうじつてもどりうとする紅菜の腕をつかみ、逃げないようにおいつめる。紅菜はと惑つた。ダンと手をついて自分をとじこめる昂摩は別人のようだつた。なにか憑いているのかとおもつたが大丈夫なことに困惑する。

(どうしたんだ?)

「約束だ」

困惑しながら紅菜はそれでも顔にはださない。背中には硬質な木の感触。逃げないようにたちあだかる昂摩からとても逃げられそうになかつた。

「なにが欲しいんだ?」

紅菜はいつた。こんな自分をせめるよつた顔をしてなにを望んでいるのかわからなかつた。昂摩はつらやうに田をほそめるといつ。

「そつちじやない・・・」

その言葉にさすがに紅菜はおどろいた表情をみせる。なにをいつているのだともおもつ。あれは昂摩以上の相手ができたら有効な約束だつ。

自分のそばにいることを螢蘭や菜稚琉にも認められている癖にこれ以上なにを望むんだと不思議におもつ。沙那姫がふたりに認められているのと昂摩がふたりに認められているのとでは意味がまったく違つ。

沙那姫はこのさき紅菜にとつてとても大切なものを体にとつこん

でいる。それは沙那姫の体に負担をかけていた。そして、沙那姫はそのことを承知のうえで自分の体を保管場所として提供した。だからこそ菜稚琉も螢蘭も沙那姫を妻として迎えることを承知したのだ。無条件でそばにいることを許されている昴摩とは違う。

「オレが沙那姫よりも誰よりも特別だと紅菜のなかで一番だとわからせてくれ、約束だ」

紅菜はしらない。昴摩が紅菜の制御しきれなくなつた魂の一部をあずかつていてることを。そして、昴摩はしらなかつた。沙那姫もまた自分とおなじ紅菜から大切なものをあずかつていることを。おなじように命をかけて守つていてることを。

昴摩の田には沙那姫が無条件でふたりに認められ受け入れられているように見える。しかも、紅菜の昔の伴侶でいまも特別な存在なのだとおもつている。

「馬鹿らしい。もついいだらう」

紅菜はそういうて昴摩をおしかえすとおもつとする。しかし、昴摩は納得いかない。紅菜をおさえてむと顔をちかづけていう。すこし、自傷気味ないいかただつた。

「馬鹿らしいか・・・・」

唇がふれあいそうなほどちかか。紅菜はそれでも顔をうつさげるようなこともなくまつすぐに昴摩をみつめる。責めるような昴摩に紅菜は挑戦的な顔になる。責められることなどなにもない。

「口づけるのか？好きにすればいい」

何でもないことのよつにいわれて昴摩は傷つぐ。力なく腕をさけると紅菜にいふ。

「もどれよ」

紅菜はなにもいわずに昴摩のもとをさる。そして、沙那姫のいる寝床へともどつていつた。さつていく紅菜の姿をながら昴摩は切なさと情けなさでその場にすわりこんだ。

（女々しい）

頭をかかえながらそつおもつた。あんなことをしてまで、なんで

もいい確立したものがほしかった。紅菜にとって自分は特別なものだと嘘でもいいから安心したかった。それが刹那的なものでもいい。

嘘でも紅菜が自分のことを特別なのだと、沙那姫よりもだれよりも昴摩が一番だといつてくれればよかつた。それだけで、不安も虚しさも焦りもなにもかも吹き飛んで自惚れることができる。それすらあたえてくれない紅菜に恨めしい気持ちと強制的に優位にたとうとした自分への嫌悪感を感じていた。

結局このあと紅菜は寝つくことができず、あんなことをした昴摩にたいして怒りがあふれ悶々としていた。あつという間に田は昇りはじめ苛々、悶々とした気持ちはおさまらなかつた。

「はッ」

紅菜はすきのできた相手の横腹に蹴りをいれる。相手は杭のうえから落ち地面に叩きつけられる。杭のうえからおちれば負けだ。

紅菜と昴摩のようすがおかしいことはひとめでわかつた。ここ最近ずっと昴摩はおかしかつたが紅菜はふつうだつた。あれでいる紅菜は容赦なく相手を叩きのめしている。

「はい、そこまで」

菜稚琉の声が試合の終了をつげる。紅菜は杭のうえにたつたまま相手をみおろしていた。そして杭のうえからおりる。紅菜といれかわるように戻柳がそこにたつた。そして、対戦相手に言葉をかける。

「お兄さん、わるいですが負けてもらいますよ」

「ふん、おまえになにができる」

口だけは減らない兄に戻柳は余裕の笑みをうかべた。負ければ地獄だ。地獄からまぬがれる者はただ一人。負けた者は灼熱の地獄の罰がまつていてる。

杭のうえで逆立ちになり螢蘭や菜稚琉、黒鬼魔王の攻撃をよけるという修行をしていったのだが、紅菜が試合をしたいといいだした。がんらい紅菜に甘い者たちはあつさりその要求をうけいれると簡単な試合をすることになつたのだ。相手を杭のうえからおとすという

単純な試合。しかし、菜稚琉のひとことで命がけの試合になつた。

「ただやるだけではつまらないから罰をつけましょう」

そういうて菜稚琉がもつてきたのは火打ち。その火打ちを力チ、

力チとあわせて火をおこすとこり笑つていつた。

「負けた人は苗ぶらりんになつて腹筋、背筋でいいかしら？」

どんな酷い罰をうけるとおもつていて五人はそのなんでもない火をほつとした気持ちでみて微笑んだ。これなら、負けてもたいしたことはない。すこし火傷するぐらいだ。

しかし、世の中そんなに甘くはないのが世の常々である。

「それ黒縄くろじょうだろう？ 無間むげんにしようぜ」

そういうて螢蘭は違う火打ちをだすと火をおこす。いい感じに燃えた火に満足そうにいつている。

「おお、やつぱこつちのほうがいいよな。罰にはもつてこいて感じだな」

五人はもしかしてとおもいながら火をみていた。そして、意をけつして鬼柳がきいてみる。

「あの、もしかしてそれは……」

「ああ、地獄の火だ」

鬼柳がいいおわらぬうちにあつさりと螢蘭はいう。五人は顔を真つ青にした。そんな五人に論点のずれたことを菜稚琉はいつた。

「大丈夫ですよ。力はもどしてあげますからね」

いやたとえ妖力がもどつてもただではすまない。しかも、ハ大地獄のうちでもつとも重い罪がある者が炙られる無間の炎にかわつたのだ。命にかかる。

声にならない悲鳴をあげ、そして今にいたる。

「もうつた」

鬼柳のすきをついたとおもいきおいよく殴りたおそうとしたとき、一枚うわての鬼柳が仕掛ける。そして、罠にかかった獲物は杭のうえからおちて負けが決定した。

「よし、そこまで……今まで昂摩と鬼柳だな。勝つたほうが決

勝だからな」

螢蘭の言葉に昴摩が杭にのる。いま現在のこつてているのは紅菜、昴摩、そして、いま勝つたばかりの鬼柳だ。戦闘体勢にはいつたがどこか上の空だった。

（いくらんでも・・・）

鬼柳はそんな昴摩のようすをうけいれられないおもいでみている。冷静で冷酷。人をよせつけなかつた昴摩が紅菜にたいしてあんなに表情豊かになつたり必死になつたりする姿にやつと慣れてきたところだ。

しかし、いまの昴摩は戦闘になつても心ここにあらず、という感じだつた。ものすごい違和感を覚える。どんな状況でもどんな精神状態でもひとたび戦闘になればすううと戦いにはいつていく。精密といえるほどの寸分のくるいもない構えに計算しつくされたような戦術と動きをみせた。

（集中しないと）

「負けますよ」「つ」

鬼柳はそういうて昴摩の懐へとびこむ。簡単にはいれたことにおどろきながら顎に拳をいれた。普段ならあつたりと切り替えされてしまうだろう単純な攻撃だつた。

「え？」

拳が顎にはいつたこともそうだが、あつけなく昴摩の体が地面についたことにも驚きをかくせなかつた。座りこんでうつむいている昴摩に驚く。鬼柳の頭のなかにはこの拳はよけられる予定だつた。

「次は私だな」

そういうてあがつてきたのは紅菜だつた。螢蘭のにや、にや、した笑いがやるまえから鬼柳の負けを誇示している。あの人は害虫が嫌いだから負けた者たちをいたぶるのを楽しみにしているのだろう。実際、螢蘭は鬼柳が負けて害虫五人が火炙りになる姿を想像するだけでもわくわくした。

「まあ」

「え？」

「嘘だろ？・・・・」

鬼柳自身、信じられない。紅菜が尻をついて地面にすわっている。つまり、鬼柳が勝つたのだ。だれもが紅菜の勝利を信じていただけに驚きを隠せない。しかし、紅菜は冷静にいった。

「私の負けだな」

そして、螢蘭にいう。「この罰は紅菜が逃亡するとよくやられている罰則だつた。だからどういう風になるのかよくわかっている。

「師匠、何時間たえればいい？」

「あ、ああ。そうだな。一刻半でどうだ？」

「わかりました」

戸惑いと驚きを隠せず螢蘭はこたえる。そんな螢蘭を無視して紅菜は自分の足に紐を結ぶといった。ほかの者もおなじように自分の足を結ぶ。

「できました」

「それではやりましょうか？」

菜稚琉はそういうとぱち、と音をならし管狐をよぶ。管狐たちはそれぞれ紐をつかみ空へとあげると火のうえにつりさげた。火は小さくてぱちぱちと音をたてているが炭火とかわらない。

「どうすんだ？」

黒鬼魔王はそのちいさな火で炙られてもなにが罰なのかわからな。たしかに熱いだろうが、力をもどさなければならないほどではない。おおきな扇をもつた菜稚琉と沙那姫は左右にたち扇をあおぎはじめた。すると、種火のような火が。

「わあっ」

「ちよっ」

ひとふりでぶわっと炎がたち、ひたふりで炎がわれる。

「風にあわせて動かないと燃えるぞ」

螢蘭はそういうて五人に声をかける。五人はいわれるまでに腹筋をくしして体を谷折にする。そして、上体をおりまげたまま手で足

首をつかむ。

紅菜は炎がもりかえすまでに背をしならせ縄をむかへてはいる管狐までしならせると燃えさかる炎のなかにしつこむ。体が炎にやかれるまえに炎がわると腹筋で最大限にふりあげる。昴摩もおなじようにして炎と風のこりあいをあわせる。

「ああ、いかんな。ずるはよくないな」

螢蘭はそういう呪をおたえてはいる者にいった。そして、わるそうな笑みをうかべるどばち、と指をならす。ずるをしてはいる者たちの管狐がかくんとさがつて炎に顔をつつこんだ。管狐は焼き死ぬまえに縄をあげる。

「さやあああ

悲鳴をあげてはいる兄をみて昴摩は冷静に自分のかんがえがただしがつたことを痛感する。

（こりときかないとああいう田にあつのか）

炎と体の酷使で意識が朦朧としあじめたころ。

「さやああああ

とつせん悲鳴をあげた。他の者たちはハッとして田線をおくる。そこには炎に顔をやかれてはいる一番つえの兄の姿があつた。つえをみると管狐が居眠りをしてはいる。

「おこ、おきる」

螢蘭は管狐をおこすと管狐はあわてて縄をもちあげた。あがつてきた兄は髪ももえて坊主になつていてしかも、真つ黒だ。なんとかひぐひぐ動いてはいるがもうつづけるのは無理だらう。

「ああ、もう無理だな」

黒鬼魔王はいつた。管狐は地面におろすとすまなそに頭をかく。菜稚琉はそんな犠牲者をみておつとつこり。こまあおいではいるのは黒鬼魔王と螢蘭だ。

「さえてはいるだけだから眠たくなるのね」

その言葉につつさげられていはいる者の田つきがかわる。必死に自分の管狐によびかけた。

「おい、眠るなよ」

「今日はいい天気だな」

「返事をしりつ」

いつきに活氣ついたよつすにおもしおうに蠶蘭と黒鬼魔王は笑うと扇にいきおいをつける。炎がおおきくなつた。ぎょっとするとさらにいきおいをましていく。

「はははは、どんどんゆくぞ」

黒鬼魔王はおかしそうにわらうとさらにあおぐ速度をあげる。蠶蘭もわるのりをしてどんどんと速度をあげていく。悪魔がふたりいた。そんな光景を鬼柳は地獄絵図を見るような気分でみていた。

日が暮れて菜稚疏が修行のおわりをつげると紅菜たちはやつと安全な地上におろされる。つるされるまえとはまつたくの別人になつたようなかんじだつた。

髪がやけおち肌が露出している者。髪はなんとかのこつているがちりちりになり毬のよくなつてている者。服がやけてほとんどなにも身につけていない者。とうぜんのよつに皆火傷をおついて赤くはれて水がたまつていたり皮膚がただれていたりする。

紅菜の黒々とした美しい髪もやけて短くまばらになつてしまつている。肌も赤くなりひりひりと火傷の症状をつたえている。全身が火傷の状態で紅菜は無理やり体をうごかす。そのたびになんともいえない痛みがひろがつた。

「つうつ」

無理やり動いているせいでやけた皮膚がこすれ血がにじんでいる。それでもかまうことなく紅菜はどこかへいこうとした。そんな紅菜をきづかうように黒鬼魔王は言葉をかける。

「無理するな。体を冷やしたほうがいい」

しかし、紅菜は草むらのなかへと消えていく。他の者たちは池につかつて体を冷やしていた。

「そんなところで水につかつても皮膚がただれるだけよ。紅菜様といつしょに温泉につかつてきなさい」

沙那姫は四人にいう。それをきいた者は温泉なんてとんでもないという感じに首をふつた。しかし、菜稚琉は管狐を操ると四人を池からだし紅菜のもとへとはじぶ。

「こまま明日の稽古はできないでしょう」

ほかほかと湯気のあがる温泉のまえでおろされる。五人しかはいれないよう簡素な温泉には看板がわきにたつている。そこには『効能：万能』と太く逞しい字で怪しげにかかっている。水色は乳白色でそこはみえない。

紅菜をみると温泉に足をつけているところだった。苦痛に一瞬表情をゆがめる。そのようすに四人は冷や汗をながした。しかし、次の瞬間。紅菜の表情がゆるやかなものにかわる。

「・・・・・？」

温泉は深いのだろうか。紅菜は全身温泉につけると沈んだままあがつてこない。そして、しばらくたつたあとザバッと水しぶきをあげて温泉からでてきた。赤くはれ血をにじませていた肌はもちろん、みじかく無残な姿になっていた黒髪もすべてもとにもどっている。

「こ温泉」

昴摩は手をのばした。お湯にふれた瞬間はたしかに酷い激痛をうんだが、それも一瞬。刹那的なものであつといつ間にやけていた皮膚はなおつた。火で炙られるまえよりきれいになつたかもしれない。

「・・・・はいれ。体を治さないと明日つらいぞ」

戸惑いと驚き両方の表情をうかべている四人に紅菜はいった。治癒のちからがあるこの温泉はありとあらゆる傷をなおす。紅菜はこれまで稽古や修行でおつた傷はかならずここで治してきた。捻挫、打撲、吐血に内臓損傷。骨折、脱臼、火傷、そのほかにも多々怪我をしている。

「・・・・・」

昴摩はためらつてている兄たちをのこし湯に体をしずめた。刹那的な激痛にたえると嘘のように体が楽になる。悲鳴をあげていた筋肉までもとにもどつている。ほかの者たちもためらいながら昴摩に

ならうと湯につかつた。

その日の夜。昴摩、鬼柳、紅菜以外の者たちは屋敷から姿をけしかった。次の日におきてみれば跡形もなくなくなつていたのだ。そんな息子たちに黒鬼魔王の感想は。

「あいつら格下げだな」

これで夜叉をめぐる紅菜争奪戦の勝負は昴摩と鬼柳の一騎打ちとなつた。もちろん、紅菜に認めてもらつのはとうぜんのことだが、それ以上に螢蘭、菜稚琉に認められないといけない。黒鬼魔王のかんがえでは螢蘭より菜稚琉のほうが手強いだろうとふんでいる。（はたしてそんな日はくるのか）

黒鬼魔王はそんなことをかんがえながら修行にはげむ三人をみた。額に汗をうかべ、逆立ちのまま腕立てをしている三人は一糸乱れぬはやさで体を上下させていた。そんな三人の後ろにひかえているのは鞭をもつた螢蘭とのん気にお茶を楽しむ艶やかな女性ふたり。

「」数日、紅菜はむしゃくしゃと自分でも説明できない気持ちにとつつかれている。それを外にだすのはいやで必死につぶさとじこめていた。だがそれでも、不意に茶碗をなげたり癪癪をおこして叫びたくなつたりするときがあつた。

いままでになかった感情にふりまわされていつにいつにあちつかない。今日も眠れず夜の森をさ迷うように歩いた。

紅菜はたちどまつた。ぴくぴく、と鼻をうごかしあたりの匂いをかぐ。鼻腔をくすぐつたのは甘い酒の匂い。

いい酒というものは匂いからしてちがつものである。芳しくも甘く上品な匂いがあたりを侵食していく感覚とともに体の神経もその香りに支配されていった。

自他ともにみとめる酒好きな紅菜はふらふらとその香りが強まるほつへと歩みをすすめていく。そして、たどりついたのは小さな泉だつた。

「これは・・・」

紅菜は泉のふちにすわると手をのばした。水にふれる。ただの水ではない感触と甘い香りに誘われてぬれた手をなめる。

螢蘭と菜稚琉、黒鬼魔王は魚を干したものをつまみに酒をのんだ。じつはあのあと以来とても仲良くなつてこいつして夜酒をのみながら雑談をかわしている。

黒鬼魔王と螢蘭は似たもの同士だからなのか以外にもきがあうようであれやこれやと一人でつるんではどこかへいつたりなにかを計画したりしている。今回の修行も螢蘭と黒鬼魔王が仕組んだものである。

はじめから紅菜が菜稚琉の条件をかかさず毎日できるなんておもつていらない。菜稚琉も螢蘭も紅菜に修行をさせ、きちんと一から体をつくりなおさせたかったのである。その理由はのちのち述べるとして、黒鬼魔王にも思惑があつた。

黒鬼魔王の思惑はもちろん紅菜を嫁にもらいたいといふこともあつたが、今回の本命はそれではない。夜叉候補として有力とされた者たちのふりおとしが大本命だつた。結果、黒鬼魔王のねらいどおりのこつたのは母親の身分のひくい昴摩と鬼柳だ。

母親の身分のことでは納得しない者たちは多々いる。それでも、昴摩は有無をいわせぬ実力があつたことでその者たちの口を封じてきた。しかし、鬼柳はちがう。たしかに昴摩の次に実力があつたがその差はあまりにもおおきい。

もし、昴摩が王にならなかつた場合。黒鬼魔王は自分のあとを鬼柳にとかんがえている。しかしそれではまわりが納得しない。納得させるには二とおりの方法がある。

ひとつは鬼柳が昴摩をこえること。これがいちばんいい方法だがみこみはない。なぜなら昴摩は歴代の王のなかでもつとも強いからである。しかも、紅菜の妖気までとりこんでいる昴摩にたいして鬼柳が勝てるみこみはまったくといっていいほどなかつた。

ふたつめは鬼柳がほかの候補者よりも優秀であることをわからせる

ことだ。今回の修行にたえきればそれは自然と証明されることになる。実際、母親の身分の高い3人の候補者はその過酷さに根をあげて逃げ帰つてしまつてしている。

「しかし、ふたりが恋敵になるとはおもつてなかつたよ。昴摩も鬼柳もそういう性質た質ではないからな」

黒鬼魔王はおかしそうにいつた。鬼柳が足しげく紅菜に会いにいつているのをしつてこる。昴摩のほうはまあいつまでもない。

「あつたりまあだらう。相手を誰だとおもつてんだ、紅菜だぜ」

螢蘭はそうかえすと娘を自慢する父のようによつた。菜稚琉はそんな螢蘭のからつぼになつた杯にしゃくをする。

「しかし、妻がいるとは想像もつかなかつた。あの子は竜女だらう? それなら、うちに嫁にもらつても問題ないな」

「あほか。嫁をもらうのと嫁にやるとではおおきく違うんだよ」
螢蘭はあきれた顔でいう。そんな螢蘭に菜稚琉がいつた。もちろん、菜稚琉も嫁にだすきはない。しかし、婿をもらつならはなしはべつだ。螢蘭はおいといて、菜稚琉は昴摩をきにいつている。

「では、婿にもらえるなら認めるんですか?」

「・・・・・婿。ああ、いいぜ。覚悟があるならこくらでももらつてやる」

指をボキボキ鳴らしながら凶悪な顔で螢蘭はいつ。つまり直訳するど“いびりたおしてやるから覚悟しろよ”とこつことだらう。

「婿養子か、かんがえてなかつたな。よし、このせこ婚姻をむすべるなら問題ない」

黒鬼魔王は息子が螢蘭に虐められるとわかつていつて膝をたたいてわらつた。上機嫌だ。どうせ昴摩が家にかえつてくるとはおもつていない黒鬼魔王は婿養子でもなんでもよかつた。

そりや、欲をいえば紅菜に嫁にきてほしいがよけいな欲をだしてろくなことにならなのは目にみえている。鬼柳が婿にいき、昴摩があとを継ぐという形がもつともいいだらうがそうはいかないことも黒鬼魔王はさつしてこる。そんなことしょせん都合のいい夢物語

だ。

（まあ、どっちでもお父様と呼んでもらえるのにはかわりないしな）
そう納得すると酒にくちづける。紅菜に親しみをこめてお父様と
呼ばれるのが密かな黒鬼魔王の今後の楽しみだつたりする。

（うん）。

空気を震わせながら大音が響いた。地面までもかすかにゆれる。

「なんだつ」

三人はなにじとだとおもい外にでる。黒鬼魔王と螢蘭は瞬時に屋根にとびのると音の発信地をさがす。しかし、それはさがすまでもなかつた。白っぽい煙が渦を巻きながら空へと舞いあがつていた。

「あれはなんだ？」

黒鬼魔王はそろいそろい田をこらす。下には騒ぎをもぎつけて昂摩や鬼柳、沙那姫もそとでてきている。螢蘭は紅菜の姿がみあたらないことを沙那姫にきいた。

「沙那姫、紅菜はどうした？」

「紅菜様は外に、最近ねむれないようで」

紅菜は沙那姫をおこさないようでていてつもりだが沙那姫はすべてしつてている。それをきいた螢蘭はなんだか胸騒ぎをおぼえて煙をあげている場所へとむかつた。

「私もつ」

駆けだした螢蘭をおい菜稚琉はいつた。菜稚琉もなにか感じるものがあるのだろう。とてもいやな厄介な予感がする。その声にふりむくと皆きていた。

（大所帯だな）

螢蘭はそうおもつたが現場についてみてそれも吹っ飛んだ。甘い匂いと酒の臭気が強くつよくたちこめている。

「こんなところに泉をつくつたんですか？」

菜稚琉の言葉に螢蘭は覚えがない。たしかに増設は趣味のようなものだがこんなものつくつた覚えがない。

「いやあ・・・・

泉のなかにはおおきな鰐のよつた耳にたぶんとしたまるまるとした腹をしていて鮫のよつたひげと口をしている物の怪がいた。みじかい足と魚の尾びれもある。

「あいつですわ」

沙那姫は酒の泉の原因をつきとめると指さした。たしかにその物の怪が泉をつくつていていた。酒にはそいつの妖気が混じつていてそれがまたなんともいえない味になつていてるのだが。紅菜は完全に酔つていて。しかも安全な段階をすぎて興奮状態でけらけらたのしそうにわらつていて。そのまわりには百鬼夜行でもあつたのかとおもつくらいのおびただしい物の怪の数。

「助けないと」

いつさいなにもしらない鬼柳が飛び出していいじつとしたが、その腕を昴摩があさえるといつた。麗しい兄弟愛。

「馬鹿つ、下手に手をだすな。被害がひろがる」
ではないようである。

「菜稚琉、おまえ離れとけ。あの物の怪はたのんだぞ」
下戸の菜稚琉にさがつていてるようないい螢蘭はあとの者たちにいつた。しかし、こちらももう手遅れで酔つていて。顔を赤らめとろんとした目で菜稚琉はにっこり不吉な笑みをうかべた。

「大丈夫、まかせてください」

そういうて袖から筒状の笛をとりだす。そして、口をつけた。螢蘭の表情がみるみる青ざめていつた。これから怒る惨劇を容易に想像できたからだ。

「あつ、い、やめつ」

ピー、とたかだかに音がなつた。しばしの沈黙のあと筒に眠つているはずの管狐が大集合する。田のすわつていてる菜稚琉が腰に手をあて拳を天にかかげると管狐たちに命じる。

「紅菜をたすけるわよ。おー」

螢蘭と沙那姫は一目散に安全な場所へとにげる。しかし、まにあ

わなかつた。管狐たちの猛攻にあつたのだ。もちろん、黒鬼魔王も昴摩も鬼柳もおなじである。

「なつ」

「ぎやあつ」

「わあ」

「いてててて」

「ぎやあああ」

とうぜんのように一同大混乱。酒で酔つてゐるおかげで管狐の操作が充分にいきどぢいていない。つまり簡単にいうと暴走しているのだ。

「私がいきます」

そういうて泉のなかにはいると沙那姫はその鯰のような顔をした物の怪をつかまえようとしたが、すんなりにげられてしまつ。そして、酒の球体にどじこめられてしまった。さいわい童女である沙那姫は水のなかででも呼吸には困らない。

「こんなもの」

のめばすこしでもでられるかなとおもいながら沙那姫はのんでもたが球体がせばまるだけでいつこじでられそつもなかつた。外の騒ぎも遮断されていてあまりよくきこえない。

それをみていた紅菜がなにをかんがえたのか「私もやる~」といつて物の怪をあやつる。そして、ふたりは意味もなくけらけら笑つていた。しかし、もともと酒の強くない菜稚琉はすぐに糸がきれたようにはたんとたおれる。

「お姉さま~、どうしたの?」

菜稚琉はくづくづと幸せそうな顔をしてちかくにいた管狐を一匹だいて寝てゐる。白い管狐は菜稚琉の頭をかかえながら主の眠りをまもつてゐるようだ。くづくづした黒い目が菜稚琉の姿をつづじてゐる。

「あいててててえ、紅菜もとにもどせつ」

螢蘭は物の怪に髪をひっぱられながら菜稚琉をおこなうとしている。

る紅菜をとめにはいる。やつと葉稚琉が眠つて管狐たちが眠りについたのだ。あとは紅菜さえおとなしくさせれば。

「昂摩、後ろにまわつておさえつけろ。」

昂摩は頭にかじりついている物の怪をひきはがすことをおきらめるといわれたとおり紅菜の腕のあいだに手をいれておさえつけた。黒鬼魔王と鬼柳は充満している物の怪たちをしまつしていく。しかし、次から次へとでてくるはでとてもかたづかない。

「紅菜もういい。こいつらもとにもどせ」

紅菜は手足をばたつかせて抵抗するので腕をしめると昂摩は必死な形相でいつた。よくわからん蜥蜴じかけのような物の怪が足にかみついている。首には胴のながい蛇のような物の怪がまきついて頭からのみこもうとしている。

紅菜はとりおもえている昂摩の顔をふりむきながらジーとみるとむづづとした顔になるとつーん、とした言葉でいつた。

「昂摩はいや。変態だからきらいなの」

紅菜の言葉に昂摩はうろたえる。それをみていた黒鬼魔王や鬼柳、もちろん忘れてはいけない螢蘭はふたりに注目する。そんな雰囲気もおかまいなしに紅菜はつづけていつた。

「むりやりスケベなことするの〜、だから、昂摩はきらいなの。はなしてつ、はなしてよッ」

動搖しながらもせつかくつかまえた紅菜をはなしてはいけないと手をゆるめない。

「あれはつその、そういう意味じゃなッ」

昂摩は弁解をするようにいつた。螢蘭の耳にはみぐるしご言い訳にしかきこえない。

「むりやりは犯罪ですよね」

「男としてよぬうがないのはなあ」

「オレはつ」

黒鬼魔王と鬼柳は軽蔑の視線をなげかけていつた。なんとか反論しようとしたが言葉がない。そんななか、髪をひっぱっていた物

の怪をでこびんで粉々にふきとばすと螢蘭は青白い能面のよつな顔に笑みをたたえながら紅菜を昴摩から奪うところ。

「どんなことされたのかな？」

「ほり・・・・・」

紅菜は螢蘭にぎゅううと抱きつくりとふるふると首をふりていった。

「・・・・・いえない」

とてつもない誤解をうんだことはこつまでもない。無表情の怒りをうかべた能面顔の螢蘭に直視されて昴摩はそれ以上なにもいえなかつた。ただ感じることのできるひとと殺されるとこことだけ。

4・清適

深くつもつた雪のあいだから萌黄色の花茎をのぞかせている蕗の薹^とが紅菜の目覚めをまつてゐる。昨夜さんざん暴れまくつた紅菜はいまは深くやすらかな眠りに身をおとしていた。

昴摩の不貞行為をしつた螢蘭はわれを忘れて昴摩を慘殺しようした。それをみて黒鬼魔王は螢蘭の邪魔をさりげなくしたがあまり効果はなかつたり、鬼柳があれやこれやと試行錯誤をくりかえし、元凶の物の怪をなんとか自分の使い魔として使役したりと大変だつた。いつもなら收拾役の菜稚琉は酔いつぶれてすやすやと眠るばかり。けつきてその場をおさめたのは紅菜の妻である沙那姫だつた。沙那姫は鬼柳のはたらきで酒から解放されるとまつさきに螢蘭をとめにはいった。螢蘭がおさまたことをみるとすぐにきりかえし今度は紅菜をとりおさえにいく。

そしていま。紅菜が眠りづけていることを確認すると沙那姫は口元だけで微笑む。髪を一束手にとるとそつと口づけた。その口づけは甘くせつない恋風がわが身をおいてすぐによつて。そのままその場をはなれるとあるところにむかつた。

冬の冷氣をさえぎるようにたらされた御簾をあげると几帳でかこまれた小部屋^{にかいすし}と火桶と二階厨子^{にかいだな}がめにはいった。ほかにも二階棚^{にかいだな}、燈^{とう}台、手燭などもあり必要な調度品はすべてどどこおりなくそろつている。

あたりまえだ。ここは紅菜のための部屋なのだから。いつの時代も紅菜はここで学び、ここで眠つてゐるのだ。

そのどれもがきらびやかなものではなくあつさりとしたものばかりだつた。しかし、紅菜がつかつていたのだろう。その気配がどちらもかんじられた。沙那姫もしらないあたらしい傷のついた家具は紅菜が長年つかつていたものだつた。

さすがに畠みはいれかえてあるが調度品のほとんどがあのころのま
まだつた。意外と紅菜は物持ちがいいのである。つかうほどしつく
りしてくるからはなせなくなる、といつていたのをおもいだす。
紅菜のための部屋。ここで彼は学問にあけくれたり稽古でつかれた
体をやすめたりしていた。そして、紅菜が死についた場所もここだ
った。

四十たらずのみじかい生をおえる紅菜を泣きながらみおくつた。“
忘れないで、かならずおもいだして”と約束しながら死につく紅菜
の手をにぎりしめていた。紅菜の妻としてすこしたのはほんの一〇
年。瞬きよりもみじかい時間だったが、沙那姫には永遠にもおもえ
るほど満たされた時だった。

妖かしからすればそれはあまりにもみじかすぎる時のなか。刹那的
に散る花の美しさのようにきれいで儂くあわいときだつた。たとえ
それが一方的な恋であつたとしても沙那姫には花がちるよりもうつ
くしく、空がながれるよりも穏やかだつたのだ。

感慨にひたつっていた沙那姫はおもむろに几帳でできた小部屋に足を
ふみいれる。そこにゆいといつこの場所で眠ることを許された者。燃
えるような緋色の髪がちらばつているその場所。

いつみてもなんどみても紅菜とはつりあつていい、と沙那姫はお
もう。

「おきなさい」

沙那姫はそういうて憎らしい顔を踏む。ぐにゅつと体重もかけた
のであつさりと昴摩はおきた。

「ぶつは、なんだつ

沙那姫は腕をくんだまま昴摩をみおろす。この程度の者がそばに
いることを菜稚琉や螢蘭がゆるしていることが信じられなかつた。
(いぐら私といつしょだからつて・・・・)

そこまでおもつて沙那姫は決定的なちがいをおもいうかべた。そ
のちがいが目のまえの坊やと自分の差なのだと。そして、その差は
とても大切なものの。

「え、なんで？」

沙那姫をみて戸惑いをかくさないまま昴摩はつぶやく。沙那姫はみればみるほどとも紅菜とつりあつてはるとはおもえない。

「顔かしなさい」

そういうて沙那姫は陽ののぼる雪のなかに昴摩をさそつた。けつしてこいつのためではなく愛している人のため。情けないこの坊やに教育的指導をいれるのだ。

（・・・きまずい）

昴摩は外気のはりつめたつめたれとおなじような空気を感じていた。昨日の紅菜の発言もあり昴摩はあんまり紅菜の味方とは顔をあわせたくなかつた。せめて自分の気持ちにけりがつくまではそつとしておいてほしい。沙那姫の背をみながらどうしていいのかわからぬ。とりあえず遠慮がちに声をかけてみる。このまま放置はつらい。

「あの・・・」

すると昴摩がいいおわるまでに沙那姫はふりかえると両手にのっている紅く光る宝玉をみせてといかけた。

「さて、これはなんでしょう？」

昴摩はまじまじとそれをみつめる。たしかに不思議な力を感じるが、なんのためのもののかわからない。ただの宝石ではないことはたしかだつた。でも、なんだか惹かれる。さわってみたいがなんだかとても大切そうなのでいちおう断りをいれてみる。

「あの、さわつてもいいか？」

「だめよ。あんたの汚い手垢がつくじゃない」

沙那姫はあつさり却下。そして、大事な宝物をしまうように自分の体へととりこんでしまつた。紅菜がきづかうように手をあてていた場所。

それをみて昴摩はなんだか紅い宝玉の正体がわかつたようなきがした。

「まさか、それって」

昴摩のつぶやきに沙那姫は自分の腹部をさすりながらいった。そのしぐさは胎児を宿した母親のようにみえた。しぐさだけじゃない。あまりにも幸せそうに穏やかな目をするから。

「私もかわらないのよ。だつて、私は紅菜様の体の一部をあずかつているだけだもの」

（やつぱり）

昴摩は沙那姫の言葉にそうおもひ。自分とおなじように危険をおかしてまで紅菜の大切なものをあずかったのだ。でも、紅菜の態度がきになつた。大切に慈しむように手をさしのべる姿をみるたび沙那姫と自分の決定的なちがいをみているような気持ちになる。

「でも、オレは・・・・」

昴摩は傷ついた瞳をふせていった。紅菜が大切にしている相手に自分のそんな姿をしられたくない。

沙菜姫はそんな勘違いやろうにあきれた。こいつがよけいな勘違いをするから紅菜に元気がでなかつたりきがそれたりするのだ。

（まったく、紅菜様がどうしてこんなのをえらんだのか理解できないわ）

「あの宝玉は火をつかさどつてているのよ」

「ついえ、どうじうことかわかるだらうとおもつて沙那姫はいつ。水の眷属の竜女が反発する火を体におさめることがなにをさすか。ばかでもわかるだらう。水は火を消すことができる。しかし、反対に火によつてけされることもあるのだ。

昴摩は予想どおりおどりこいたようなまぬけな顔をしてこる。そのままぬけ顔にめんじてちよつとした秘密をおしえしてあげることにした。

「紅菜様はね。私にこれがあるから妻として大切にしてくれるのよ」昴摩は沙那姫の言葉に驚きと同情の色をのぞかせた。いや、驚きと同調の色をうかべたのだ。沙那姫はその瞳にすこしむつとする。だつて、昴摩は。

「それつて・・・・」

（おしあけ女房？）

昴摩の言葉のつづきをいやでもやつした沙那姫は余裕の笑みでほほ笑む。たしかに紅菜に愛されて望まれて妻になつたわけではないが、それを悲しいと虚しいことだとおもつたことはないし、可哀想だとかそういう同情の目でみられるのもいやだ。ましてやこいつに自分とおなじなかという風にみられるのは我慢できない。

だつて、紅菜のそばにいられるだけで、紅菜を愛しつづけられるだけで。それだけで幸福だとおもうから。

（もちろん今回のように嫉妬もするけど）

けつときよく最後は紅菜の意志のままだ。紅菜がそれを望むならその望みが叶うように行動するのが、夫を支えていくいい妻の証。沙那姫は自分が紅菜にとつていい妻であることに誇りをもつていて。そのことにかんしては誰にも負けるつもりはない。だつて良妻は切つてもはなせないものじゃない。

「私はあなたより誰よりも紅菜様を愛しています。みかえりを求める愛があることも学ぶべきです」

沙那姫はそういうつて昴摩が紅菜にした行動をさした。昴摩はきゅうに真つ赤になりその行動に罪悪感と恥ずかしさをおぼえる。今まで自分がいちばん紅菜へのおもいが強いとおもつていたけど、それが自分勝手でちつぽけなもののようにおもえた。

「私のはなしはそれだけ……あ、それと紅菜様とはやく仲直りしてください。元気のないあの人を見るのはなによりもつらいから……」

沙那姫はそういうのこして屋敷へともどつてしまつ。沙那姫がさつたあと昴摩はその場にしゃがみこむと頭をかかえた。

恐ろしく自分が子供で身勝手なように感じた。そして、沙那姫はとおくおよばないことをしる。だつて自分は恋敵に「はやく仲直りしろ」といえるだらうか。昴摩の発想では皆無だつた。考えたこともない。しかもその理由が愛した人が悲しむからだ。

沙那姫と言葉をかわして軽率にも紅菜に暗い顔をさせてしまつた自分が愚かしく感じた。自分でつて紅菜には笑つていてほしい。

「ああ、かつこわり」

片腕で髪をつかみあげて空にまき捨てた。そして、そのまま瞳をつぶると朝の冷たさのなかどうやって仲直りするかかんがえた。謝るだけで許してくれるだろうか。謝りにいつて無視されても殴られても蹴られてもなんどでも謝りつづければ許してくれるかな。そんなことをかんがえながら昴摩はしばらくその場所にとどまったく。

「でてきなさい」

紅菜がいる部屋にもどるとちゅう沙那姫は行儀のわるいもうひとりの坊やに声をかけた。ずっと沙那姫と昴摩のあとをつけていた坊や。いままできづかないふりをしていたのはふたりいつぺんに忠告ができるとおもつたからだ。

茂みの影から音とともに姿をあらわしたのは縁の田をした鬼の坊や。たしか鬼柳とかいう名だつたはず。

「なにかいいたそうね」

鬼柳の顔をみて沙那姫はいった。そんな沙那姫に鬼柳は理解できないとといかける。

「どうして、あんなこと」

鬼柳の言葉にくすっと余裕の笑みをつかべると沙那姫はいつ。

「きいていたんでしょ？」

きいていたならわかるはずでしょう、と沙那姫はいいたげだ。昴摩との会話でそのこたえはでているではないか。

「失礼だとはおもいましたがきいていました。でも、あれが本心だと？」

理解がまったくできないのだろう。沙那姫は疑いと混乱の目をむける鬼柳にいう。

「本心しかいわないわ。私は紅菜様の妻であることに誇りをもつている。紅菜様のいい妻であることにね」

やはり理解できない。いい妻であってもその愛が自分にむかなければなんの意味もなさないように感じるからだ。

「それは偽善ではないのですか？」

「いいえ、究極の愛よ。私はそんな愛をあたえてくれた人の妻な
よ」

鬼柳の言葉をきつぱりと否定して誇りと威厳にみちた声でかえし
た。既然としない鬼柳に沙那姫は再度ほほえむ。

「自分よりもなによりも他を愛することをしるにはまだまだ幼いわ
」
そういうて鬼柳をのこして沙那姫は紅菜のもとにもどつていつた。
部屋にかえると菜稚琉が紅菜のそばにいる。紅菜はまだ眠つたま
まつた。沙那姫の姿をみてにっこり微笑んだ菜稚琉の表情は“ご
苦勞様”とかたつていて。

「手のかかる子でごめんなさいね」

菜稚琉がそういうたので、沙那姫はふわりと力のぬけた笑みをか
えした。沙那姫は坊やがいつたように自分のおもいがけつして報わ
れていないとおもつていて。紅菜を愛して無償の愛をしつて自
分にはえるものがあつたとおもつていて。そのことにきづけるかき
づけないかで愛の意味はかわるのだろう。

「ああ、今日は休みだ。休み。昨夜のがきいてなにもしたくない」
紅菜たちが部屋にいくとそいつて紅菜には覚えのないおおきな
瘤をつくつている螢蘭はいつた。のみすぎで記憶のない紅菜はどこ
でぶつけたのか、と不思議におもつたが強いて言葉にはしなかつ
た。

「てなわけで、俺は今日一日よく休む。さつとでてけ」

三人はそういうておいだされた。そりやあ、昨夜の騒ぎじやな。
と納得しているのはふたりだけで、紅菜はなぜ?と不思議そうな顔
をしていた。

(ま、いつか)

あつさり疑問をすると紅菜は廊下をあるいていく。苦しい稽古
からいつときでも解放されるならこまかいことをいちいち追及する
のは野暮なことである。じうみえて紅菜は稽古がだい嫌いなのであ

る。やらないですむならそれにこしたことはない。

「紅菜」

昴摩はさきにこいつてしまつた紅菜をよびとめた。そして、紅菜のもとへとかけよる。

「なんだ？」

ちかづいてきた昴摩に棘のある言葉でかえす。その紅菜の態度にひるみそうになつたがそれでも自分を勇気づけて謝る言葉を探すようにならぬをつないでいく。

「あの、だから。あのときのこと」

紅菜は視線を反転させるとなにかいいたそうにしてこる昴摩をのこしてあるいていった。今日は沙那姫と昼寝をするときめたのだ。たつたいま。

「紅菜・・・・・」

冷たくもあしらわれてしまつた昴摩はよわよわしい声でつぶやいたが、すぐに気持ちをたてなおすように自分の頬を両手でバシッとたたいて気合をいれる。紅菜が簡単に許してくれるとははじめからおもつてなかつたではないかと。

（よし、がんばれ）

鬼柳はそんなふたりをみていた。さつていい紅菜の背中も自分を励ますように気合をいれる昴摩も。そして、沙那姫をおもつ。けれど、理解できなかつた。自分の利潤ばかりをあつてきた鬼柳にとって沙那姫の行動はやはり理解できないし、とうてい納得のできるものではなかつた。

紅菜は沙那姫の膝のうえで眠つていた。紅菜の頭をなでながら手をつないで沙那姫は心地よさそうな紅菜の顔をみていた。そして、その顔をみつめながらかんがえる。

（坊やが謝りにきたときにはてきとうにでていかないと）

言い訳はなんでもある。菜稚琉と約束があつたとか、用事をわすれていたとか、てきとうにこいつて部屋をでていけばいい。しかし、

昴摩がいつもあらわれる気配がない。あんなにいつたのだからさつさと謝りにくればいいものを。

(もう、男のくせにぐずね)

そんなことをおもつているとほにゅくやうな顔をして昴摩があらわれた。そして、紅菜が眠つてゐるとおもひとむきをかえてしまつ。

「おまちなさこ」

沙那姫はそういうて根性なしの昴摩をよびとめた。昴摩の足がびたつととまりふたたび部屋に視線をもどす。

「紅菜様に用があるのでしょうか?」

そういうてさきをうながす沙那姫にいにこくやうに昴摩はいつた。

「いや、あとでいい。紅菜、寝てるし」

あまりにも弱気な態度に沙那姫はあきれる。そして、こんなやつに塩をおくつたのかとおもつと皿分が情けなくなつた。もちろん、紅菜のためにしたのだが。

「おひせばいいでしょ?」

やうこつてみたものの昴摩は紅菜をおひせりとはしない。それにしびれをきらして沙那姫は紅菜に声をかけた。

「紅菜様、おきてください」

紅菜はなんの反応も示さない。かるく揺らしてみても皿をとじたまま眠つてゐる。それでも、沙那姫は声をかけ強引におひせりする。

「紅菜様つ、おきてください。お密ですよ」

そんな沙那姫に昴摩はあわてて声をかける。

「いいよ、よく寝てるし。わるいから」

その言葉に沙那姫は紅菜をゆする手をとめた。しかし、おひせりとをおきらめたわけじゃない。

「この沙那姫に狸寝入りがいつまで通用するとおおもいですか」

沙那姫ははじめから紅菜が目をつぶつてゐるだけであつたく眠つていなことをしつてゐる。それでも、目をさまそとしない紅菜

に沙那姫は紅菜の耳をおもこつせりひつぱつた。

「いたつ」

そういうて飛びおきた紅菜は耳をおたえて非難がましく沙那姫をみたが、とうの本人はどこ吹く風だ。

「やつと田をあけましたね。心配しましたよ。田蓋がひつくんじやないかとおもつて」

しらじらしくそうこうと沙那姫はほほ笑む。紅菜はむつとした表情をしたが、それも一瞬だけのこと。すぐにたちあがると昴摩にはきづかないというふうによじぎり部屋をあとにした。

のこされた昴摩はうなだれて紅菜とは反対方向へとあるしていく。紅菜が昴摩に謝るすきをあたえなにようにしているのは明確だつた。（まつたく、強情なかた）

昔からへんに強情なところのある紅菜に沙那姫はあきれながらそうおもつた。なにをそんなに意地になることがあるのだろうか。皆目検討もつかない。そうおもいながらも紅菜をおつてたちあがると屋敷の外へとむかう。

人の高さぐらいにもつた雪山のうえに紅菜はよこたわつていた。

沙那姫は紅菜の衣がぬれでいることにきづいておかしくおもう。きっと子供のようにこの雪山をつくつていたのだろう。それにしてもどうしてこの人はこうかわつたところで横になるのか。腰がそれてつらくなはないのだろうか。

「紅菜様、風邪をひきますよ」

沙那姫の手が額にふれる。ふれられたとこりがやきつくかとおもうほど熱い。つぶつている田をあけもせず紅菜はそのまま反応をしめさない。

「・・・・・」

そんな紅菜の反応に沙那姫はこまつた視線をむける。昴摩にそつけなくしてしまったことに罪悪感があるのだろう。

「手もこんなに赤くさせて螢蘭様がみたら大騒ぎですよ」

そういうて紅菜の片手を暖めるようにつづみこむ。紅菜はなんの反応もしめさないが沙那姫はきにしたそぶりもみせずに息を吹きかけた。

「かまくらをつづつた」

紅菜がそういうて目をあける。よくみると雪山のなかは空洞になつている。紅菜の体重をさえられるほど丈夫につくられたそのかまくらを沙那姫は感心した目である。

「丈夫なものをつづつたんですね。あ、そういう覚えてますか？私のことを大反対されたとき、紅菜様たら私をつれて屋敷をでつたでしょ？ お金もなにもなくて住むところもあてもないからつて洞窟で過ごしましたよね」

沙那姫はおもいだしながらくすぐり笑つてはなしている。雪の洞窟をみていたらあのときのことをおもいだしたのだ。そうやつて楽しそうにはなしていと紅菜はおきあがつた。

「火がきえたら凍えそうなほど寒かつたな」

紅菜もおぼえているのだろうそういうて沙那姫をみた。沙那姫は幸せそうに微笑むとおもいだした思い出をはなす。

「紅菜様、毒きのこを食べてしまって大変なことになつたわ」

「あれは沙那姫がとつてきたんだろ？」

紅菜は沙那姫にいいかえす。みた瞬間、毒きのこだとおもつたが沙那姫がどんどんになつてとつてきてくれたかとおもうといえなかつたのをおもいだす。

「だつてずつと海のなかにいたんですもの。あのあときちんと勉強しました」

すこし拗ねたようにいつた沙那姫と紅菜は視線をあわすと不意にふつとふきだす。どちらともなく笑いだした。あのときは菜稚琉たちの追つ手はくるは物の怪に襲われるはで大変だつた。

「でも、楽しかつたです」

沙那姫はそういうとほんとうに楽しそうな顔をしている。紅菜自身も大変だつたけどそれなりに楽しかつたとおもう。紅菜の表情が

遠く昔の楽しいときからいまくとひきもどされた。沙那姫はその表情の変化をみていた。

「・・・・・・・・」

なにをかんがえているか手にとるよつにわかつた。さつと昂摩のことをかんがえていのだなつ。浮かない顔の紅菜に沙那姫はつつみこむような笑みをむける。

「・・・・・・・・」

紅菜はそんな沙那姫を不安な目でみつめる。いや、甘えるような救いを求めるようなそんな目だと沙那姫は感じた。紅菜の額にこつと自分の額をあわせると沙那姫は静かにいつ。

「大丈夫ですよ。なにがあつても沙那姫がついてます。地獄の底でも奈落の底でもどこでもつれていってください」

紅菜は自分がうんと甘えていることを自覚している。沙那姫がこうして無条件でうけとめてくれるのをわかっているからビリしても甘えてしまう。

「くすくす。紅菜様は甘えん坊だから・・・・」

うえから目線でいわれてすこし紅菜は拗ねた表情をみせる。そんな紅菜をどうしようもなく愛おしいとおもひのだからしまつにおえない。沙那姫の耳に草の音がきこえる。

「お客様ですよ。仲直りなさい」

紅菜にそういうと沙那姫は勇氣づけるようにほほ笑む。紅菜の不安はいまある関係かたちが壊れるときに顕著にあらわれる。だから彼とのなががかわつてしまつことに臆病になつてているのだ。でも、かわらずにいられるほど人は無欲ではない。まだまだそのことに紅菜は気づいていないけれど。

「・・・・・・」

沙那姫がさり、のこされたふたりは無言のままだ。きまづい雰囲気にすでに逃げ腰なのは意外にも紅菜のほうだった。ついさっき沙那姫に励まされたばかりだというのに情けない。

「・・・・・」

(なにかいえよ)

紅菜は田線をしたにむけたままその沈黙にたえきれず心のなかでつぶやく。先端はもちろん体の芯まで冷たくひえてきた。衣がぬれていることも体温を奪う原因のひとつだらう。

昴摩も昴摩でどうきりだしたらしいかわからなかつた。ふつうに謝らうとしてもそれほどみたいにかわされればもうたちなおれないかも。

「じきげんいかが?

今日は雪が降らないね。

明日も休みだといいな。

オレもわるかつたがおまえもわるい。

(・・・・喧嘩うつてるな)

自分の思考にそつつこみをいれる。きのきいた言葉があまりにもつかばなくて昴摩は完全に八方塞な状態になつていた。

「寒いから帰る」

紅菜はこれ以上たえきれずそつそつ口笛をあげてしまつた。そして、ふりかえりもせつまつすぐには敷へとむかつていぐ。仲直りをするにはあまりにも糸口がなさすぎた。

紅菜の背中に拒絶を感じて昴摩はもつまにもできない。その背中をおつて手をつかんでなんでもいいから言葉をかければよかつたのに昴摩にはそれすらおもいうかばなかつた。愛する者の拒絶はなによりもこたえた。はじめのじるのようになばにいるだけで満足していればよかつた。どうして多くを望んでしまうのだろう。そのときは失うばかりなのに。

紅菜は足早にあるきながらも追つてくれればいいとおもつていた。おいかけて足をとめてなんでもいいからいつてほしかつた。でも、けつしておつてはこなかつた。あつといつまに屋敷につき紅菜は衣を脱ぎ捨てると沙那姫の膝のうえで寝をはじめた。

「・・・・・」

「・・・・・」

沙那姫と菜稚琉はそんな紅菜の態度にたがいの顔をみあわせると直感でうまくいかなかつたことを感じとつた。そして、ふたりの顔は無言であきた、疲れたような顔になる。まったくもつてうまくいかないものである。

(なんなんだ。こいつは)

螢蘭はだらしなく横たわりながら田のまえの相手をみていた。螢蘭は脇のあいだに枕をはさんでその腕で自分の頭をさえていた。足も交差させ自分の体を片足でさえてこる。しかし、それとは対照的に田のまえの相手は正座をして拳を自分の膝のうえにおきつただれている。

「で、俺になにをしてほしいんだ」

螢蘭はそういうてうだうだしている昂摩にいつた。昨晩おもいつきりやられた相手のもとへ相談しにくるこいつの神経がわからない。「なにをつてことはないんですけど・・・・・ただ・・・・・」

まつたくもつて歯切れのわるい昂摩の返答にすこしこらこらしてくる。紅菜を襲つたという誤解はもうとけているもののそれにしたつて自分のところに紅菜との仲直りを相談しにくるだろうか。怒らせるようなことをふきこまれるかもしれない、とはおもわないのだらうか。

(馬鹿なのか賢いのかよくわからんやつ)

「ただ、どうすれば紅菜がはなしをきいてくれるか、と」

昂摩はそういうてうかない顔をあげた。そのときどかどかと足音をたてて沙那姫と菜稚琉があらわれた。菜稚琉はともかく沙那姫は怒り心頭だ。あたりまえだらう。せつかく場をつくつてもらつたのに悪化させるどころか停滞のままなのだから。

「あんたねッ！ばつかじやないの！一言あやまればすむことなのになにぐずぐずやってるのよ」

顔の色もかわるほど怒りくめる沙那姫は言葉つかいまで乱

暴になつてゐる。昴摩はあとずさる。螢蘭は沙那姫をみてなかをとりもどつとしたことを察する。

「まあまあ、こいつはへたれだからしかたないだろつ。なあ、黒鬼」
布団を頭からかぶつて寝ていた黒鬼魔王は上体をおこすとだるそ
うに頭をかかえておざなりに返事をかえす。昨夜の被害者はこ
もいたのだ。

「ああ、ふがいない息子ばかりで父がつくり」

螢蘭もそつたが黒鬼魔王も疲れきつた顔をしてゐる。昴摩はいま
までおなじ部屋に黒鬼魔王がいたことをまったく覚かなかつた。
そのことにすこし衝撃をうける。

（親父のやついつからいたんだ）

沙那姫も昨夜の犠牲者のひとりで泥酔してしまつた菜稚琉のかわり
をしたのだ。いちばんの被害者といつてもいい。

「なんでもいいのよ。すべてあんたがわるいんだからー地面に頭を
つけて蛙みたいにあやまればそれでいいのよ」

沙那姫の言葉にだらだらとしているふたりは「そつだ、そつだ」
とはやしたてる。そんな一同をみながら菜稚琉は冷静に判断する。
(それでは根本的な解決にはならないでしぇうね)

いちがいに紅菜にはまったく非がないとはいきれない。かとい
つて紅菜が自分の非を理解できるかはなぞだが。
(紅菜はすれているようですれていないですからね)

けつときよくのところ喧嘩の裏に隠れている部分をあきらかにしな
ければ焼き石に水、その場しのぎで、またすぐに具現化してしまつ
だらう。

「そういえは。紅菜は誰がみてるんだ?」

ああだこうだいつていた螢蘭はふときづいたよつこいつた。別に
いまきづいたわけではないし、誰がみているかはもう想像はついて
いる。

「鬼柳がみていますよ。情緒不安定でお酒でものまれては困ります
からね」

昨夜のことをふくみながら菜稚琉がいった。

「寝てるのか？」

「ええ、ふて寝しますよ」

螢蘭の言葉に黒鬼魔王はぴんときた。きゅうにはなしをかえた螢蘭のおもわくにきづいたのだ。そして、心のなかでほそく笑みながらそれにのる。

「大丈夫なわけそれって？」

黒鬼魔王の言葉に昴摩が「え？」という表情をする。その表情にわるい笑みを心に隠してさらに言葉をつづけた。

「情緒不安定で力も落ちてるのに鬼柳に対抗できるのか？」

黒鬼魔王の言葉に昴摩の顔色がさああと青ざめていく。そして、あわてたちあがるととびだしていった。そんな息子の背中にさらり追い討ちの言葉をかける。もう表情は心とおなじわるい笑みをうかべていた。

「鬼柳がいちばん手がはやいからな」

黒鬼魔王の言葉に相づちをうつようごバタッとしたおれる音がする。しかし、かんぱついれずダダダダッといつ走る音にかわった。その昴摩の反応にわるい大人ふたりは腹を抱えて爆笑した。

「あいつは肝心なときにへたれだからな。ははははは

「へたれ兄弟だなあ、くつくつ、あはははは

黒鬼魔王はいまいつたことと反することをいう。とうぜん昴摩の耳にはとどかない。ほんとうにわるい大人である。

「これでだめだつたら殺してくれてもいいぜ」

涙の浮かぶ瞳をぬぐいながら黒鬼魔王はいった。螢蘭も「おお、殺してやる、殺してやる」とかえしてさらに笑った。ほんとうになかのいいふたりである。

言葉とは不思議なものでおなじ言葉でもいつ相手によつてその比重はかわる。いまの場合、螢蘭がいうより、この場のほかの誰かがいつも黒鬼魔王がいうのがもつともこたえただろう。

鬼柳はよこで眠る紅菜をみていた。冬のすんだ空氣のなかなんの警戒もなしに眠る紅菜の姿はそこだけが時間がとまっているようだつた。

(つづく)

素直にそうおもえる。漆黒の闇をおもわす黒くながれる髪。凛とひかれた眉は利発と洗練をおもわせる。鼻も輪郭もいつせいの狂いもなくあつらえられているような完璧な美を象徴している。

“美”といつても造形的な冷たい印象をうけるものではなく、自然のなかにある神がつくつた“美”である。しかも、凛とつけるすきのない印象をうけたかとおもつと、可憐らしくせじゆぶ可憐らしき印象ももつていて。

(おきたりしないだらうか)

綿のよにかがやく紅菜の髪にふれたくて手をとまよわせぬ。一目みたときには圧倒的な強さとすきのない完璧さをかんじた。しかし、言葉をかわすたびにその印象はおどろくほど変化していった。

(惹かれてしまつ)

ふれたいととまよわせた手をみつめおもつ。けつきょくふれずにその手をひっこめた。

強いかとおもえは弱くて。すきがないとおもつと無邪氣なほどすきだらけ。世をみわたす明るい日があるかとおもえればおどろくほど盲目だつたりもする。対極のもの。その両面をもつていてるような、むらのある人だとおもう。力だつてそうだ。誰よりも強い力をみせたかとおもうと次の瞬間にには弱くなつてこる。

強く力づよいかとおもえれば弱々しくて、つい手をさしのべてつりんであげたくなる。かたよりのない不安定な、いやある意味安定したそんな彼女を鬼柳は今まで抱いたことのないおもいでみつめている。

はげしい衝動にかられてすべてをすべて紅菜のもとへいくことを決断した兄の気持ちがわかる。紅菜とせつすれば、せつするほどそのおもいは強く理解できるようになる。

(やはり目をさましてしまうだらうか)

ふたたびためらいがちに手をのばしながら鬼柳はおもづ。紅菜は目をさますことがないほどよく眠っていた。すうすうと規則的な呼吸音が鬼柳の耳をくすぐる。愛おしい気持ちがやさしくつまれるようなそんな寝息だ。

「なにをしている」

剣呑な声がその甘く穏やかな世界にふみいつってきた。顔をみあげるとそこには昴摩の姿があつた。立場をすて、ただの男になりさがつた兄をさげずんだりもしたが、いまおなじ気持ちを抱いている自分が誇らしくもおもえた。

「なにもしてませんよ」

鬼柳は冷静な声でこたえる。事実、自分はつしろめたいことはなにもしていない。ただ、髪にふれることすらできなかつただけだ。

昴摩は紅菜のもとへすわると紅菜の体を乱暴にひきよせる。それでもすて寝中の紅菜は起きよつとはしない。「うーん」とつなつただけだ。

「手荒なことはやめてください。紅菜様がかわいそうでしょう」

鬼柳はあからさまな態度にむつとすることもなく紅菜をきづかうようにいった。この人からすれば自分は邪魔者なのだらう。はげしい独占欲と保護欲がいりまじつた瞳が鬼柳をみている。

(欲からは逃げられないということなのか)

そんな瞳をみつめながら鬼柳はおもつた。紅菜を娶れた者が王になれる。鬼柳にとつても昴摩にとつても愛欲と支配欲どちらもみたすことができる条件になつていて。

権力と愛との狭間で苦しまなくていい。

「紅菜は道具じゃない」

かんがえをみすかすように昴摩はいった。腕でしつかりと紅菜を抱きしめて背をむけたまま言葉をすてたるよつにそつていく。いなくなつてしまつたその空間をみながら、昴摩がきづいていない自分の心の変化をそつとたしかめる。

「わかつてぃますよ」

いまの自分はどうちをえらぶだらうか。そんなことをかんがえはじめたが、すぐに鬼柳はその思考を中断する。

突発的につれだした紅菜を自分たちがつかっていた部屋へとつれできた。この部屋に紅菜がきたのは何日ぶりだらう。いや、それ以上にじうして紅菜の寝顔をみてすうす時間は遙か昔のことのよつておもえた。

片膝のうえに紅菜の頭をおいてくる。もう片方の膝のうえに自分の腕をおいて紅菜の寝顔をみていた。

「ううん」

怖い夢でもみているのだろうか眉のあいだに皺をよせて不安げな表情をしている。紅菜はたびたびじうした表情をして夢につなされることがある。「つか『どんな夢をみているのか？』ときいたことがあるが、紅菜は『おぼえていない』とこたえただけだつた。

昴摩は紅菜の額にふれながら髪をすべく。すると紅菜はまた穏やかな寝顔にもどる。子供のよつなその寝顔に昴摩はつこつこ温かな笑みがこぼれる。

ぴくぴく動く皿蓋もかすかにひらいている唇も緩慢に上下をくりかえす胸もなにもかも愛おしかつた。この寝顔をみていたらすべてをなげうつても守つてやりたくなる。夢のなかですら不安なおもいや怖いおもいをしないように完全に守つてあげたい。

「うーん、沙那姫へのどがかわいた」

寝ぼけながらそつこつて皿をさます。紅菜は昴摩と皿があつて戸惑いと驚きを一瞬ひとみにうかべたが悟られなによつこすぐにひっこめる。そして、おきあがひつと上体をおこした。

「わあっ」

おこしかけた上体を無理にひきもどされ、すこし後頭部をぶつけた。昴摩はおきなによつことじつよつは逃げなによつに額をおさえるために手をおいた。

(いたたた)

紅菜はおちつかない。昴摩の掌がふれていることがいまいちばんおちつかなかつた。だいたいいつのまに自分は「こんなところにいるのだろうか。沙那姫の部屋で寝ていたはずである。

「はなせ。帰る」

自分の部屋にいながら“帰る”はおかしい感じがするがいづらい。

「はなせ」

昴摩がいつまでも掌をどこようとしないのとその腕をつかんでどうかせようとした。

「逃げるなよ」

挑発的な言葉にむつとして紅菜はにらむ。こんなあつかいをつけりわれも一方的に怒りをかういわれもない。紅菜にはなにがきにいらないのか理解できなかつた。沙那姫は昴摩とあうずつとまえから妻だし、きちんと昴摩のことだつてかんがえている。ないがしろにした覚えもない。

「はなしあおひ」

「いいだろひ」

頭上からの言葉にむつとなりつつ紅菜は従う。たしかにはなしあう必要はあるとおもうがこうしてみさげられてしたくはない。目線がうえかした。みあげるかみさげるかでは心理的になんだか立場がちがう。せめておなじ視線にしたくておきあがらうとしたが、それすら昴摩にとめられる。

「そのままできいて」

「え、ああ、わかつた」

いまで挑発的で反抗的な言葉だつたのに子犬のような顔でくうんと鳴くようにいわれておもわすしたがつてしまつ。視線をみあげなければいけないことへの違和感はそれないけどしかたない。

昴摩の心はおちついていた。紅菜が寝ぼけて沙那姫をよんだことがまったくにならなかつた。自分は彼女にかなわないとしつたからだ。紅菜が沙那姫に甘えたり自分にはみせたことのない表情や態

度をとることが羨ましかった。

しかし、今朝の沙那姫との会話でそれはふたりのはぐくんできた時間があつてのことだといった。なにより、沙那姫がどれだけ紅菜に尽くしてきたか痛いほどわかった。つまらぬ嫉妬で手をわざわざしてしまった自分とはちがうのだ。

「オレは・・・俺がいちばん紅菜を独占しているとおもっていた。沙那姫があらわれてそうじやないとしつてあせつた。オレは紅菜のなかで何番なんだろうつておもつた。一番がいいのに一番じゃないことがつらくて紅菜にあたつたんだ」

昂摩のいう一番とか一番とかあまりよくわからないが、つまり簡単にいうといつもの格気を沙那姫にしていたということだろつ。紅菜は昂摩のはなしをききながらそう判断する。

（やうじうことか）

「ちがふ理解できていなくてんはあるものの紅菜は納得する。そして、やつぱり自分の非がまったくなかつたと判断した。この判断はあまり正しい判断ではない。

「おまえの気持ちはわかつた。謝つてこれでおわりだ」

自分の非がまったくないとおもつてゐる紅菜はひろい心で昂摩が謝つてさえくれば無条件で許そうとおもつていた。しかし、昂摩のおもいはちがう。まったく紅菜に非がなかつたわけではないのだ。

「たしかにオレもわるかつたがオレばかりがわるいわけじゃないだ

らう」

その言葉に紅菜の表情があきらかにくもる。はなしがこじれるとおもつたが昂摩にひくつもりはなかつた。大事なことだ。いっけん紅菜はすきがないようにみえるが、いちどきを許してしまつとおどろくほど無防備になるのだ。

「私に非があつたというのか？」

「そうだろう。現にいまだつて鬼柳のまえで寝てたじやないか」紅菜の険しい声におくすことなく昂摩は意見する。紅菜はなぜこに鬼柳のことがでてくるんだとおもつたが、どうかんがえても自

分に非があつたと反省することができない。

「おまえのまえでも寝るじやないか」

自分でいいながら「そつだ。そつだ」とおもつ。人前で寝てなにがわるい。眠たいから眠つていただけだし、だいいちばじめから鬼柳がいたわけじやない。

紅菜の言葉にわかつていながらもがつくりした。どうしてわからぬのだろう。なぜ。どうして、ああも無防備になれるのだろうか。男としてみられていない。いや、そんなちんぷな理由ではない。根本的なことがわかつていなによつなきがする。仲間や家族にたいする好きとういう感情しかわからぬ紅菜はそのうえのおもいを理解できないし意識できないのだろう。

「オレは好きだ。紅菜が好きだしそうにいたい。独占したい」

紅菜にといかける。紅菜はどうなんだ、と。紅菜はなにをいいだしたんだとおもいながら、自分の気持ちをありのまつたえる。昴摩のことは好きだし、紅菜だつていつしょにいたいとおもつてている。紅菜はおきあがると昴摩を首をかしげながらみつめる。

「? 私だつていつしょにいたいとおもつからあのときおまえをむかえにいつたんだろう」

「オレのこと好きか?」

かつこわるいとおもいながらきかずにはいられなかつた。

「好きだぞ」

紅菜の言葉に昴摩はあきらな温度差を感じる。紅菜にこれ以上なにをいつても無駄だとかんじるほどの温度差だつた。しかし。

「じゃあいいよな」

昴摩はそういうて紅菜を強引にひきよせる。紅菜はすこしもがいたが、昴摩は力でそれを制する。いつもとはちがう昴摩に紅菜は戸惑いをかくせない。今回だけじやない。たびたび昴摩が昴摩じやなくなるときがある。そのたびに紅菜はなんともいえない気持ちになるのだ。心だけじやない。体ごとへんな感じがする。

「やめつ、はなせー殴りたおすぞッ」

紅菜はいつものように気丈な言葉をなげつける。実際、こういう場面になることは多々あったが、類稀な靈力と菜稚琉や螢蘭の修行のおかげでなんを逃れてきている。いまだつて。

「オレのこと好きなんだろ?」「

(だめだ)

どう動けばいいのかきれいさっぱり忘れてしまった。靈力がない状態では頼れるのは武術だけだがその技を忘れてしまっている。力任せに闇雲にあはれても無意味なことだけが理解させられる状況。普段の昴摩からは想像もできないほど強い言葉。そう人がかわったようなそんな言葉だった。そして、紅菜はこの言葉になる昴摩にはなぜか自分の実力がだせなくなる。普段できていることがきゅうにできなくなるのだ。

「紅菜、うえむけよ」

命じられる言葉に紅菜の体が一瞬びくつと反応する。まるで主従が逆になつたようだ。

(いやだ)

紅菜はいわれたとおりうえをみた。そこには昴摩の顔がある。やっぱり、別人のかおだとおもつと怖いのに目がそらせなかつた。

(ああ、怖いんだ)

このときの昴摩がどうしてなのが、ものすごく怖い。怖いのに逃げることも逆らうこともできないことが、もつともひと怖いのかもしれない。自分のなかで絶対的な支配者のような感じなのだろうか。わからないが怖いという感情だけが理解できた。

「・・・・・」

紅菜の怯えと困惑をにじませた瞳に本能がざわめくのを昴摩はかんじる。侵略する悦び、征服する歡喜を昴摩は皮膚のおく、肉につつまれたもつとふかいところで感じてぞくつとしたおもいがわきあがる。紅菜の顎に指をそえる。紅菜は反射的に顔をひこいつしたがそれを許さなかつた。

(どうしたら・・・・・)

魔性の本性が田のまえにあつた。田のままだと紅菜に酷いことをしてしまっただ、昂摩は理性と本能のはざまにこる。沙那姫はどうやってこの本能と共に存してこらのだらう。

「紅菜が男としてみないからわるいんだ。オレやあいつが紅菜をどんな目でみてるかわからないだろう?」

紅菜はこたえられない。昴摩が男で自分が女であることはわかっている。でも、それは外面向的なはなしで内面的なことが理解できているわけじゃない。今まで意識しなかったことを無理やり意識させられる不快感。

「もういい。オレがわるかつたよ

紅菜の瞳が困惑をこじくしたのをみて昴摩はあきらめたようになつた。紅菜から体をはなすとはなれる。あとからつこつこしていくみづこはなれていく指。そして「『めん』」とこつこつついていく昴摩。しょせん無理だつたのだ。紅菜に自分のおもいを理解してもらつなんて。

(**昴**
摩)

そつとはなれしていく指先に紅葉は不思議な感覚をもつていた。捕らえられたい気持ちとはやく解きはなつてほしい気持ち。相反する気持ちをどうじに抱える。昂摩のでていつたそのあとを複雑な気持ちでみつめた。

昂摩はでていつたあと後悔していた。どうしてあんなことについてしまつたのか、どうしてあんなことをしてしまつたんだうつと後悔ばかりがうかんでくる。

みんなのいうように全面的に謝ればよかつたのだ。そしたらまるくおさまった。いままでどおりの関係をつづけていた。そばにいて無邪気に眠る紅菜をみていたのだ。きっともう紅菜は自分のそばでは眠らないだろう。

自覚させたのは自分のなのだ。いまの立場をでばなしたのも自分

だつた。後悔しながらもまだ望んでいる」とも事実。ある意味のや
んでいたことだつた。

紅菜のやのない鍛錬は口に口に酷くなつていつた。あまりの酷さ
に螢蘭は中断することを余儀なくされるほどだつた。そして、しば
らくの休暇をあたえることにした。このまま鍛錬をかさねても意味
がないと判断したからだ。

「紅菜様、きいていますか？」

鬼柳はぼーとしている紅菜にいつた。紅菜のはつとしたようすに
鬼柳は落胆する。昴摩とはなれでいるいまが自分のはじりこめるす
きだとおもい紅菜との時間をより大切にしているがとうの紅菜はう
わのそら。

「すまない。きいていなかつた」

紅菜はすこしきのじくそうにいつた。そんな紅菜に鬼柳は微笑む
とすこし意地悪なことをいうが本氣ではない。

「いいですよ。私のはなしがつまらなかつたんでしょう？」

「いや、そんなことはない」

紅菜はあわてて否定したが、また黙つてしまつ。そして、紅菜は
すまなそうな顔で鬼柳にきりだした。

「すまないが、ものすごく眠いんだ。部屋にもじるよ」

「それならこじで眠ればいい。私が紅菜様の安全をお守りしますよ」

鬼柳はひきとめるように提案したが紅菜はにこり微笑むとやん
わりとそれを拒否した。

「姉様がもうじき臥寝する時間だからいつしょにならんで寝るから
「そうですか」

鬼柳はうまくかわされたとおもつたがこれ以上はなにもいえず、
紅菜をおおくつた。「すまない」それだけをいいのこして紅菜はそ
こをあとにした。

建物と建物をむずぶ透渡殿すきわだいをわたろうとすると高欄に腰かけてい
る黒鬼魔王がいた。使い魔をはなつていていたところだつた。使い魔は

翼を羽ばたかせあつとこつまにまだ雪ののじる春の空へと飛んでいった。

「なにをしているんです？」

紅菜はきく。きくといつよりなんとなくでた言葉だった。

「仕事だ。いちおうこれでも王だからな」

その言葉に紅菜はおもいだす。そなただ、彼は昴摩と鬼柳の父親であるまえに鬼族の王であり魔界の三大の王のうちの一人なのだ。あまりにも普段の彼からは想像できない立場をおもいだして不思議と違和感を感じた。

「顔色がわるいな。寝不足だらう」

黒鬼魔王は「くまができる」といにながら自分の目をしたを人さし指でおさえた。

「姉様はどこにいます？」

「菜稚琉様や螢欄様たちは外出中。なんかとりに山へいったぞ」

「沙那姫も？」

紅菜の言葉に「ああ」とあつさりこたえると黒鬼魔王は紅菜の体をだきあげる。紅菜はおじろいた顔をして黒鬼魔王をみていった。

「おろしてください」

しかし、黒鬼魔王がそんなこときくよつな男ではない。紅菜の体をかたむけて地面におちるようにな不安定に抱える。紅菜は体がおちてしまふ、と反射的に反応して黒鬼魔王にしがみついた。

「おりたいんじやなかつたのか？」

意地のわるい顔で黒鬼魔王はいう。紅菜は悔しそうに黒鬼魔王をみるとふんと顔をそらした。黒鬼魔王は豪快に笑うとそのまま紅菜の部屋へつれていく。

「あつたかいな」

部のおりた部屋には火桶がおいてありあきらかになかとそとでは温度がちがう。さつきほどまで寒い透渡殿にいたひえた体には部屋のあたたかさがしみる。そして、紅菜を御帳台のなかに紅菜をおろす。この屋敷には紅菜のための部屋がいくつもありそのどの部屋の

調度品も高価なものだつた。

ひろすぎる屋敷、おおすぎる部屋はどこもかしこもきれいで管理されている。それは温度にいたるまで完璧に管理された空間。だいたいにして黒鬼魔王はこんなつくりの屋敷をみたことがない。屋敷が何個も渡殿でつながつてゐるのだ。しかも対でかこんだ短い草の広場まである。町の家々をつなげてゐるようなそんな屋敷。馬屋も武器庫も祭壇に滝や池までりなんもある。黒鬼魔王じしんまだこの屋敷をすべてみてまわれていない。それほどおおきな屋敷なのだ。

「ぐつすり眠れよ」

黒鬼魔王はそういうて紅菜の頭をなでる。赤子あついかいされているとおもつた紅菜はすこしむつとしながらいた。たしかに赤子のようによく眠るが赤ん坊あつかいは失礼だ。

「あなたがいると眠れません」

紅菜の反撃に黒鬼魔王はおりよ、とおもひ。自分にたいして紅菜はもう敵として警戒していない。いわば内の人間のはずである。いぢりを許してしまえば紅菜はどこまでも無防備になる。内側にいることはむずかしいが、そつ、子供のようにはいつてしまえばとことんなついてくる。

「なぜ？」

「なぜでも。姉様がかえるまではなしをしてくれませんか？」

「なんのはなし？」

紅菜の言葉にそつかえすと紅菜は「なんでもいいです」とこたえた。

「そうだな。それじゃあ、魔界のはなしをしてやるつかな」

そういうと黒鬼魔王は魔界のはなしをはじめる。魔界の草花のこと人の味のする果物があることや自分の飼い魔のこと。そして、魔界の子孫繁栄事情。魔界の者はなかなか子ができるないそうだ。「あの種族の女はたまつたものじゃないな。女は男を食つちまうんだからな。まあそのかわり子ができる確率がたかいけどな」

「だれでも食べるのか？」

はなしをきいていた紅菜はいった。男ならだれでも食べてしまつのだらうかと不思議におもつたからだ。

「きにいつたやつを食つんだらう。恋したら食われちまうなんてなんつうつか、なあ？」

「好きだと食うのか？じゃあ、家族も男だつたら食つんだな？」

（うん？）

はなしがへんな方向へとながれていることに黒鬼魔王は頭をひねる。すこし、男女ということを意識したかとおもつていたがあまり期待はできないうことをいじだす紅菜だった。

「紅菜、好きにもいろいろな種類があるのしつてるか？」

黒鬼魔王は単純にわきあがつた質問をしてみる。すると紅菜は「ああ」といった。

「恋はどんな好きでしょう？」

黒鬼魔王の次の質問に紅菜はこたえる。そのこたえは螢蘭に幼いころおしえてもらつたこたえた。

「子供がほしいとおもつた相手だらう」

（それは・・・・・結果論・・・・・？）

そのこたえに黒鬼魔王は紅菜の教育問題に疑問をなげかける。どうかんがえてもそつち方面の教育を間違つていいとしかおもえない。「師匠が“子供をつくるために異性を好きになる”つていつた。子供がいらない相手で好きなのは仲間つていうんだつていつてたぞ」ある意味正論。ある意味的外れな。その言葉に黒鬼魔王は息子たちをおもつ。つぐづぐ、なんて手強い相手をあいてにしているんだと。気の毒になる。

「じゃあ、紅菜は子供がほしいのか？」

紅菜はかんがえることもなく「ぜんぜんいらない」といった。その言葉に（そりや、そだらう）とおもう。はじめから子供を視野にいれて恋愛するやつなんていない。たとえ恋愛の根本がそこであつたとしても合理的なものではなく非違合理的なものが恋愛だ。

「あらあら、なんのはなしをしているの？」

そういうて妻田をあけてはいつてきたのは菜稚琉だった。紅菜は菜稚琉をみるなりうれしそうな顔をすると眠たそうに田を口にすつた。そんな紅菜の姿に菜稚琉はくすくす笑うと紅菜の手を口にさる。

「姉様の手冷たい」

「外にいつていましたから？ 眠たいのでしょ？ おやすみなさい」
菜稚琉の言葉に紅菜はよこになる。手をつないだまま寝たそつにしていた。眠るまえにぐずる赤ん坊のようだ。

「黒鬼魔王、紅菜のおもり大変だつたでしょ？ 眠たいのが究極になるとぐずるから」

完全に赤子あつかいしている菜稚琉は紅菜をあやすよりにとん、とん、とん、と手で心臓の音と共鳴させる。

「いいえ、ただ疑問点はあつたけどな」

「螢蘭にはなにをいつても無駄で」

すこし困ったように菜稚琉はいつた。なにか察するようなものがあつたのだろう菜稚琉はそつかえしてきた。そして、おもいだしたように眠りかけている紅菜にいつ。

「そうそう、昴摩が砂糖菓子をもつてうわづらしてましたよ」

砂糖菓子は紅菜の大好きなもののひとつだ。でも、うすれゆく意識のなかで紅菜はあの昴摩をおもいつかべた、そして無意識にそのおもいを口にする。

「こわい・・・昴摩、ときどき・・・すう、すう」

眠つてしまつた紅菜を不思議そうな田でふたりはみた。そして、顔をみあわせるどじちらがともなく「どうこうこと？」とつぶやいた。

紅菜の睡眠がよくない。眠る時間はながいのに熟睡していなかっためつねに寝不足の状態だった。本来よく眠る紅菜は寝不足がいちばん心身にくる。集中力はもちろん精神的にも安定しない。

「紅菜様、あちらにいつてはいかがです」

沙那姫は月をみながら欠伸をしている紅菜にいった。夜もふかまり月はとおく星は輝いている。紅菜は眠るうつともせず欠伸をくりかえしている。

「昴摩が謝ったのでしょ。でしたら許してさしあげてもよろしくでないですか？」

みるとみかねて沙那姫がいった。欠伸のせいで目に涙をうかべている紅菜はそれをぬぐいながらしばしおもいつめた目をしたが沙那姫にいう。

「よくわからないんだ。男だといつしょに寝てはいけないらしい」沙那姫もよくわからない。なにをいつているのかもうひとつ理解できなかつたが自分なりにこたえをだそうと頭をめぐらせる。

「・・・・・それはそうですが・・・昴摩なら安全でしょう?」

「うへん、どうかな?たまにあいつ変なやつになるんだ」

また、理解できないことを紅菜はいった。そのままの疑問を紅菜にぶつける。

「変なやつってどんなふうにですか?」

「普段は犬みたいに従順なのに、たまに凶暴化するんだ。それで意味不明なことを勝手にいつて勝手に決めつけるんだ」

「はあ」

沙那姫は返事をかえす。紅菜はためていたものをはきだすようにさらにつづける。

「あいつ馬鹿なんだ。自分を男としてみるだつていうんだ。だれもあいつを女だとはおもつていないので、わかりきつたこといつて」(それは・・・)

沙那姫には昴摩のいわんとしていることがわかつたが、どうやら肝心の紅菜にはあまりつたわつていないようだ。紅菜に恋心を理解させるのは山を一晩でけしかるよりも海の水を干からびさせるよりも難しいと沙那姫はかんがえている。実際、自分のときも最後まで理解してもらえなかつた。

「そうなれば、いつものようにほにほににすればいいではないです

か

沙那姫はそう助言する。すると紅菜はすこしおもいつめた顔をして眉間にしわをよせてしまった。そしてまたしばし沈黙。

「…………なぜかわからないが抵抗できなくなる

「え？」

沙那姫はおどろいた表情で紅菜を見る。しかし、紅菜はそれに気づかずじきりにつづけた。

「変なんだ。体がざわざわするし、おもつていることと反対のことを行ったりしたりするし、体術も力の使い方も忘れてしまうんだ」沙那姫はそれをきいてあきれてしまつ。鈍感にもほどがある。でも、多少の進歩があるのかな。かるく頭痛をおぼえながら沙那姫は自分の眉間をかるくもむ。

「紅菜様、とりあえず昂摩のところにこきなさい。寝不足でお肌の年齢もうんとあがつてますよ」

「いまから？」

「やうです」

「さきにくわうしてこる紅菜にはまつたつづ。しかし、よつぽどいきにくいのか紅菜はしづつた表情をする。

「危ないぞ」

「大丈夫ですよ。もしものときは私があいつの首をはねますから。ね」

沙那姫の無邪気な顔に紅菜はしばし思案する。そして、「ほんとうに？」と念をおした。

「もちろんです。私がうそをついたことはないでしょ？」

紅菜はおもむろにたちあがると沙那姫をのこして部屋をでていった。沙那姫はそんな紅菜をみおくると布団にもぐる。もう夜も深い。さつさと眠らないとお肌があれてしまつ。なんの心配もせず数分後には沙那姫はくづくうと寝息をたてた。

紅菜のそばにいるのは自分ではない。彼なのだ、といいきかせて眠りについた。

高欄に腰かけながら夜の風をうけていた。背には遠い月がなくしたものをおもわせるようにのぼっている。部屋にいると紅菜の気配を感じて、それがいやでこゝして外にでてきてしまふが、欠けた月が物寂しくてとてもみてはいらなかつた。

今まで一人でいた。いまさらとおもつのに、あのこゝにはもどれないようだ。紅菜と出会つまこにもどるだけだと自分を納得せたのに理解しきれていない心があつた。

膝をみれば紅菜がよく枕がわりにして眠つていたことをおもいだす。艶やかな髪が川のようにながれて床に散らばる。目をさましたときのぼうとした無防備な顔も寝つきがおどろくほどこゝとまでもこまでは思い出のなかだけのものになつてしまつた。

「紅菜」

無意識に愛おしい人の名をよぶ。返事などかえつてくるはずもない。いまこゝは沙那姫のとなりでやすらかに眠つているだろう。彼女はあまりにもできた人でとつていて自分ではたちうちできなかつた。「よんだか」

「え？」

きゆうにきこえた紅菜の声に幻聴だつたのかとおもひ。しかし、田のまえには月明かりにてらされた紅菜の顔があつた。困惑いとおどろきそして、懐かしさにじませる。

「私の名をよんだだら」

紅菜はそうこつて昴摩にあゆみよるとおなじよつに腰かけた。ふれそうでふれられないその距離をたもつた。

「どうしたんだ？」

てつきりもう眠つているだらつとおもつていた昴摩は紅菜にきいた。わざわざ自分にあいにきたこゝのだらつか。

「沙那姫においだされた」

「やうか」

紅菜の言葉にすこしおどろき昴摩はつべづくおもひ。

(勝てないな)

そして、沈黙がつづく。たがいになにもいわずなにもかたらず円をみることもなくただ沈黙だけがつづいている。たがいの姿を視界にうつすこともなく半蔀はじとみをみていた。格子状の漆塗りのその枠をみながらたがいになにをいつていいのかわからない。

「率直にいう」

沈黙を破ったのは紅菜だつた。なにをじうのだらうと昴摩は紅菜をみた。紅菜もこちらに顔をむける。紅菜の癖のようなものだが、まっすぐに瞳をみつめてくる。紅菜は強い瞳で相手の目をのぞきながらはなしをする。そして、その瞳をみつめながら昴摩はおもう。(この瞳がくせものなんだ)

すいこまれてとらえられてしまつ。あの瞳にみつめられると彼女のいいなりにならなければいけないよつた使命感をもつてくる。「おまえのいひことはわからん」

昴摩はその言葉に落胆する。ずるつとせがつた気持ちをもちなおすように昴摩は気合をいれた。

「けじ、きをつけろ」

紅菜のその言葉に「なにを」といかけたい気持ちがあつたが、それをきくのをやめた。そして、またおなじ沈黙がつづく。紅菜も瞳をそらしてまえをみていた。

「なあ、昴摩もだめなのか?」

「え?」

その言葉に昴摩は紅菜を見る。するとおどろくことに紅菜は眠っていた。いま自分で質問したばかりなのにそのこたえもきかずに眠つてしているのだ。

「ふつ」

昴摩はそんな紅菜の姿にあこせくふきだしてしまつ。なんていうか、やつぱり最強だとおもつ。

「無敵だな」

昴摩はうつぶやいて紅菜を抱きかかえる。夜はまだまだ寒いの

だ。外で寝て風邪でもひかせたら顔向けできない。

温かい部屋につれていいくと布団に寝かせて自分はその場をやれりとした。しかし、紅菜がはなしてくれない。眠りながらも衣をつかんではなさないのだ。

「ううん、昴摩……」

それだけつぶやいてすうすうとふたたび寝息をたててしまう。昴摩は困ったように頭をかく。無防備に無邪気に眠る紅菜は安心しきつた顔をして眠っていた。

「やつぱり最強だ」

そういうって昴摩は観念したように紅菜のそばで眠る。いつものよううにひとりじめするように守つてあげるように抱きかかえる。紅菜の寝顔をみながら昴摩はついつい笑みがこぼれた。意地悪するようにつんつんと頬をつづく。

「う、んん」

眉間にしわをよせて迷惑そうに紅菜は反応する。その反応にすくすく笑つて昴摩はやさしく頭をなでるとしばらくその寝顔をあきずについていた。あまり解決したようにはおもえないがこの顔をみているともうどうでもいいようなきがするから不思議だ。

（まあ、いまはこれでいいか）

あまりよくばつていいことはない。いつもおもつと今回のことはかなり収穫があつたようなきがある。

紅菜をひとりじめるのはほど遠いこともわかつた。恋敵はたくさんいてしかも、そのひとりはものすごく手強い。彼女をこえるにはもつとおおきな器ともつともつと男として卓越した人にならなければいけない。

まだまださきは遠いとおもうが紅菜の心にすこしでもふれられているのならそれは無謀なことではないきがした。けつかもく朝日が顔をだしても昴摩は紅菜の寝顔をみつづけていた。

終章

一家団欒といつ言葉がぴたりな夜の宴。黒鬼魔王は側近につれられてかえつてしまつたが、今日も修行をおえて夜の時間を楽しんでいた。紅菜を酔わせたあの物の怪がつづつた酒をくみかわしながら夜のひと時を楽しむ。

「今日は俺といつしょに寝るか？」

酒に酔つてうとうとしつつある紅菜に螢蘭はそつこつて紅菜の髪をくしゃくしゃにする。

「師匠しつてましたか？女は男のもとで寝てはいけないです」すこしこばつたようにいつた紅菜に螢蘭や菜稚琉、沙那姫はふつと笑う。馬鹿にしたわらいではなく純粹におかしそうに笑つた。

「そりか？じやあ、昴摩は女だつたんだな」

昴摩と寝ていることを指摘されて紅菜はむくれながらいつた。

「昴摩は安全だからいいんです」

「わかんないですよ。夜叉様もとつぜん変化するかもしれませんよ」鬼柳がそう忠告をいれる。昴摩にたいしてのやっかみをふくんでいる。

「大丈夫だ。そんなことはない。もしものときは沙那姫が首を落とすことになつているしな。なあ、沙那姫」

紅菜はそつこつて沙那姫に同意をもとめる。

「もちろんですわ。あ、そうそう昴摩、心配しないでくださいね。私わざものをもつていますから痛みをかんじるまもなくあの世にいけます」

沙那姫の言葉に昴摩はひく。螢蘭はそんな昴摩の肩に手をねぐとにつこりと笑つていつた。

「大丈夫だ。俺様じきじきに始末してやるからな
(いや、いや、大丈夫じゃないです)

昴摩は心のなかで返事をかえす。

「昔から宝物に手をだすどころなるかは相場がきまつていますからね」

鬼柳はそんな昴摩においつめるようなことをいう。しかし、人事ではなくなる爆弾が投下されることをこのときの鬼柳はしらなかつた。

「そうですね。非業の最期というのは物語の常等ですしね」

投下五秒前。

「そうだ、そうだ。宝物には番人がいる」とを忘れるなよ

投下四秒前。

「ではここでの番人は螢蘭様と菜稚琉様ですかね」

投下三秒前。

「あら私も忘れてもらつては困ります。沙那姫も紅菜様の意向にそぐわないようなことは許しませんからね」

投下二秒前。

「まあ、私は大丈夫ですよ。紅菜様を大事におもつてますから。でも、夜叉様はどうでしょ?」

投下一秒前。

「ああ、オレが紅菜を傷つけるわけないだろ?」

「そうでしょうか? 今回のことはどうだつたんでしょうね」

「どうじうじうことだ」

爆弾発射。

「あ、そうそう。ふたりにいつておくが私はまだ子はいらないぞ」

爆発完了。

ふたりは紅菜の言葉に顔をみあわせる。子供のはなしなど紅菜としたことがない。

「ほう、子供がほしかったのか? ふたりとも」

螢蘭のひくい声がふたりの背筋をはいあがつてくる。宝物の番人はいまどんな顔をしているか想像しなくてもよういにわかる。視界にいれる必要すらかんじない。ふたりは息のあつた足取りでかけていく。

「」のやうの三人の行く末はあえて語らないことにしよう。わかるひとには想像するのは容易いことだらうから書く」とさえも鬱陶しい。

「子がほしいといわれたんですか？」

沙那姫も怪訝な顔で紅菜にきく。紅菜は首をふるといつた。
「いや、いわれていなが恋をするところはありますことな
のだらう？」

その言葉に沙那姫の表情はいつしゅん迷いをみせる。螢蘭の教育をまじかでみてきた菜稚琉は紅菜のおもいこみに心あたりがあつた。
「まあ、結果的にはそうかもしませんが・・・」

沙那姫のにじらしたいいかたに紅菜はなにをおもつたのか沙那姫にいつた。

「そういえば、沙那姫にはわるいことをしたな。子がほしいとおもつたからとついできたのに私はいままで子をほしいとおもつたこと
がないから」

「いや、まあ」

沙那姫はさらに言葉をにじらす。子供がほしかったというよりはあなたがほしかったのだが、それをいうのもただ混乱をまねくよつなきがしてどどまる。そんな微妙な空気のふたりに菜稚琉は酒瓶を手にとりいつ。

「まあ、こまかいことはこじらうないです。のみましょう。今日はのんびりすり眠つて、明日はお休みをもらえるように私が螢蘭にお願いしてみます」

紅菜はお休みがもらえるかもしないことにしんせうれしそうな顔をすると菜稚琉に無邪気な顔をむけていつた。

「ほんとうに休みにしてもらえるようこいつてくれるのか？」

「ええ、お休みにしてもらいましょう。私もいろいろと螢蘭とおはなしがありますから」

菜稚琉はそういうて紅菜に微笑みかける。紅菜はうれしそうに笑うと酒をぐいっとのみほして菜稚琉から酌をうける。
そんななか螢蘭だけがかえってきた。そして、びかつとすわると杯

をさしだして菜稚琉に酌をもとめる。

「はい、紅菜。もつとのみなさい」

菜稚琉は酒を紅菜にとくとく注ぐ。行き場のない自分の杯をそのままにさいど催促したが、みじと無視される。かわりに沙那姫がそそいだ。そんな菜稚琉を尻目にみながら蟹蘭はいつ。

「紅菜、明日からしばらく休みだ

「どうしてですか？」

自分がきりだすまえにそういうふた蟹蘭に菜稚琉がきく。しかも長期休暇をおわせるようないかただつた。蟹蘭は質問にこたえるまえにぐいっと酒をのむといつた。もう決定しているとわかるいかただつた。

「紅菜の屋敷」とここに引越した。屋敷」とだとそつだな一月はかかるだろい。一月やすみをやる

紅菜の田が複雑な光を宿す。長期休暇は素直にうれしいが、いっしょに住むのは正直びみょうだつた。勝手きままな生活が、お山大将のような地位を剥奪されるよつなきがするのだ。しかし、口ごたえを許してくれそうな雰囲気ではない。紅菜はひとつ提案をだす。可決されればみつけもの。

「三日に一度は休みをくれる？」

「ああ、やる。引越しすれば三日に一度やすみをやるよ」

紅菜は蟹蘭のふたつへんじにきをよくしてうれしそうにわらつた。
(三日に一度も休みがあるならわるくないかも)

わうおもうと満更でもない。紅菜はうれしくなつて沙那姫に杯をさしだし酌をねだる。しかし、沙那姫は杯の口を掌でかくすといつた。

「飲みすぎは迷惑のもとですよ」

「まだ大丈夫だ」

「いいえ、いけません。さあ、もつ寝ましょい」

沙那姫はそういうと紅菜を寝床へと導く。菜稚琉と蟹蘭はそんなふたりをおくつた。そして、ふたりだけがのこされる。

「ああ、うううう。螢蘭、すこしおはなしがあるんです。」
菜稚琉の聲音と表情に螢蘭の酔いはいっきにひく。そして「はい」と返事をかえした。

まだまだ春の夜にはほじとおこ夜の帳のつめたさに背筋が凍つたのかと勘違いしてしまいそうな一瞬だ。月明かりにつかんだ顔が能面のような美しさをたたえていてなんともいえない。そして、いちばん最強なのはだれでしょ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3118e/>

綺語草子～草子シリーズ3～

2010年10月8日14時44分発行